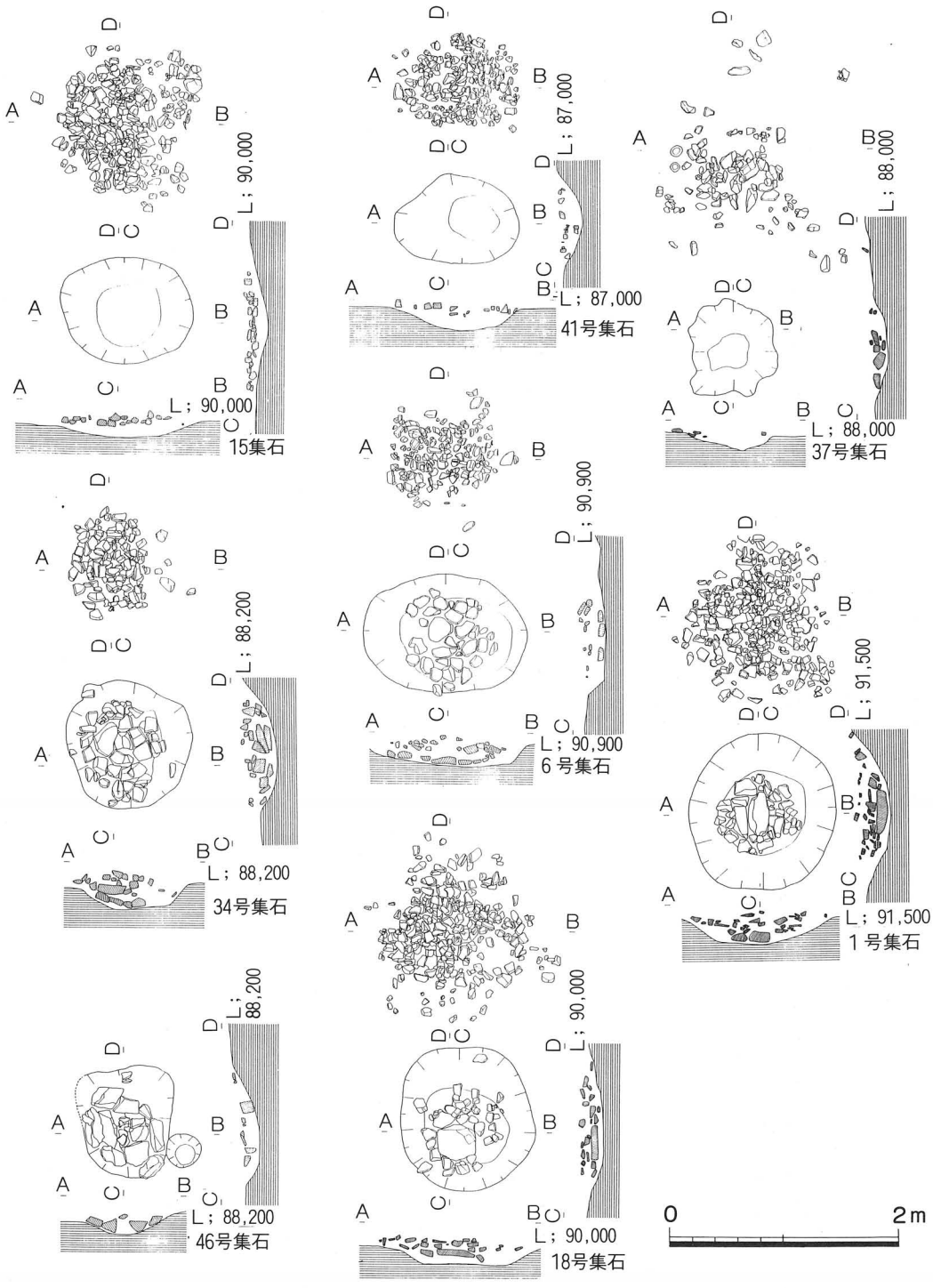


Fig57　Ⅳ区集石遺構実測図①（1／60）

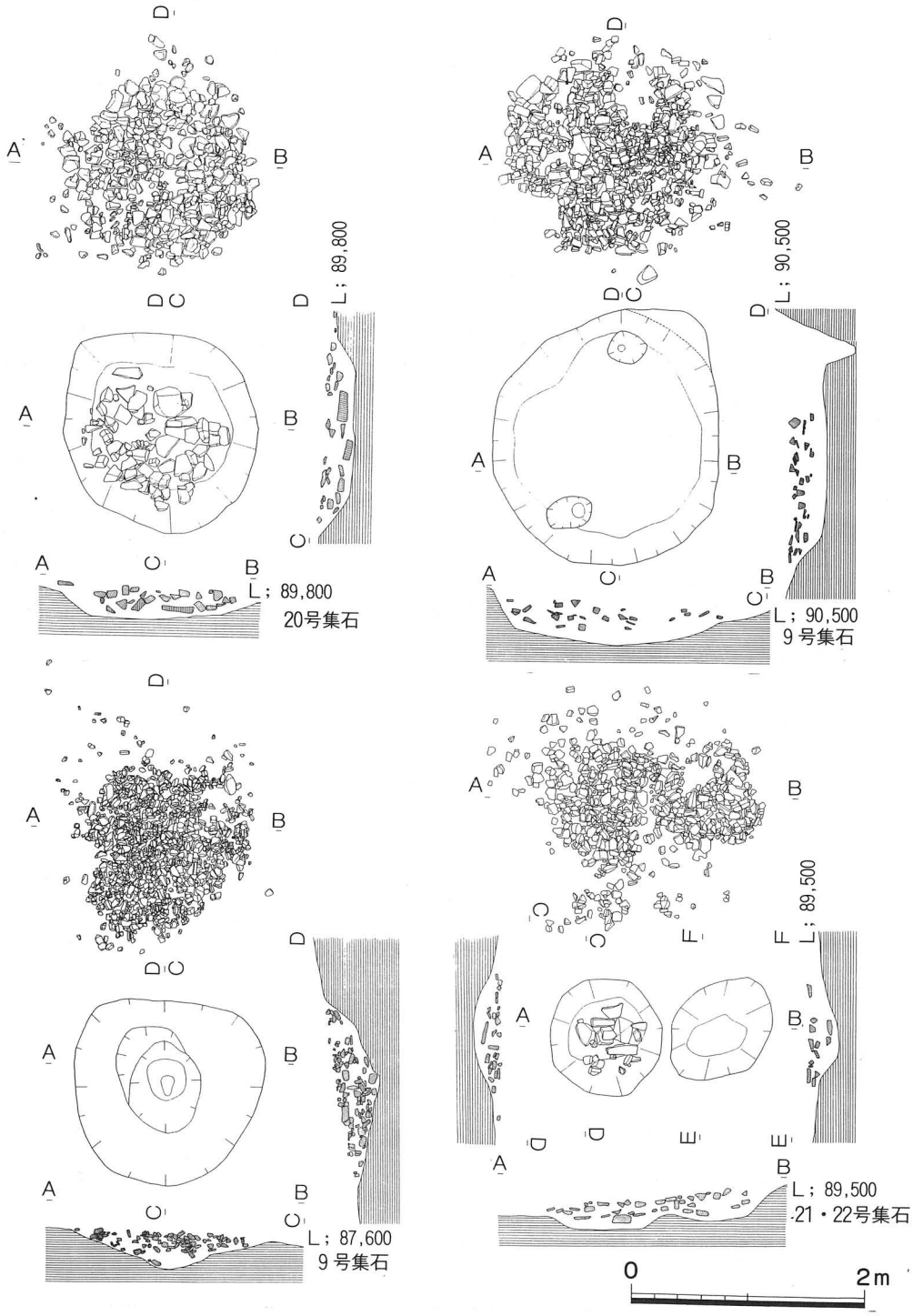


Fig58　Ⅳ区集石遺構実測図②（1／60）

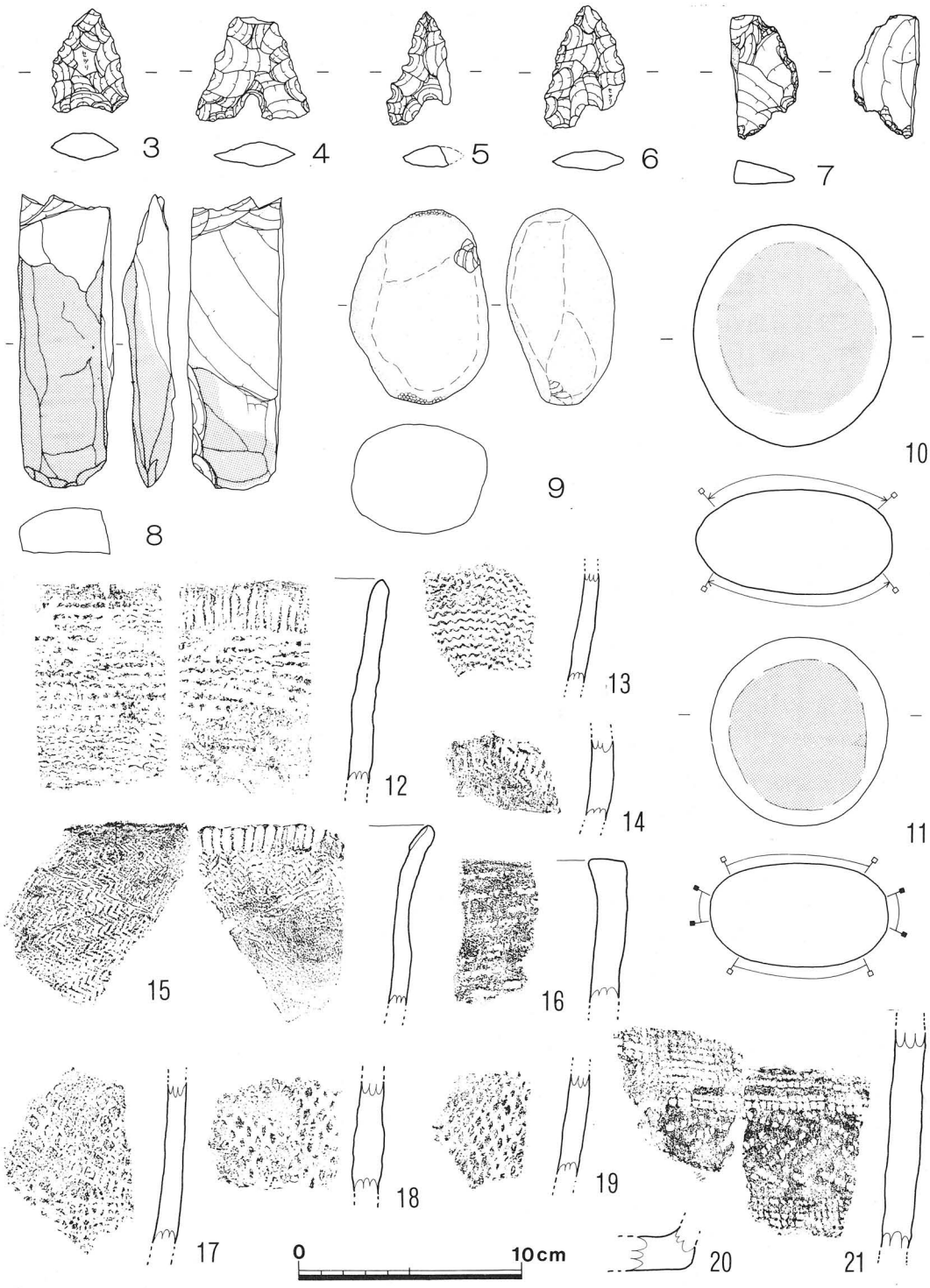


Fig59　Ⅳ区集石遺構内出土遺物実測図（２／３・３～７、他は１／３）

②Ⅳ区集石遺構出土遺物（Fig59）

3～6は石鏃である。石材は全てチャート製。7は横長の剝片を利用したスクレイパーである。流紋岩製。8は頁岩製の磨製石斧である。全体に調整が荒く、磨きも雑である。9は砂岩製の敲石で両端に敲打痕が残る。10および11は磨石である。11は周囲を敲石として利用する。石材は10が花崗岩製で、11は砂岩製である。12～15は山形押型文である。12と13は横方向に施文するタイプ、14と15は縦方向に施文するタイプである。12と15には口縁部裏に原体条痕が見られる。17～19は惰円押型文胴部片である。16・20～21は貝殻文円筒土器である。

3は5号集石、4は26号集石、5と16は24号集石、6は32号集石、7～9は1号集石より出土している。10～12は37号集石、13と20は25号集石、14は28号集石、15は19号集石より出土している。17は10号集石、18は9号集石、19は27号集石、21は42号集石より出土している。

③山形押型文土器（Fig60・61）

笠下遺跡で出土した山形押型文土器は、そのほとんどが横に施文するタイプで、まれにベルト状のもの（31）や縦方向のもの（25・26・29・30）、横方向と縦方向が一緒になったもの（28）がある。また、口縁部が直行するものがほとんどで、外反するもの（29など）は少ない。外反するものは、施文を縦方向に行うものに多いようである。

口唇部裏の施文は、原体条痕を施したあと横方向に原体ころがしを行うものがほとんどで、30のように本来原体条痕のところに原体ころがしをするものは極めて少ない。まれに刻目を施すものがある。(27) また、25のように表は縦方向、裏は横方向というのも少ないようである。

底部も若干出土しているが、山形押型文のものは全て尖底であった。施文は一番下まで行ない、空白は見られない。

また、山形押型文で、貝殻円筒文土器の影響からか、器壁の異状に厚いものもある。(37)

④惰円押型文土器（Fig61）

41・42は口唇部内側に原体条痕を施す。45・46・43は原体を横方向にころがす。48・49は内側に施文を行わない。47は刻目を入れている。50は外反する口縁の内側に太い凹線を数条斜方向に施す。44も外反する口縁であるが、内側に山形押型文を横方向に施文する。53は内側は無文であるが、上部は粗大な惰円で下部に荒い山形文を施している。52・53は器壁が厚さ1㎝を超える。45は口縁部が内傾する。

⑤格子目押型文・貝殻文円筒土器（Fig62･63）

54と55は格子目押型文である。56～59は貝殻文円筒土器の口縁部である。施文方法によって貝殻腹縁文(56・60・63など)、貝殻列点文(57・58)、貝殻条痕文（61）土器などと呼称されている。65は竹串状工具を斜方向に突き刺した特異な土器である。器壁の厚さ、胎土ともに円筒土器のものである。66～68も同質で、貝殻腹縁で横方向に連続して施文するものである。66と同類のものが大分県荻町政所遺跡より出土している。

⑥無文土器（Fig63・69～72）

69は口縁が屈曲ぎみに開く。70は口唇部断面が三角形を呈し、直行ぎみに開く。71は口縁が内傾する。72は無文の底部である。にぶい尖底になると思われる。

⑦撚糸文土器（Fig63・73～76）

73は器壁が厚く、口唇部断面は三角形を呈す。74～76は口縁部がラッパ状に開き、外面に撚糸を縦方向に施文し、内側には斜行線を施す。76は口唇部にも施し、74・75に比べやや線が太め、深めである。

⑧その他の土器（Fig63・77～85）

77は外側にミミズバレ状の突帯がつくもので轟系土器と思われる。78はラッパ状に広く口縁下外側に貝殻腹縁を一条横方向に施文し、内側に斜行線を施す。79は貝殻腹縁文、80は貝殻裂点文のバリエーションと思われる。81も貝殻腹縁文と思われる。穿孔されている。82・84

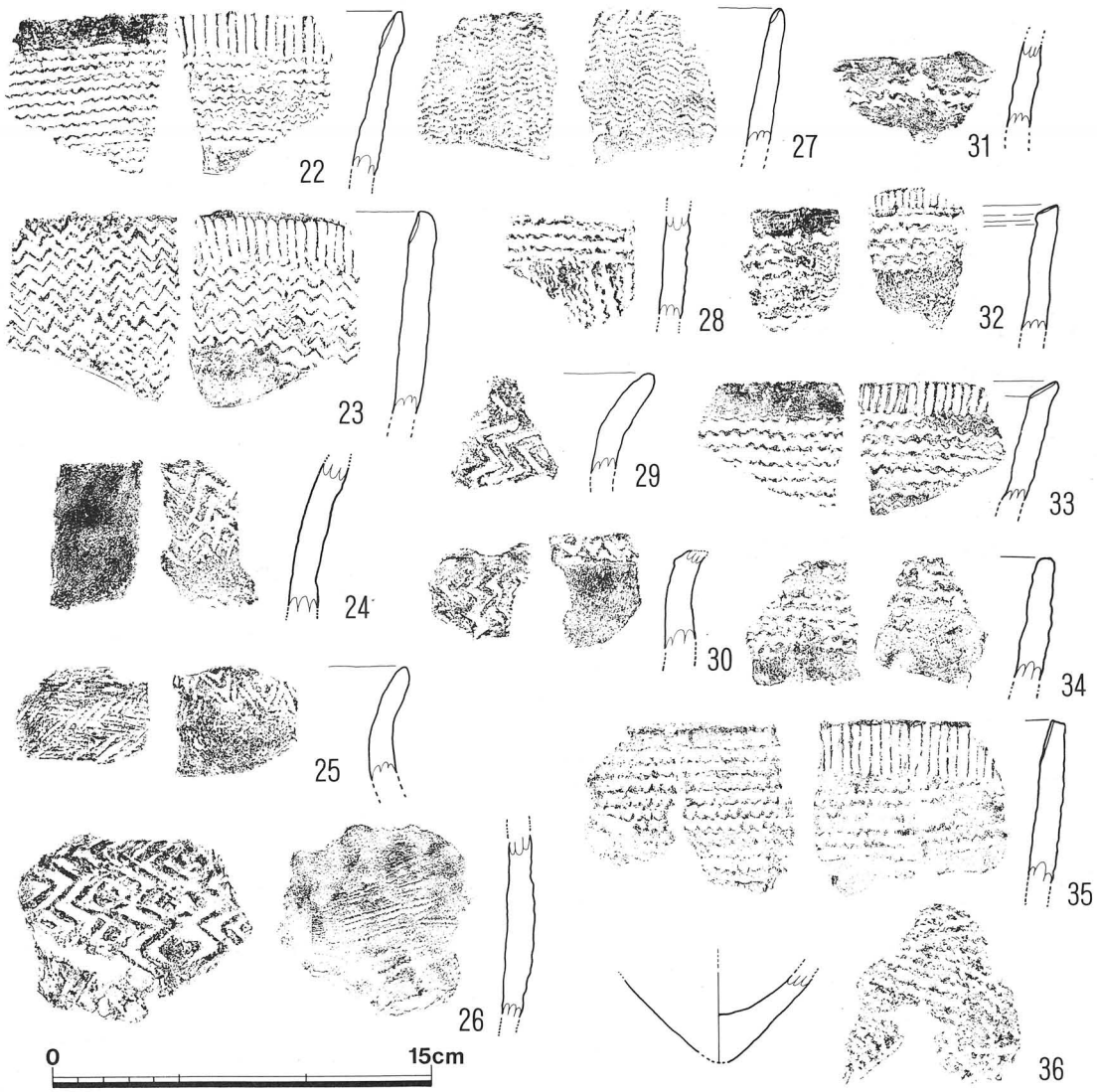


Fig60　Ⅳ区出土土器①山形押型文（1／3）

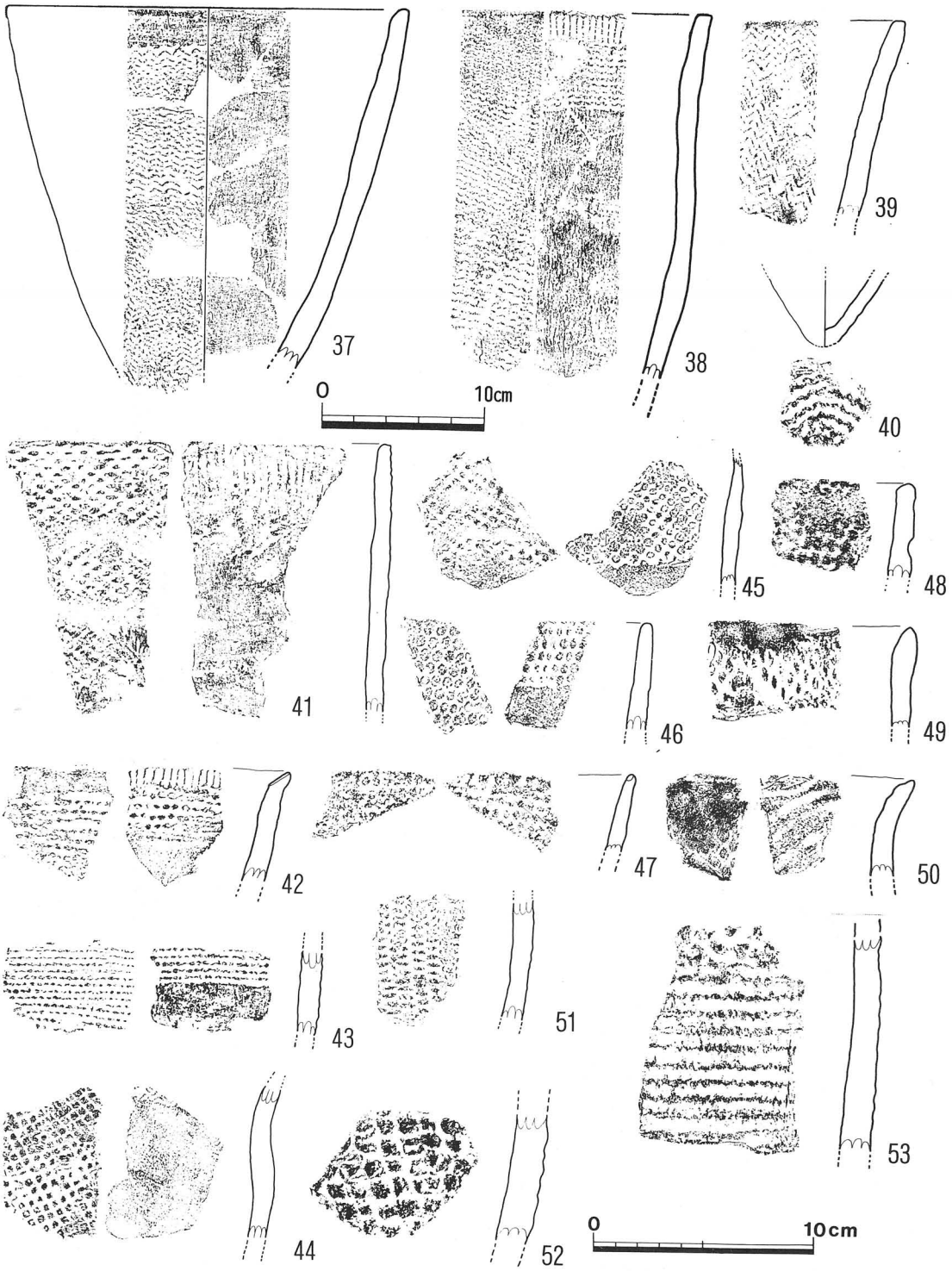


Fig61　Ⅳ区出土土器② 惰円押型文（1/3・1/4…37・38）

は撚糸を網目状にして施文したものと思われる。83は口縁部が屈曲気味に外反し、口縁部を内側につまみ出して作っている。無文である。85は貝状工具によるヘラ描き文である。

⑨石　鏃（Fig64・65）

石材はほとんどがチャート製で、まれに佐賀県腰岳産黒曜石（86・87）、安山岩（88・89）、大分県姫島産黒曜石（139）を使用している。139以外は総てアカホヤ層下（Ⅲ層下）よりの出土である。石鏃には抉りの浅いもの（90～92・99など）と鍬形鏃と呼ばれる抉りの深いもの（98～120など）、長身のもの（124～134など）がある。その他、138や140のような特殊な形をしたものや三角鏃（141～145）なども出土している。

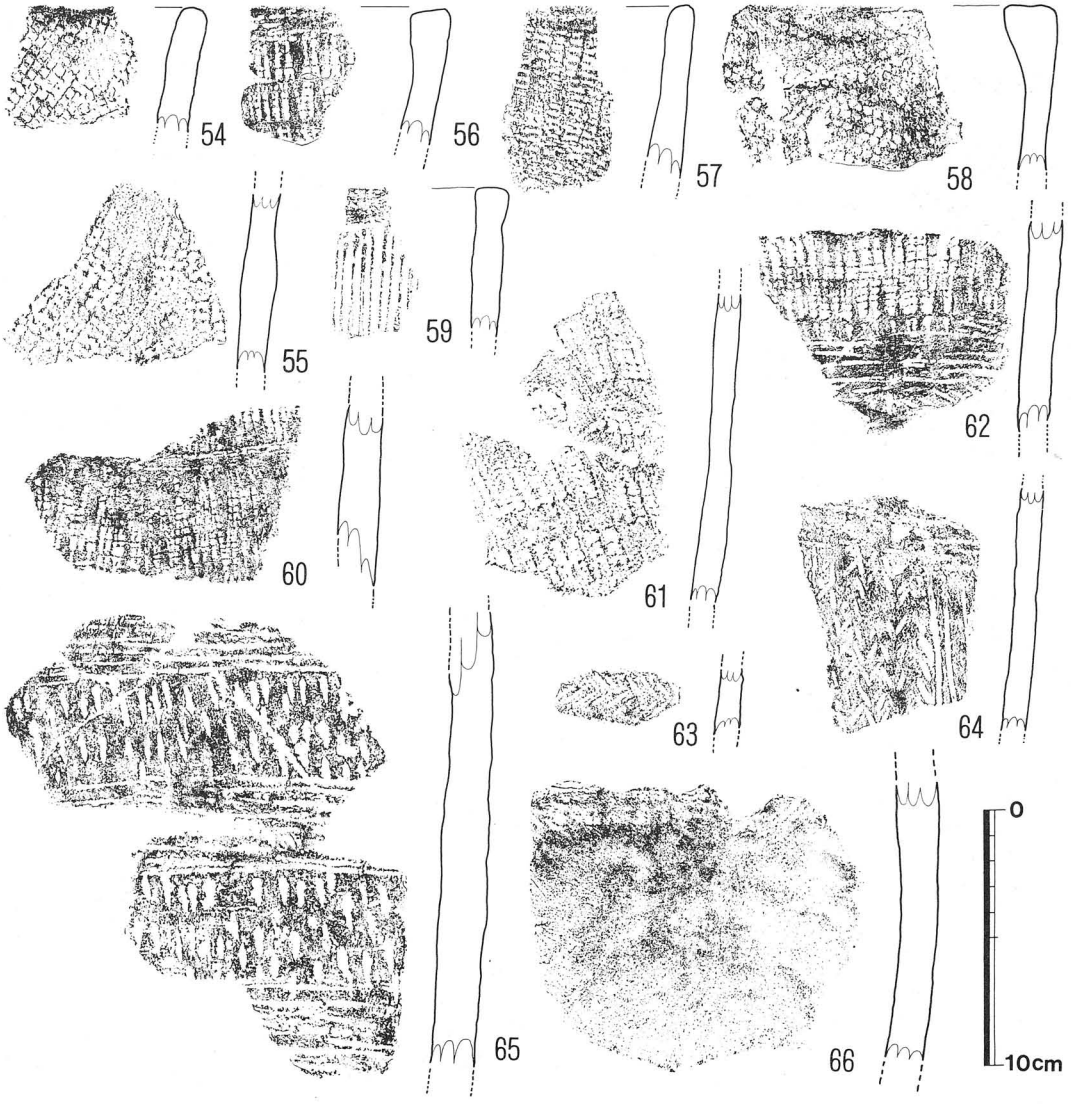


Fig62　Ⅳ区出土土器③格子目押型文・貝殻文円筒土器（1／3）

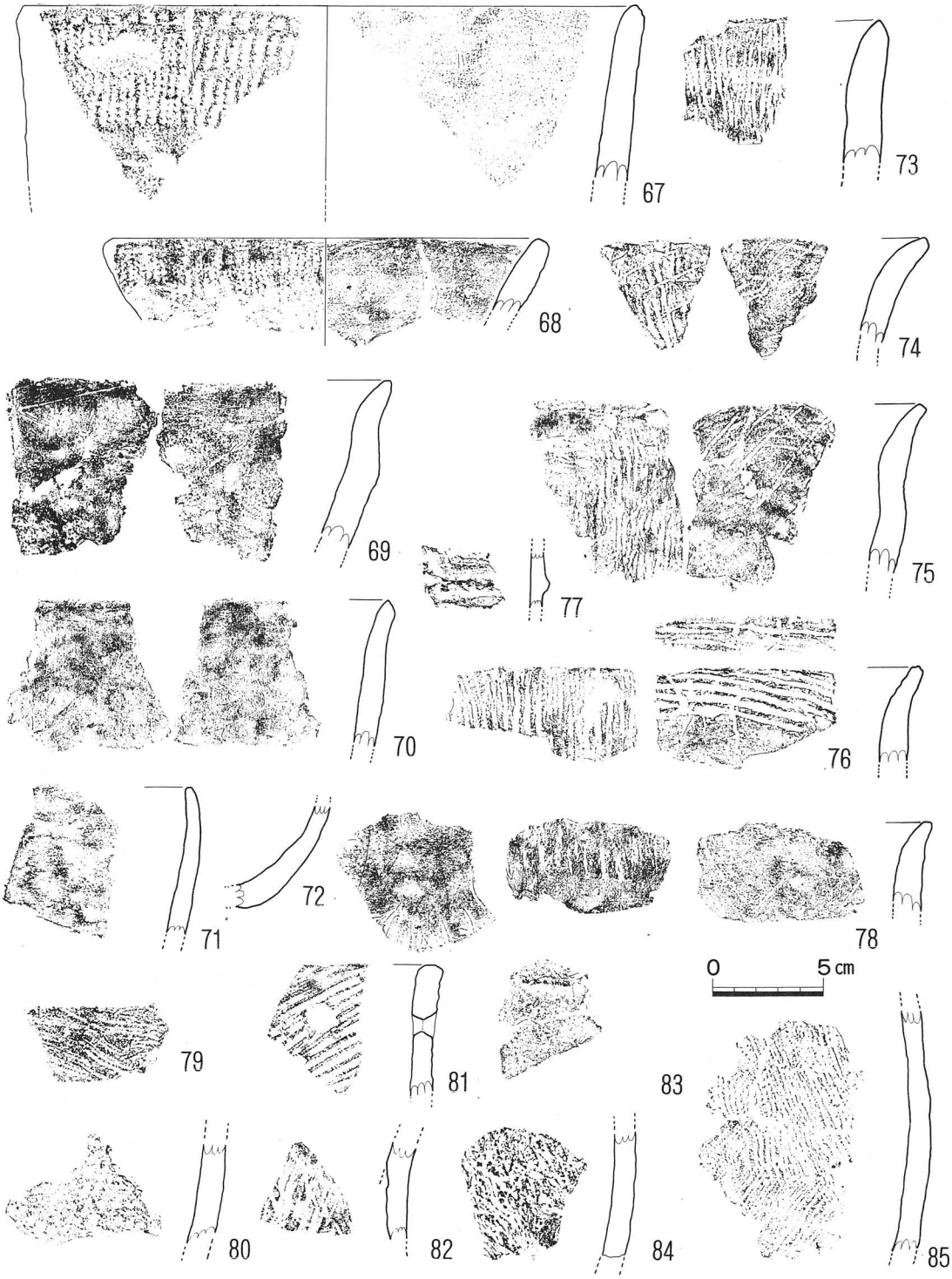


Fig63　Ⅳ区出土土器④無文・撚糸・その他（1／3）

⑩尖頭状石器（Fig65・141～155）

縦長のやや優位な二等辺三角形状を呈する石器で、東九州や瀬戸内の早期遺跡に頻繁に出土している。石材は全てチャート製である。

⑪小型石器・その他の石器（Fig66・67）

156～160は不明石器である。156 は全周を細かい加工で柳葉状に仕上げている。全長 1.7cm、全幅 0.1cm、最大厚 0.3cmを計る。157 は欠損残部分と思われる。158 は幅広の剝片をトの字状に加工している。加工は成形のみにとどめる。特にノッチ部を丁寧に加工する。159 は一部自然面を残すものの全周に加工を施し、鋭端部を作る。160 は縦長の剝片の基部調整を行ったもので、断面は三角形を呈す。尖頭部を欠く。

161は長方形の剝片の側辺に使用痕を有する剝片である。 162は半截した剝片を半月状に加工したスクレイパーである。163と166は主要剝離面を残すスクレイパーである。 166は内厚部分の加工を丁寧に施す。 164もスクレイパーと思われる。全周を丁寧に加工する。一部使用痕が顕著である。

165・169～171・175は石錐と思われる。 165には一部自然面が、169と170には主要剝離面が残る。 171は尖頭状石器とも考えられる。

167a ・167b ・168 は円形スクレイパーと思われる。167a と167b には一部自然面が残る。主要剝離面は全てに残る。

172 は打面を有する縦長の剝片の一側辺に加工を施すスクレイパーである。反対側の側辺に顕著な使用痕が観察される。 173は主要剝離面を持つスクレイパーで全体の３分の２を細かく加工している。

179 は石槍の尖頭部と思われる。全体に荒い加工である。175 は石錐と思われる。やや肉厚の剝片をノッチ状に両側から施し錐部を作り出している。一部自然面を残す。176 は不明石器である。円礫より得られた自然面を有する不定形の剝片の二側辺（うち一辺は打面をカットする）を加工し尖端部を作り出している。

石材は 156が腰岳産黒曜石、 159が姫島産黒曜石、172・175～175は流紋岩、174が安山岩で他は全てチャートである。

PL28　Ⅳ層遺物出土状況

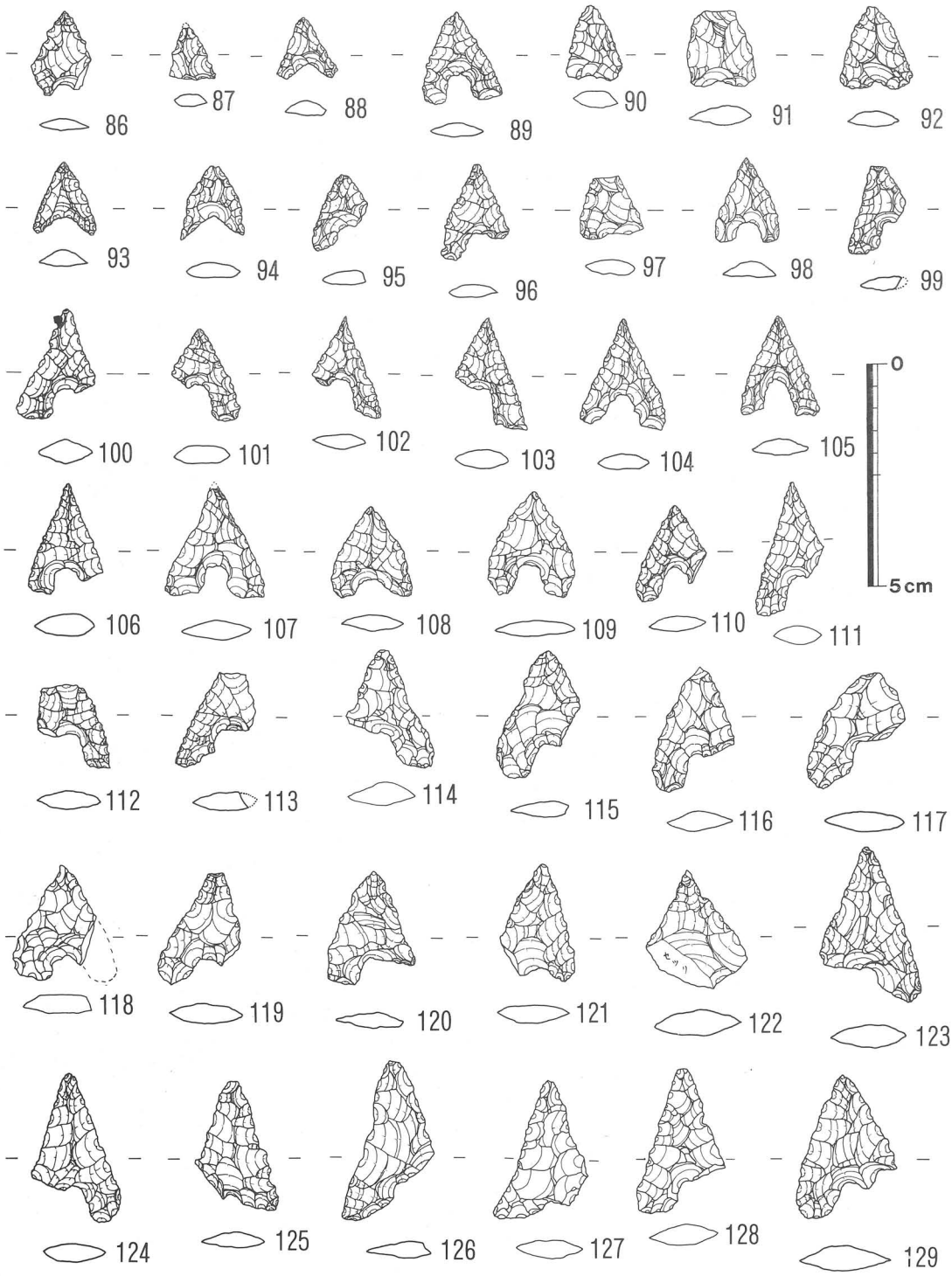


Fig64　Ⅳ区出土石器②石鏃（2 / 3）

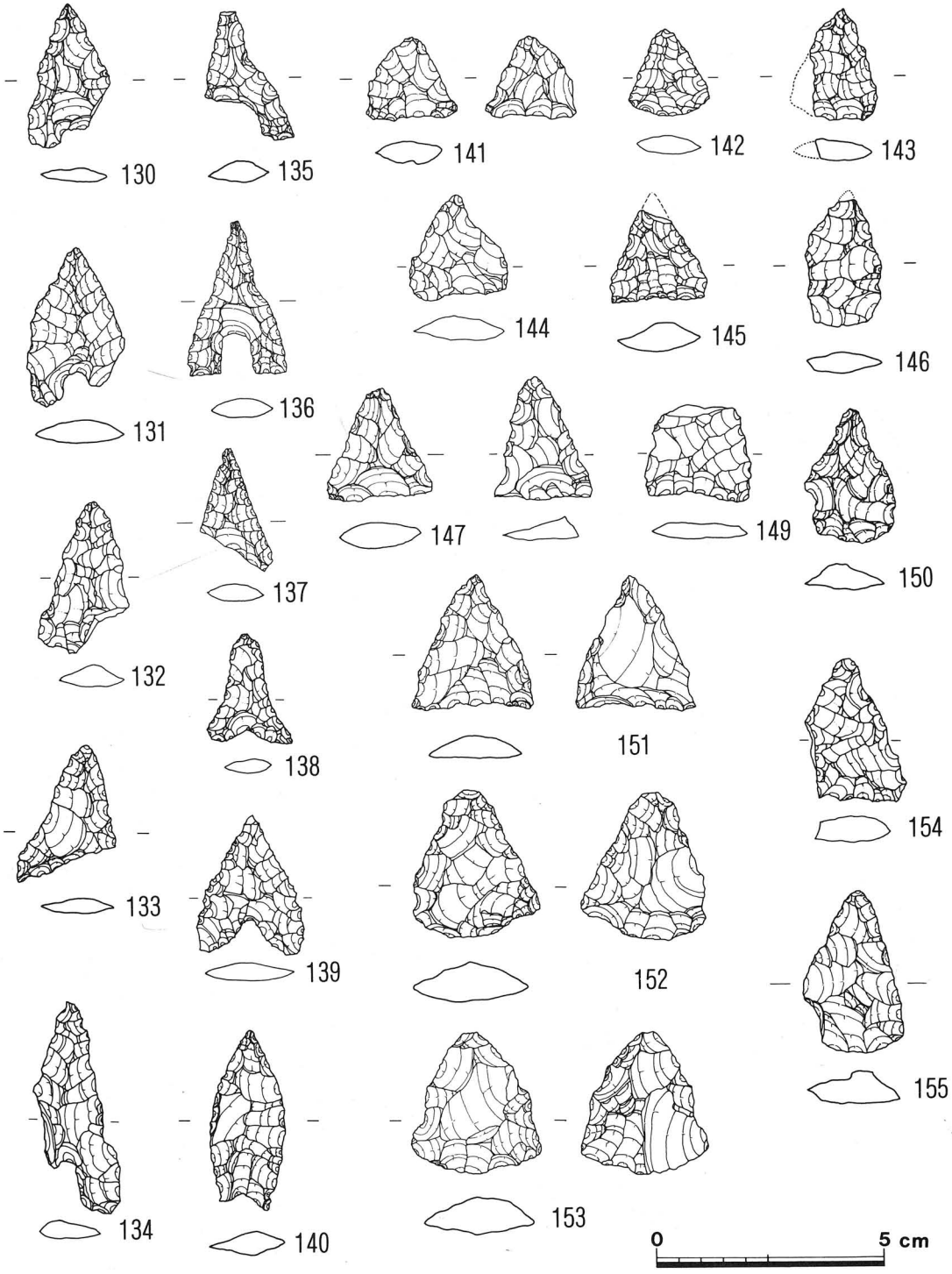


Fig65　Ⅳ区出土石器③石鏃・尖頭状石器（2 / 3）

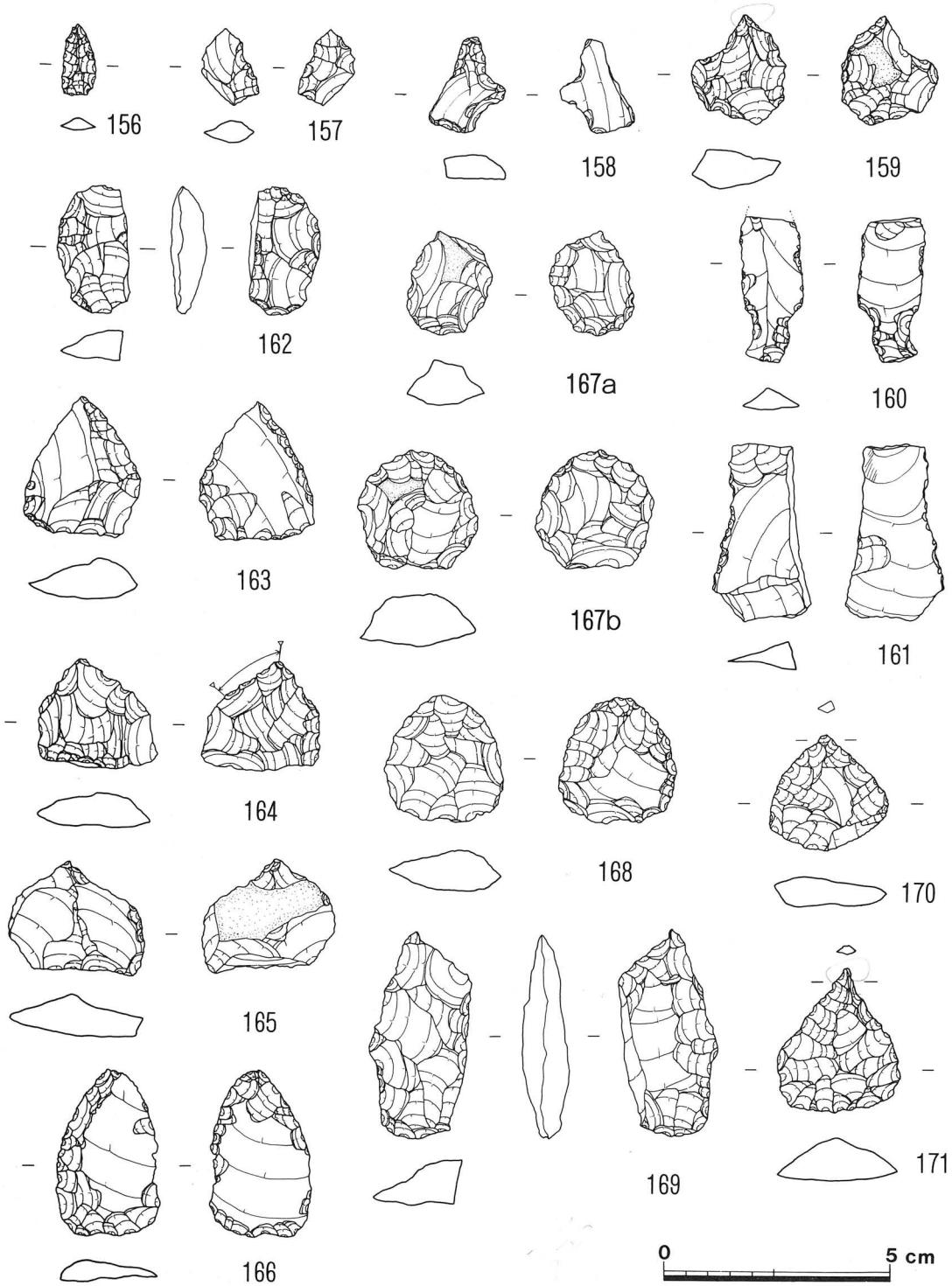


Fig66　Ⅳ区出土石器④石錐・スクレイパー等（2／3）

⑫使用痕を有する剝片（Fig68～70・177～128）

石材は安山岩利用のもの（191）頁岩利用のもの（206・207）以外は全て流紋岩製の主要剝離面を有する剝片を使用している。剝片には横広のもの（197・120など）、縦長のもの（183～189など）、不定形なもの（194・126など）など様々利用されている。

また、打面未加工のもの（185～188など）や打面をカットするもの（177・180など）がある。使用部位別に見ると、剝片の凸部使用のもの（177・190など）、凹部使用のもの（178～179など）二ヶ所以上使用のもの（198・120～121など）、端部使用のもの（193・194など）がある。

⑬スクレイパー（Fig70～71・209～223）

209 は柳葉形を呈す。全周に荒い加工を施す。切断によって得られた剝片を円状に加工して作り出している。211 は全周を加工し円形様に仕上げている。212 は切断によって得られた剝片の孤状部を加工して作り出す。鋭端部に顕著な使用痕が観察される。213 は縦長の剝片に数回の調整を施すだけで仕上げている。214 は幅広の剝片を半分に折って得られた剝片の肉厚の方に荒い加工を施して仕上げている。反対側の側辺に顕著な使用痕を残す。215 は自然面を有する幅広の両端を加工して仕上げている。打面をカットしている。216 は惰円状を呈する剝片に数回の打撃を行って仕上げている。押し削る、引き削る等の用途が考えられる。

217 と 218は棒状のものを削るのに使用されたと思われる。両方とも主要剝離面を有す。218 は 217よりも丁寧に加工される。側辺部は使用痕が顕著である。219 は円礫より得られた剝片の打面を除去し、全周に微加工を施して仕上げている。220 は幅広の剝片の肉厚部を加工して

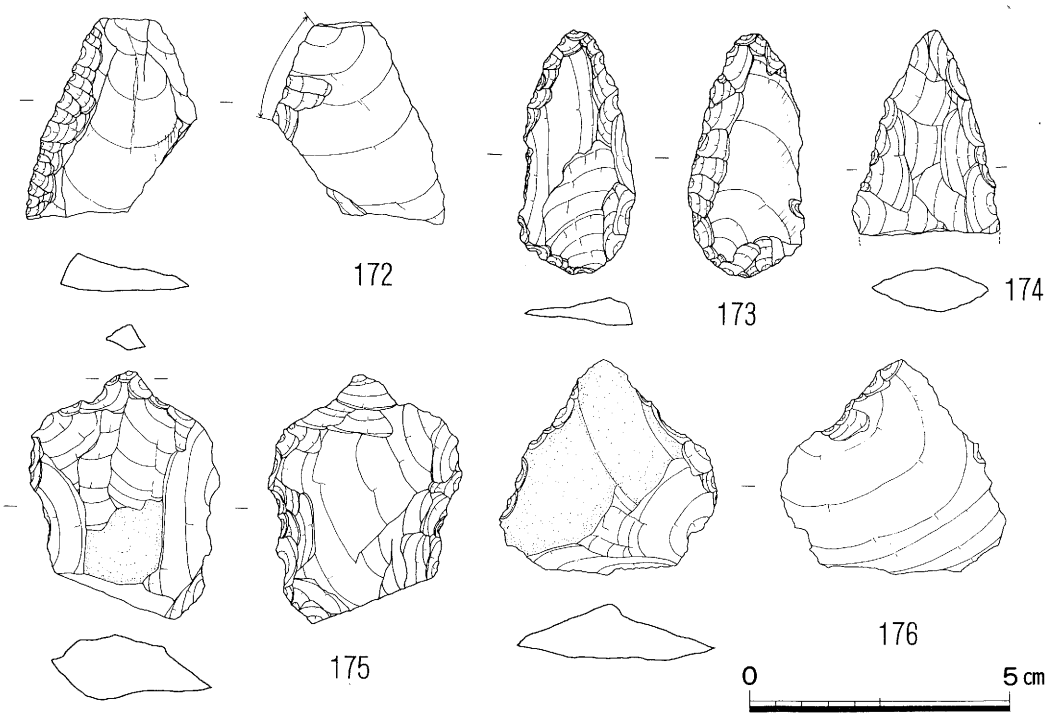


Fig67 Ⅳ区出土石器⑤石錐・石槍・スクレイパー（2／3）

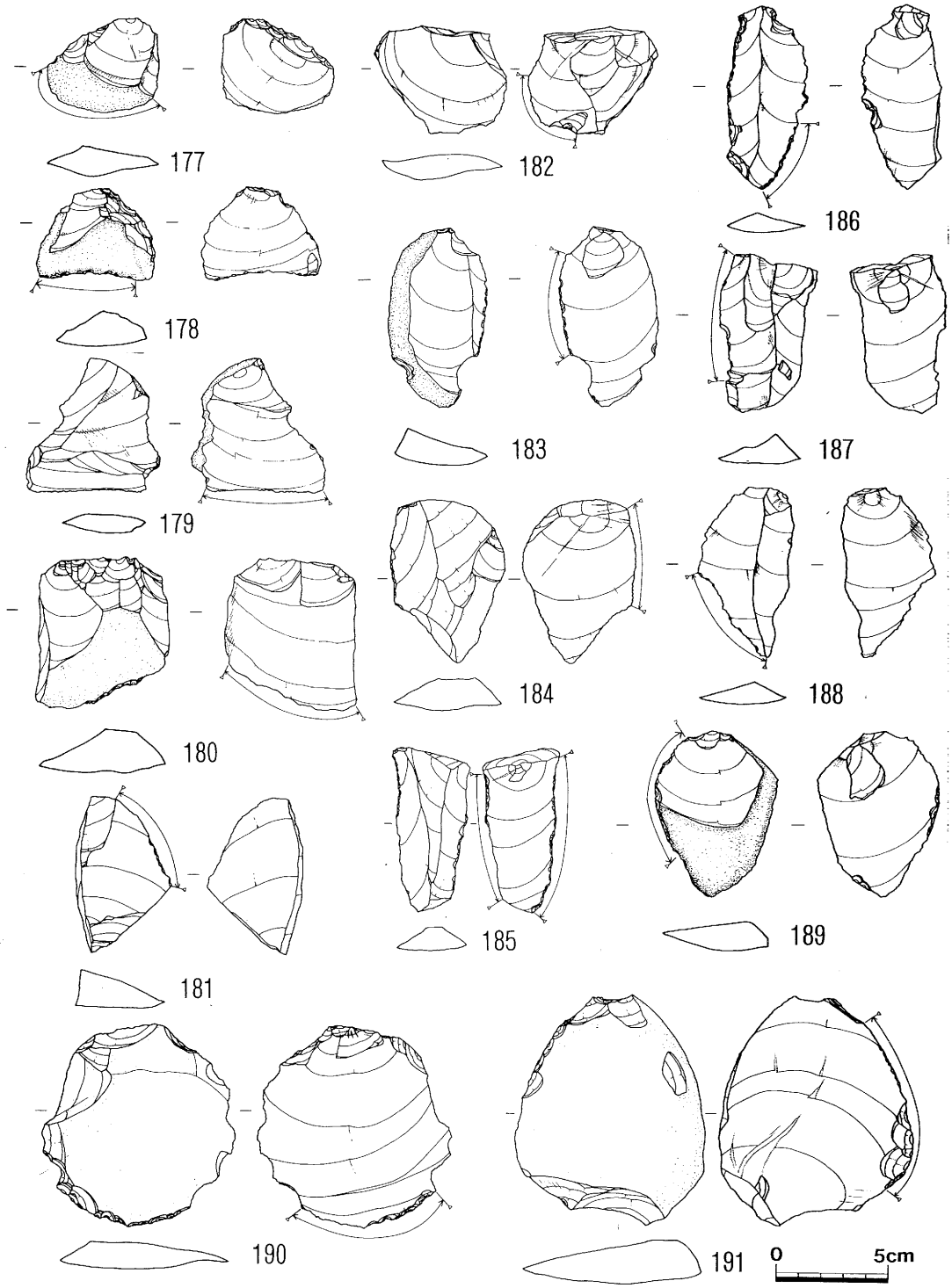


Fig68　Ⅳ区出土石器⑥使用痕を有する剥片（1／3）

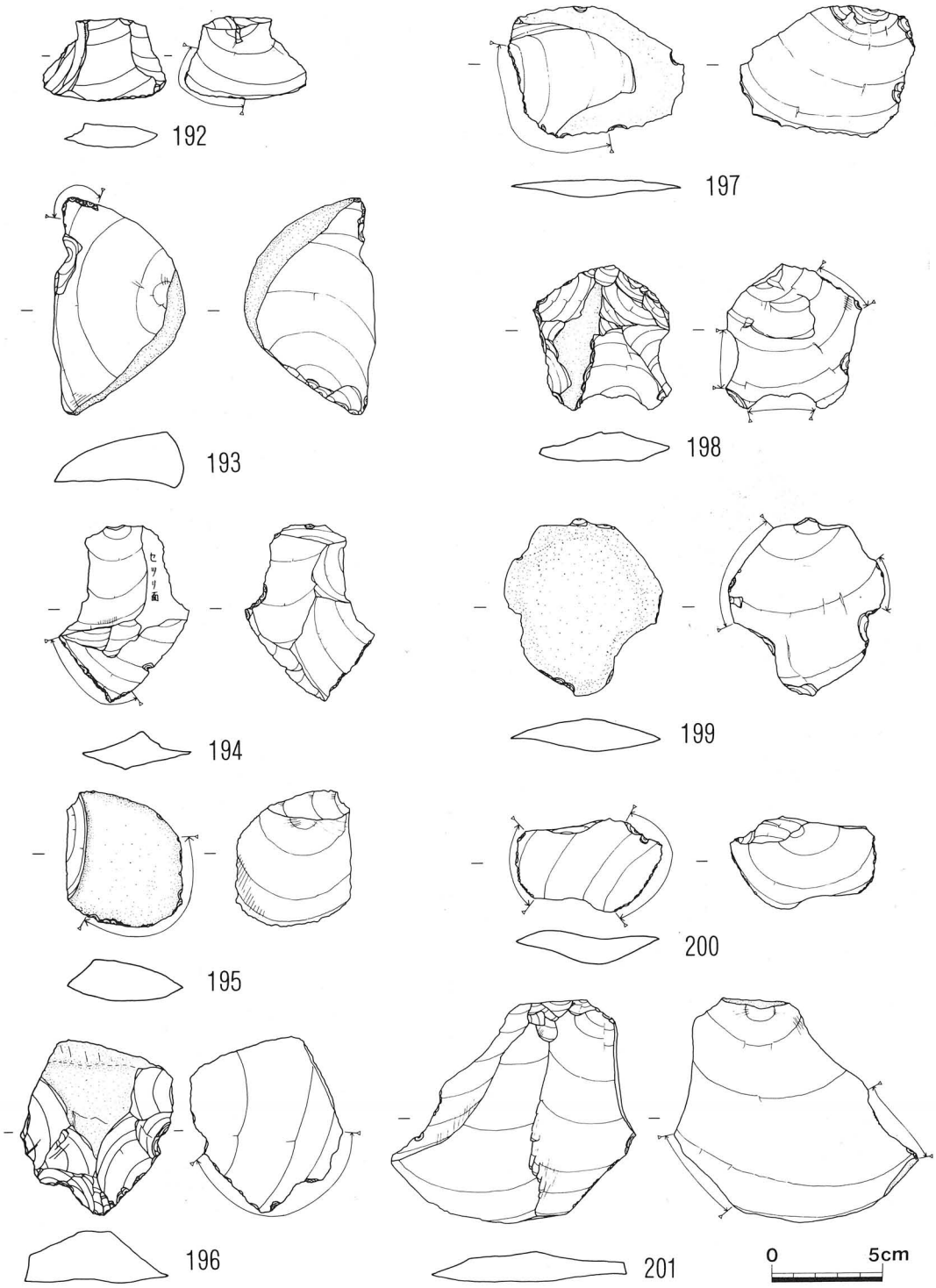


Fig69 Ⅳ区出土石器⑦使用痕を有する剥片（1 / 3）

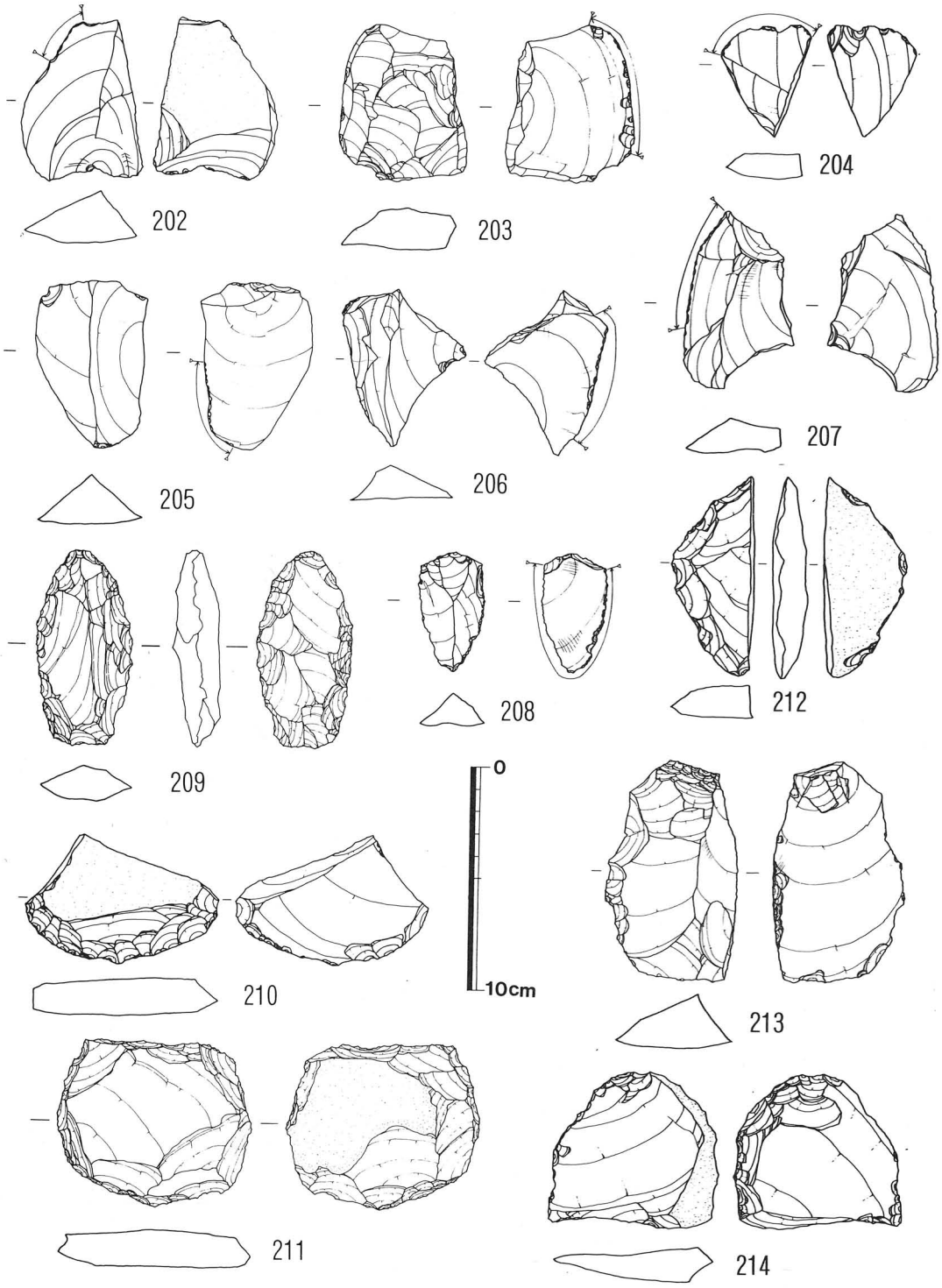


Fig70　Ⅳ区出土石器⑧使用痕を有する剥片・スクレイパー（1／3）

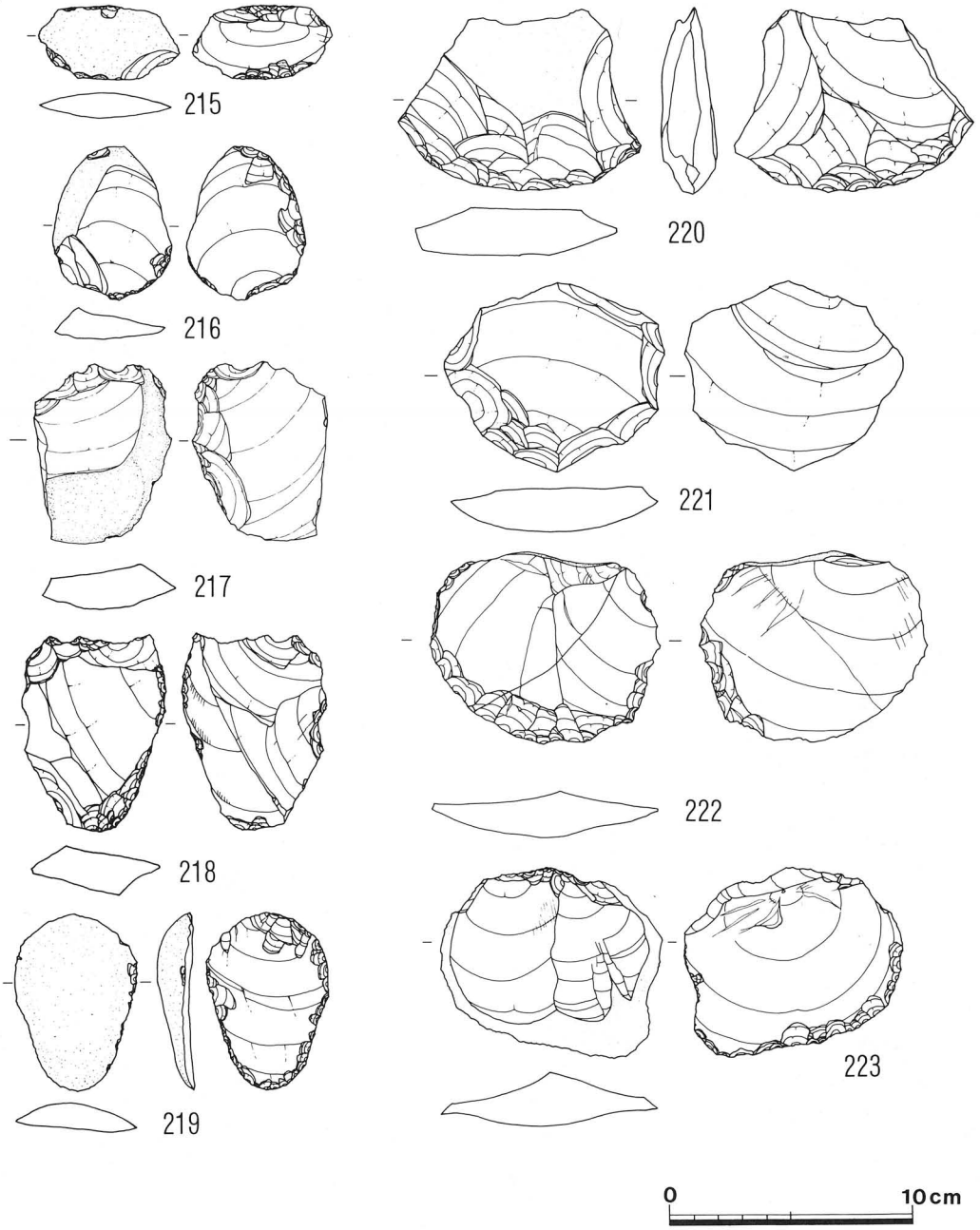


Fig71　Ⅳ区出土石器⑨スクレイパー（1／3）

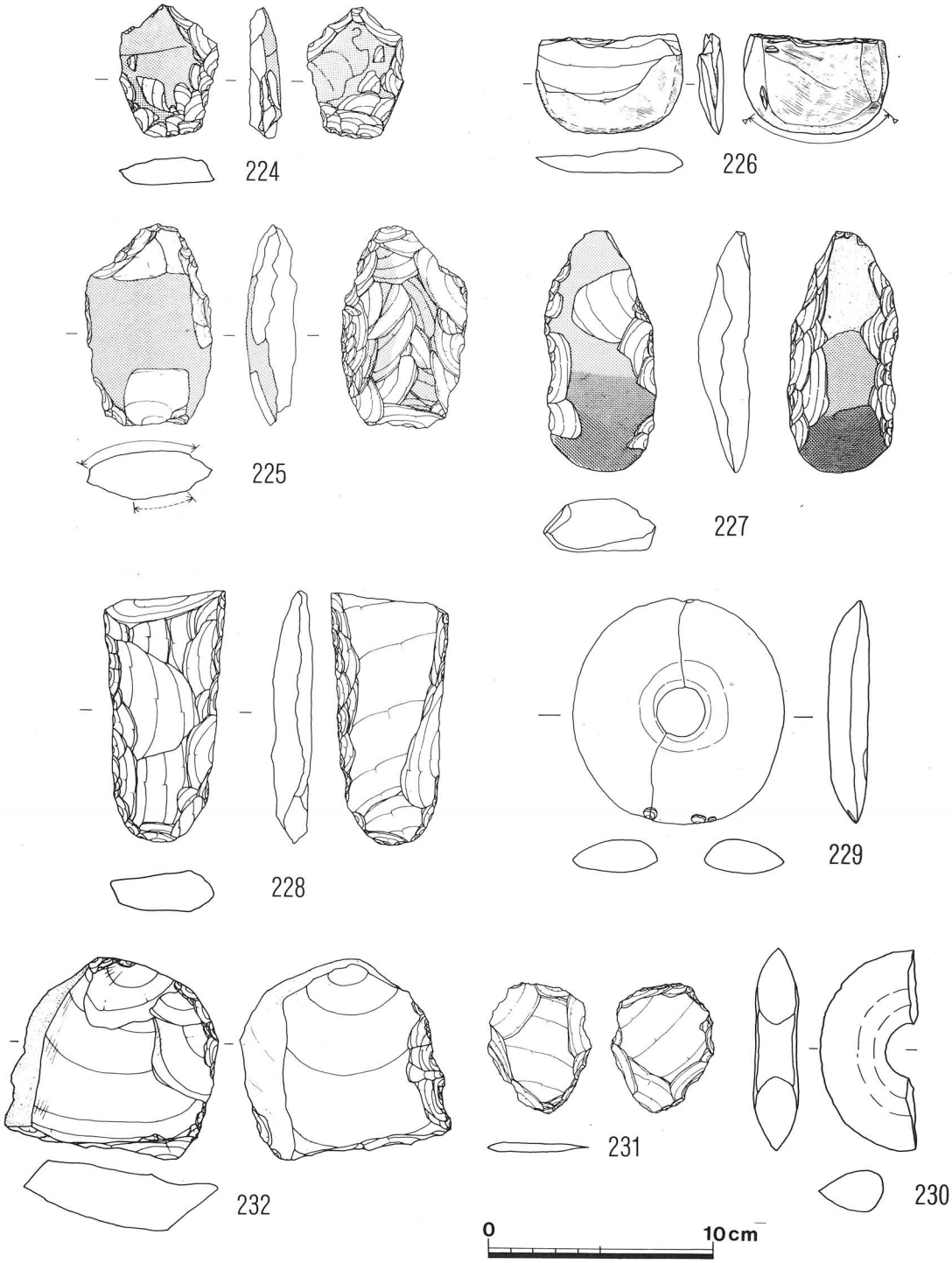


Fig72　Ⅳ区出土石器⑩ 石斧・二次加工を有する石器（1 / 3）

弧状に仕上げている。風化が顕著である。221 は扁平な剝片の全周を荒く円形に加工して仕上げている。222 は打面が自然面の円形の剝片の凸部を細かく加工して作り出している。223 もほぼ円様な作りであるが、加工はほぼ半分しか行わない。石材には安山岩使用のもの（211)、砂岩使用のもの（217・220・221)、頁岩使用のもの（ 211）と流紋岩使用のもの（その他）がある。

⑭石　斧（Fig72・224～230)

224と225は石斧としたが、剝離部を一部残して丁寧な研磨を施すもので、未製品あるいは再利用石器とも考えられる。どちらも砂岩製。226 は1号溝状遺構内出土品である。尖端部のみであるが、全体に入念な研磨が施される。弧部に刃こぼれが見られる。頁岩製。227 は、ほぼ完形品で全長11cm、最大幅5cm、最大厚2.3cmを計る。加工は最小限に止め、荒研ぎのあと、先端部を細かく研磨して刃部を作り出しているが直線でない。石材は千枚岩の一種と思われる。228 は打製石斧である。一部欠損している。加工は荒く、主要剝離面を残す。刃部も鈍く仕上げている。砂岩製。229と230は環状石斧である。229 は長軸10.2cm、短軸 9.4cm、内径2cm、最大厚1.8 cmを計る。229 は半面が扁平で刃部は半身より下につく。229は砂岩製、230には花崗斑岩を使用している。

⑮二次加工剝片（Fig72・231～232)

231 は扁平な剝片の周囲を荒く加工したもので一部刃こぼれが顕著である。結晶片岩製。232 は打面が自然面の部厚い剝片の両サイドに加工を施したものである。流紋岩製。

⑯石　核（Fig73～75・153～163)

153～154は1回あるいは数回の打撃によって打面を形成し、そこから剝片をとる石核である。156～157・162～163は交互剝離によって剝片を取る石核である。161 はやや拳大の礫を打面を転移させながら剝片をとる石核である。159 は打面を形成せず、自然面からそのまま一定方向に剝片をとっていく石核である。石材は159 が安山岩であとは全て流紋岩を使用している。

⑰礫　器（Fig75～78)

礫器には拳大の流紋岩や頁岩（166･167･171）　などの石材を両端から交互剝離によって丁寧に打ち欠いて形を整えるタイプ（174～170）と、人頭大の砂岩質の河原石の半面に自然面を残す薄手の剝片の全周あるいは一部を粗く打ち欠いたタイプ（172～187）がある。まれに端部に磨痕の見られるもの（174 ）、端部にノッチを形成するもの（180・185）がある。188 は自然面を打面とし周囲より打撃を加え剝片をとった砂岩質の石核である。

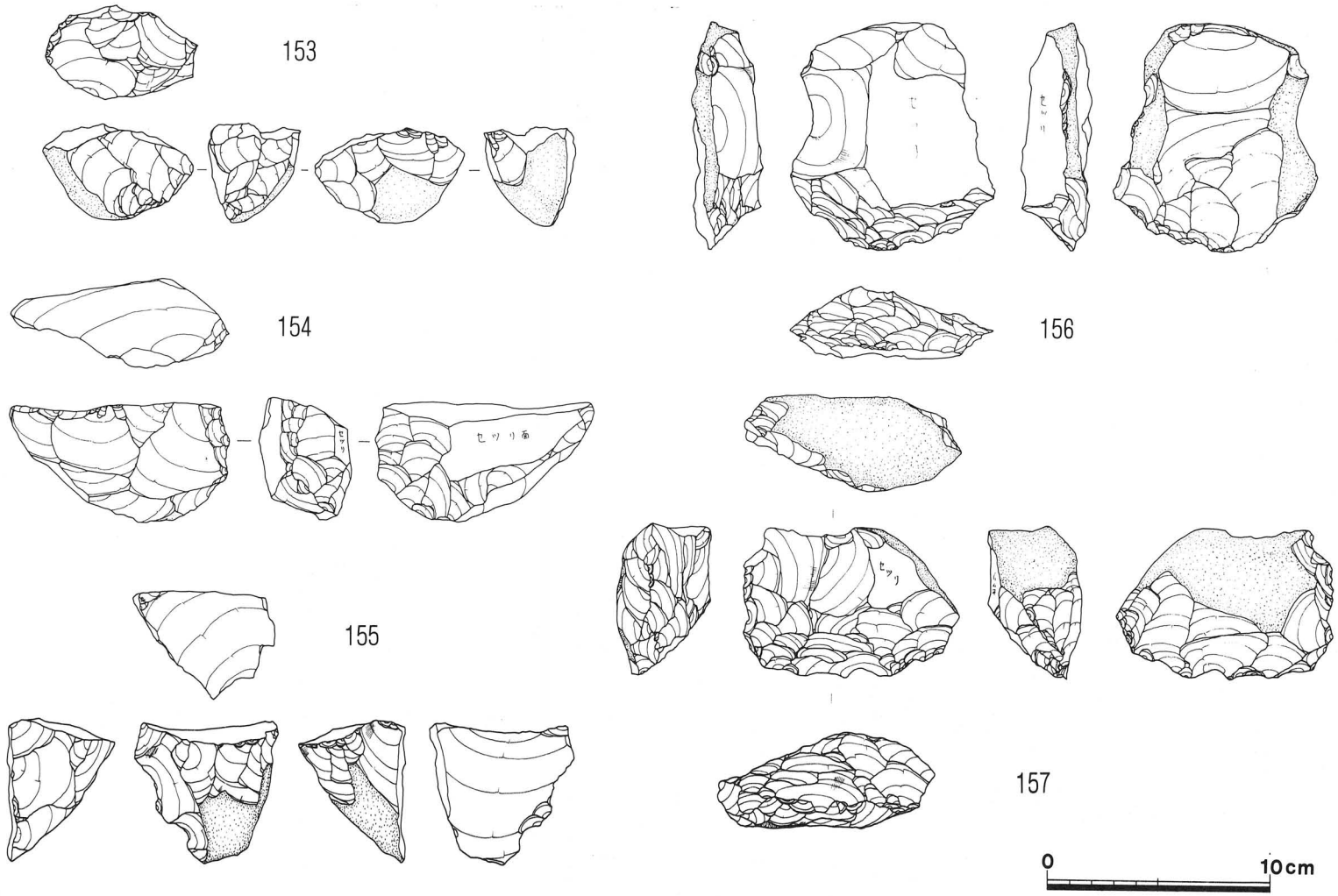


Fig73　Ⅳ区出土石器⑪石核（1 / 3）

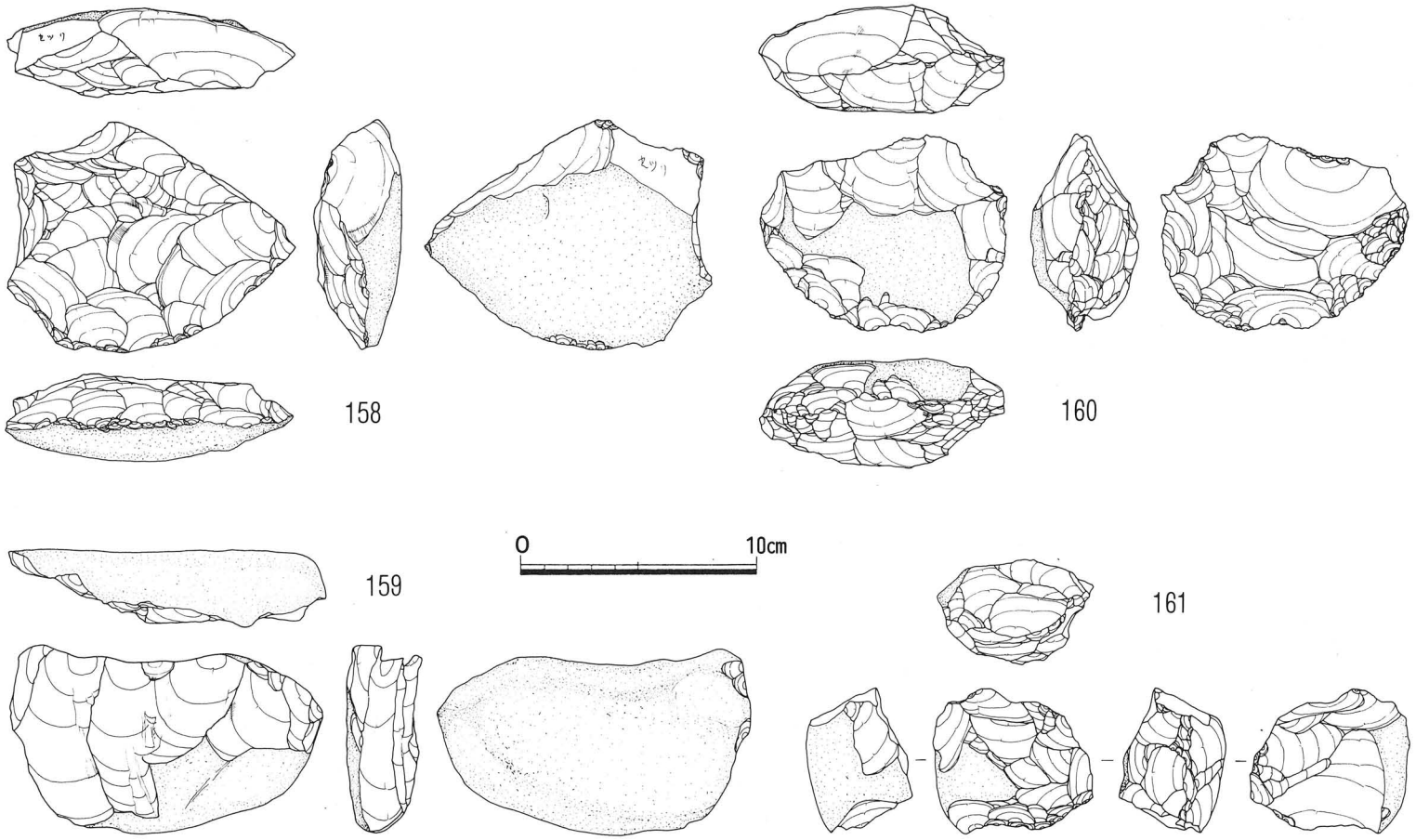


Fig74　Ⅳ区出土石器⑫石核（1 / 3）

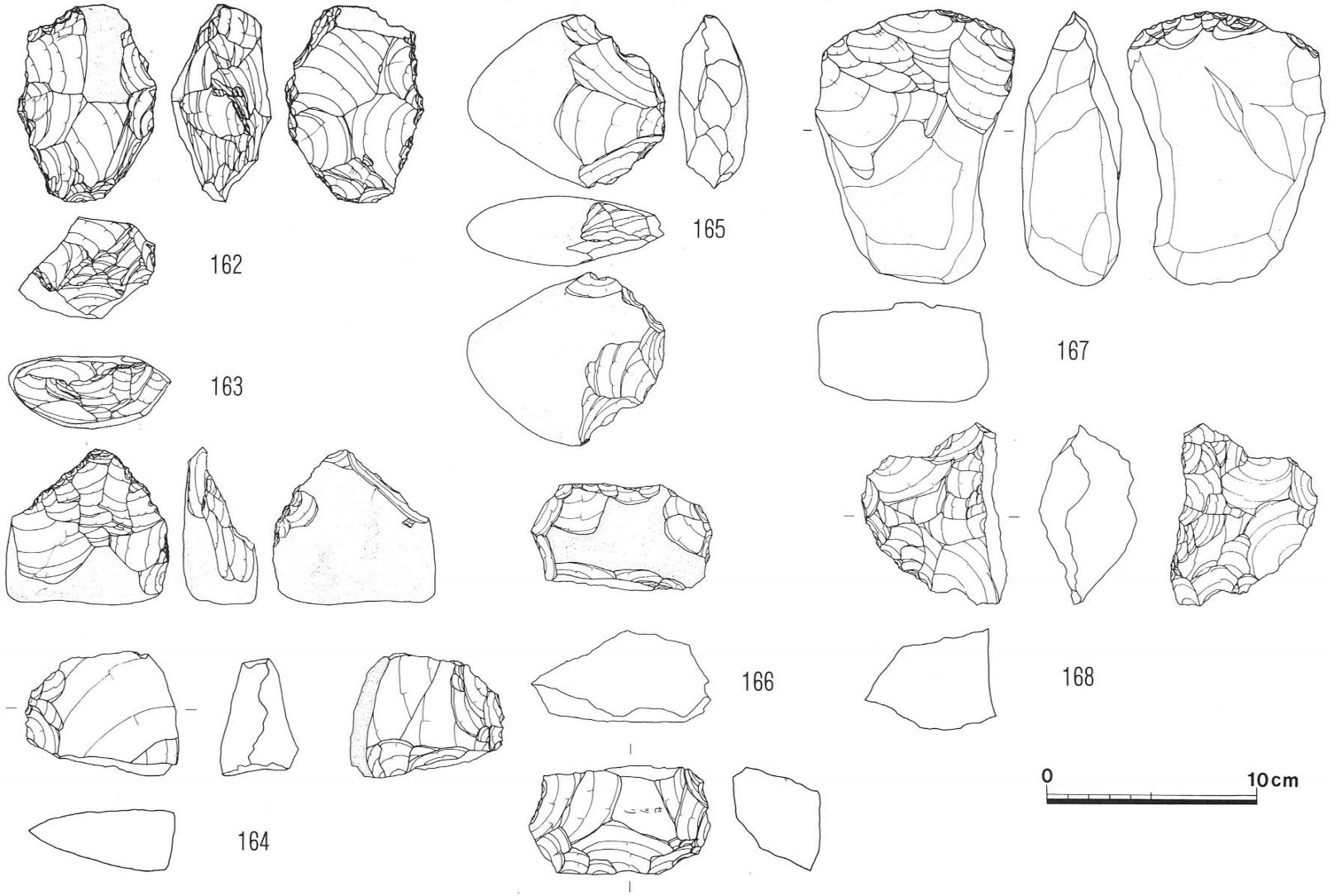


Fig75　Ⅳ区出土石器⑬石核（1 / 3）

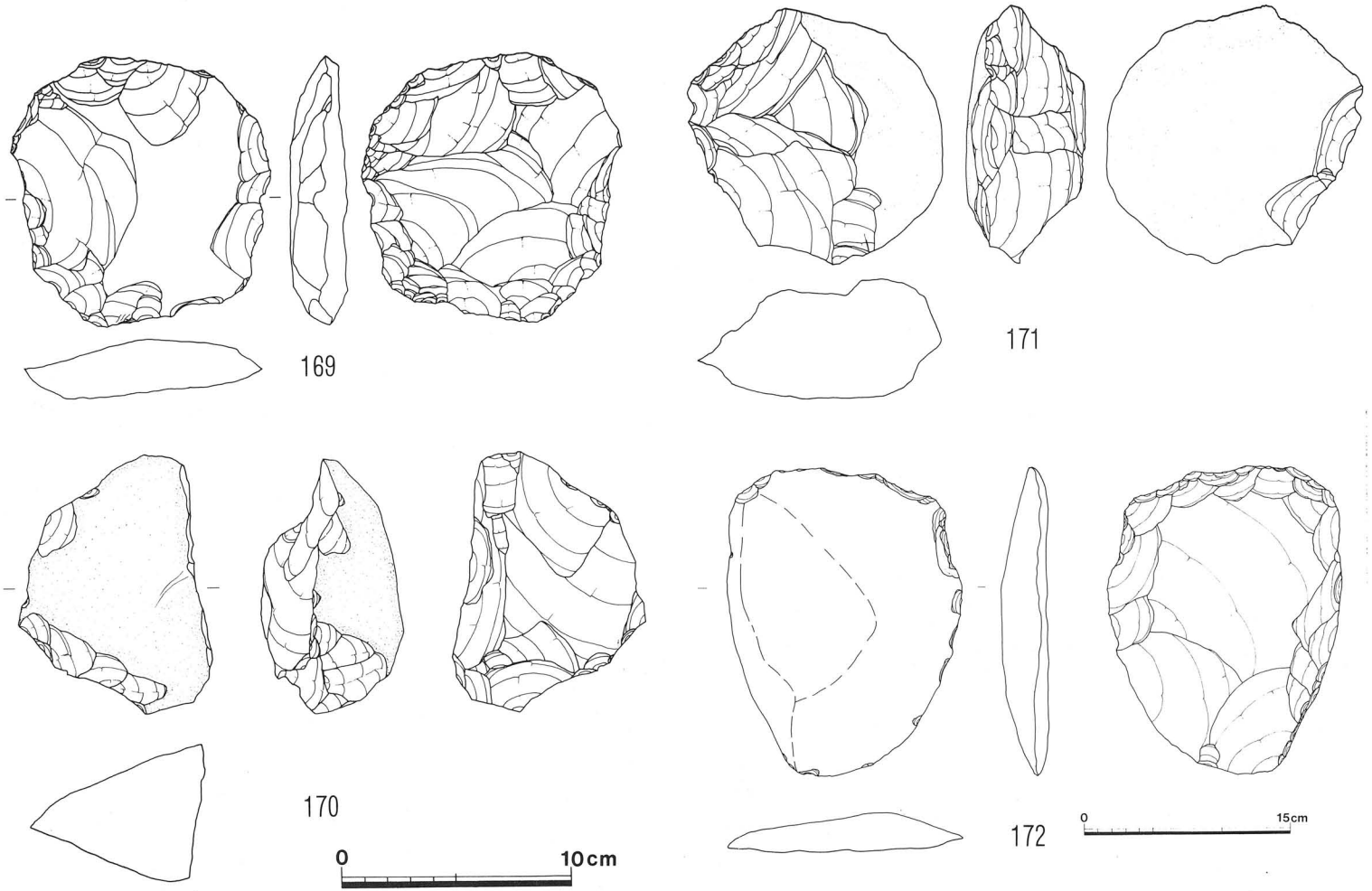


Fig76　Ⅳ区出土石器⑭礫器（1／3・1／5→172）

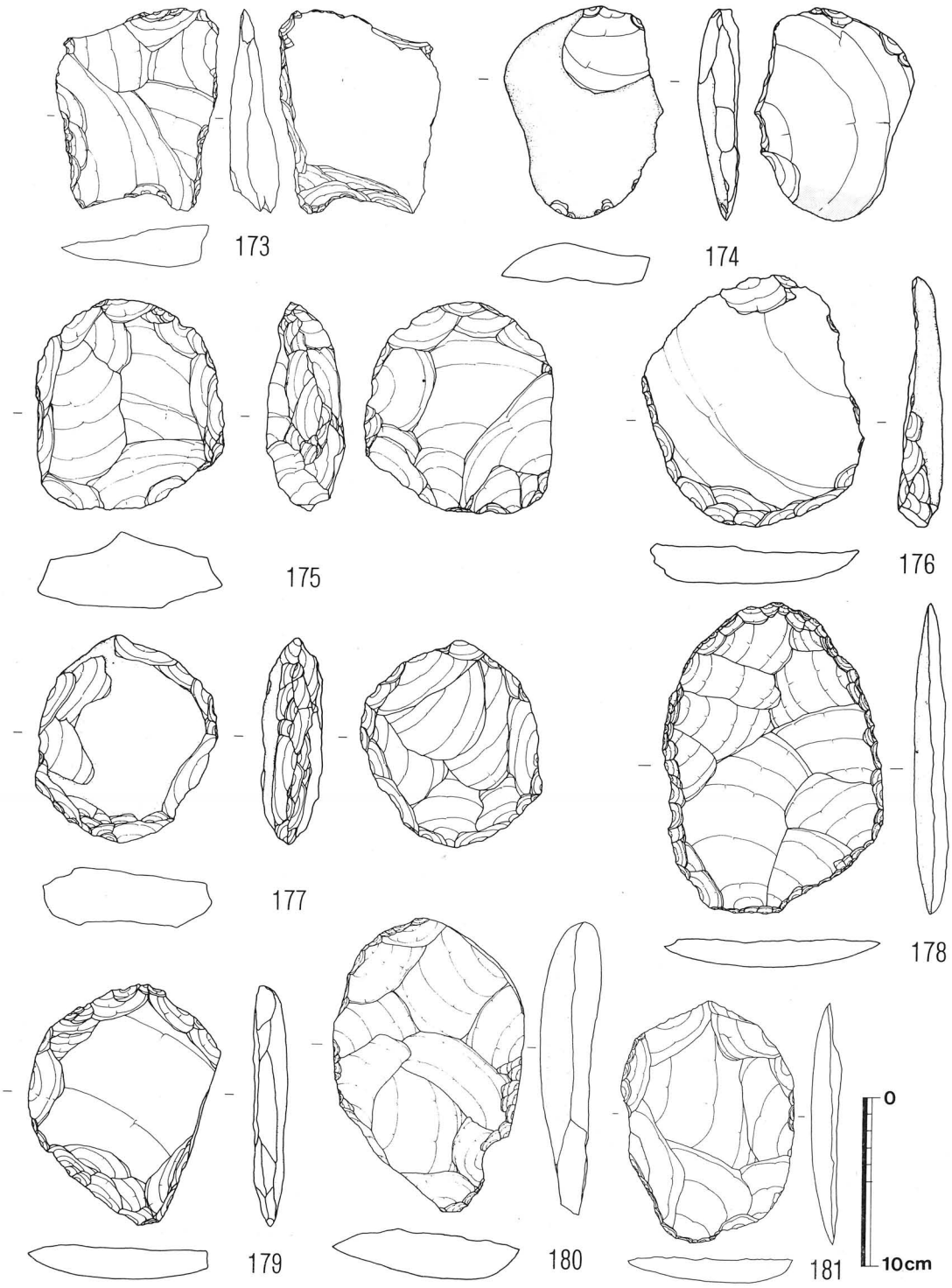


Fig77　Ⅳ区出土石器⑮礫器（1／4）

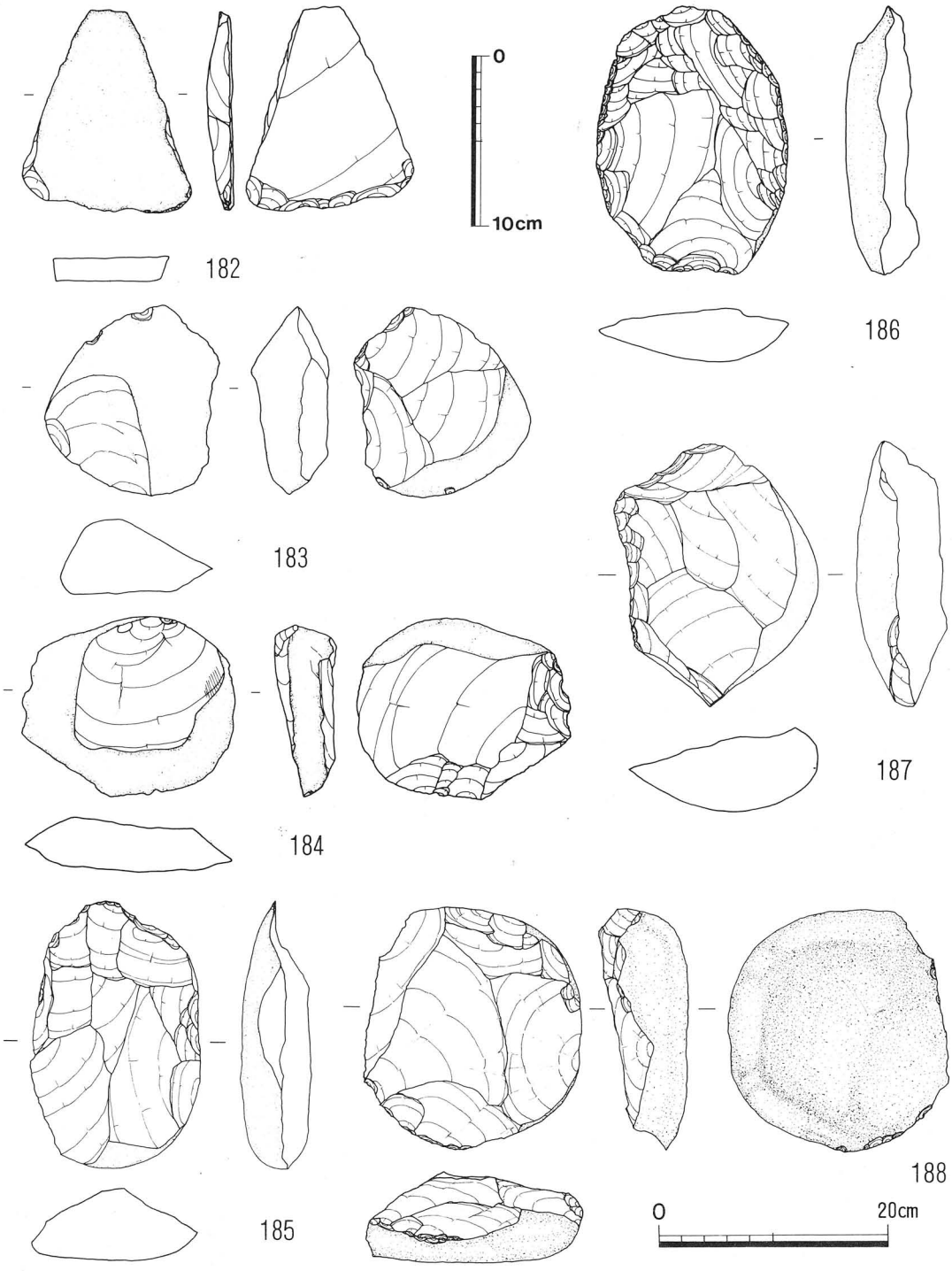


Fig78　Ⅳ区出土石器⑮礫器（1／4・1／6→188）

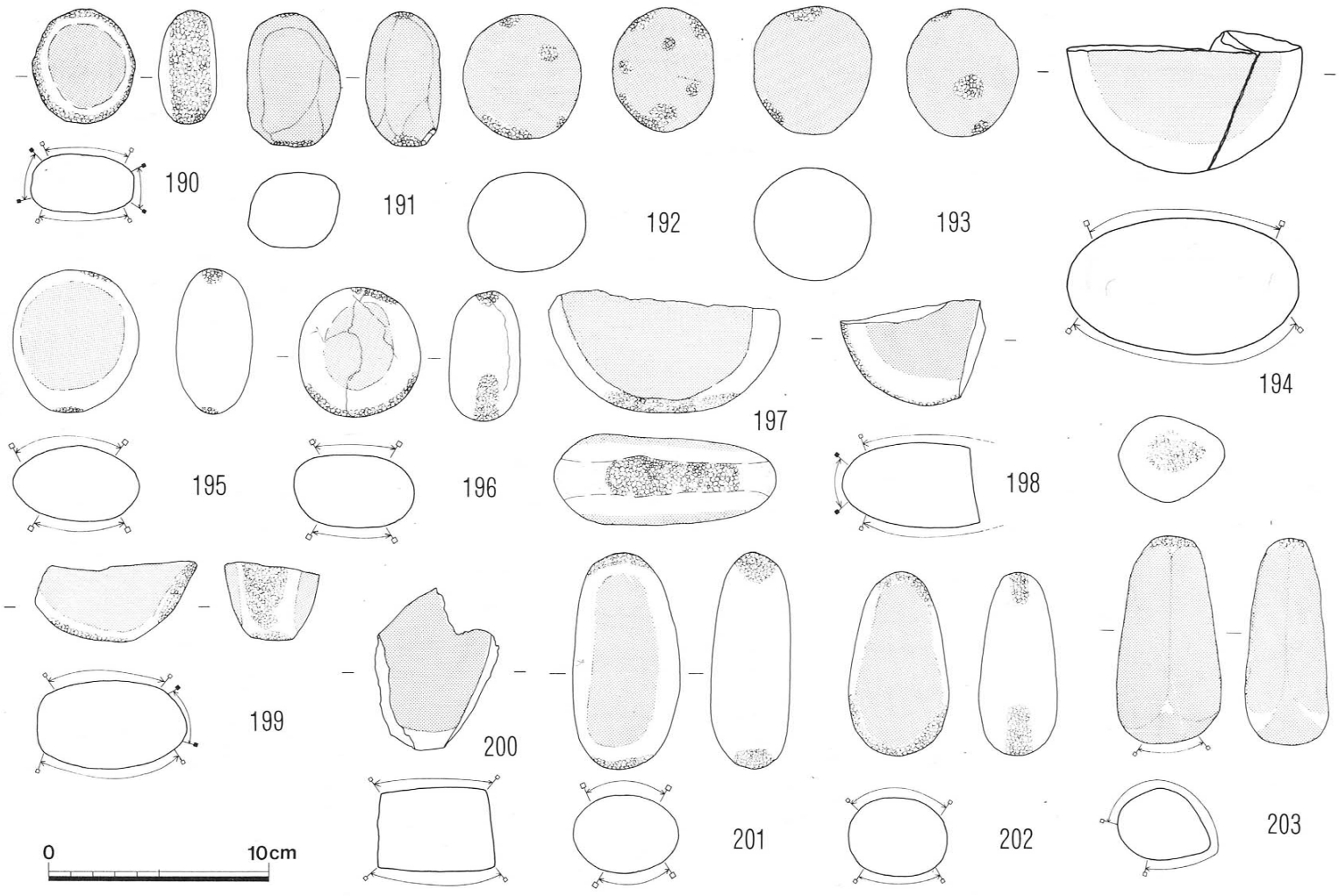


Fig79　Ⅳ区出土石器⑯磨石・敲石・凹石（1／3）

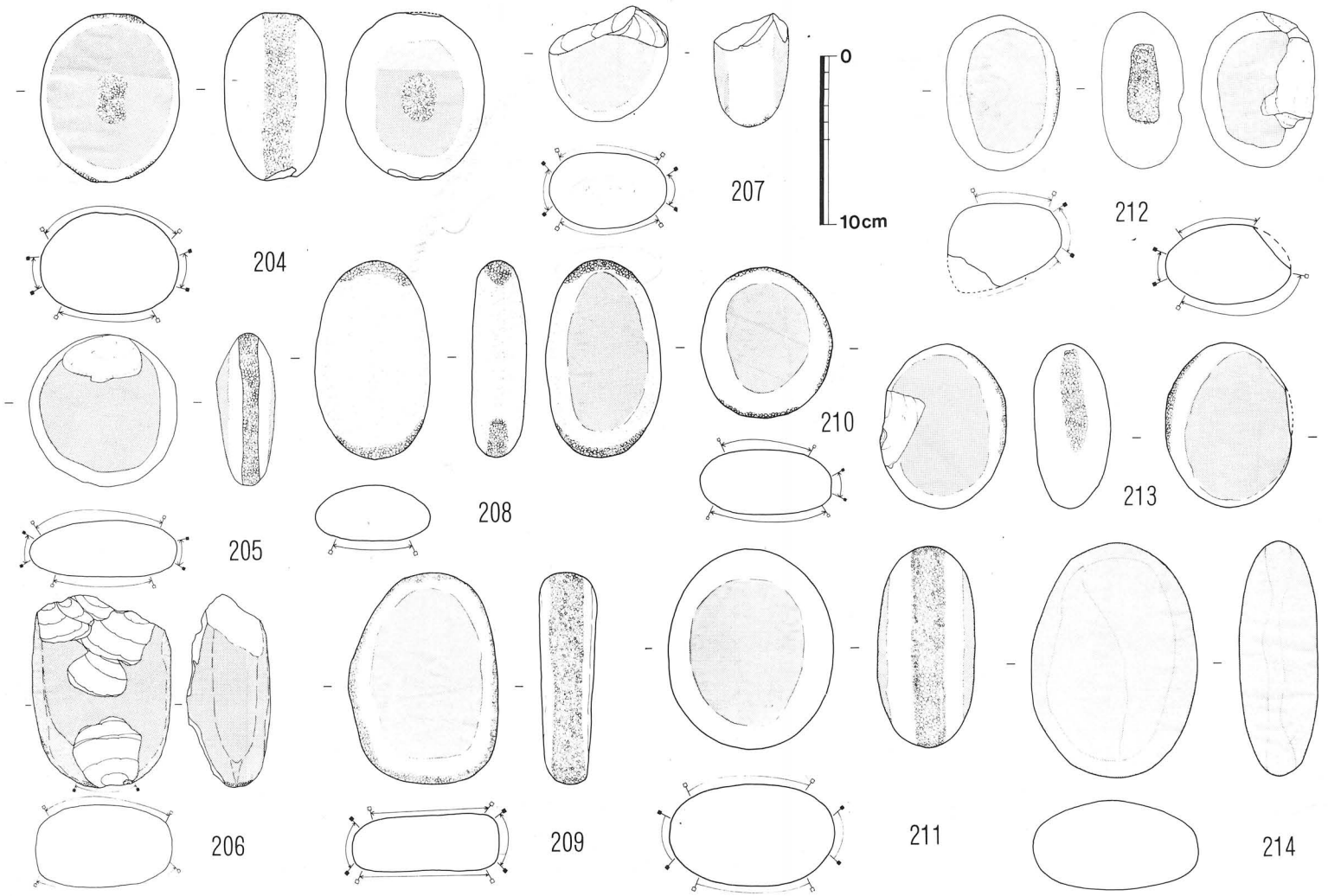


Fig80　Ⅳ区出土石器⑰磨石・敲石・凹石（1／4）

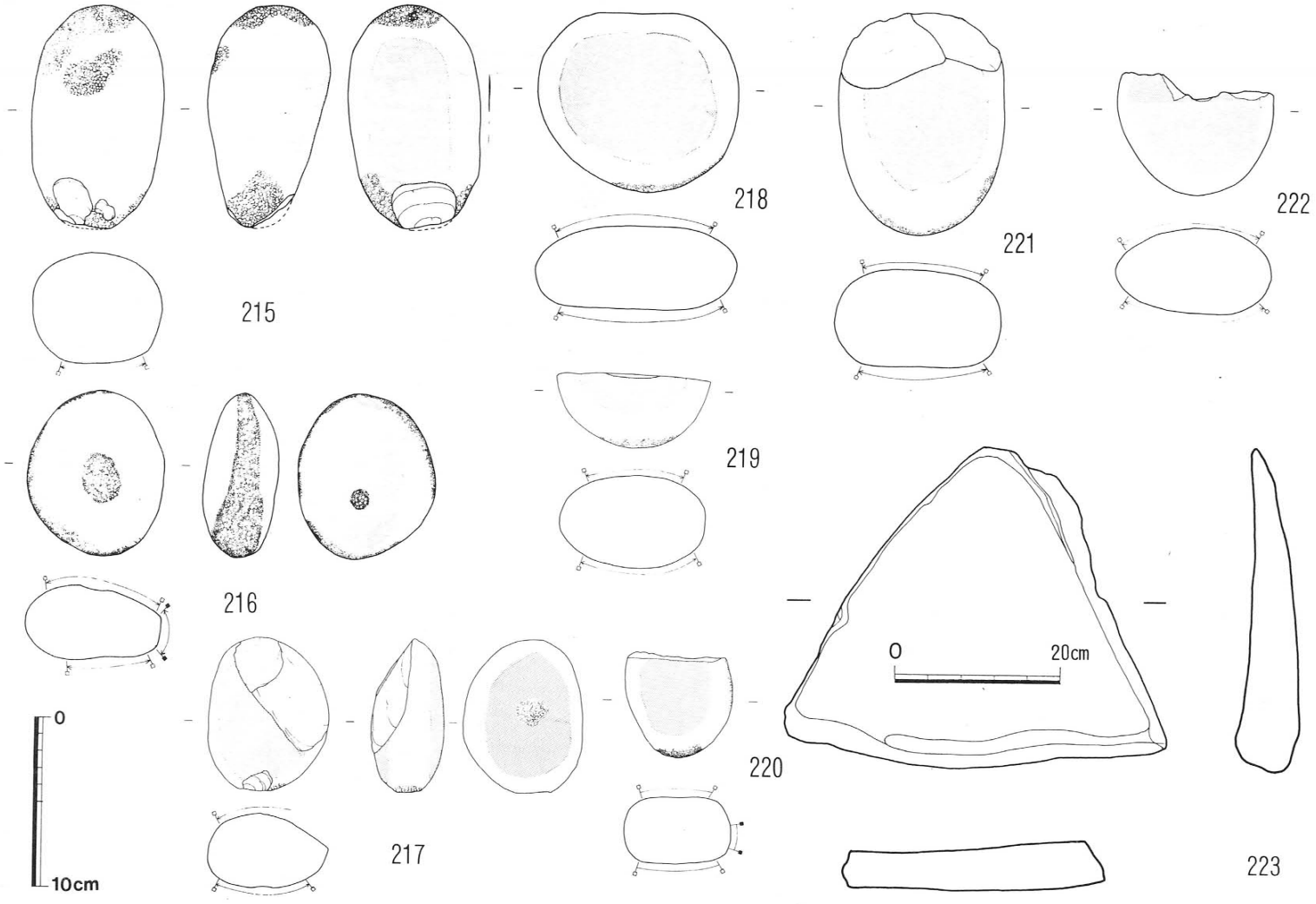
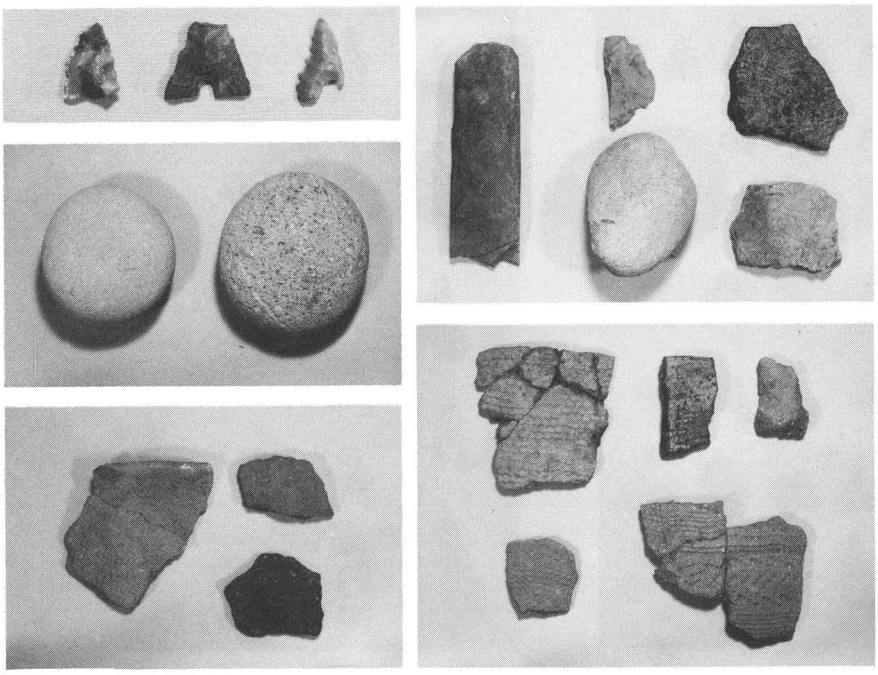
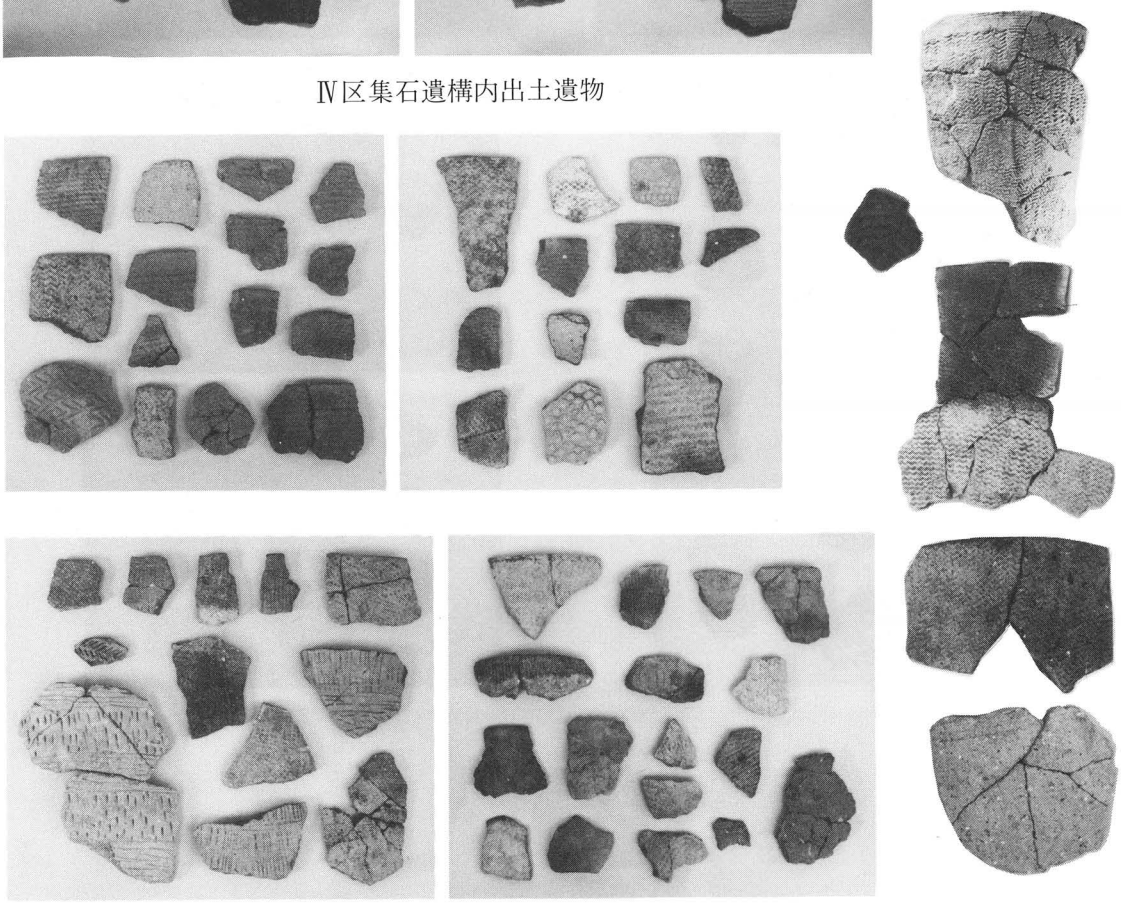


Fig81　Ⅳ区出土石器⑱ 磨石・敲石・凹石・皿石（1／4・1／8→223）

PL29

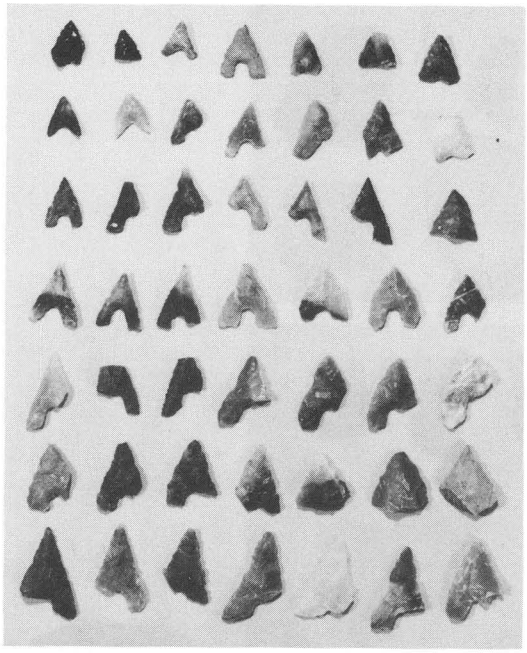


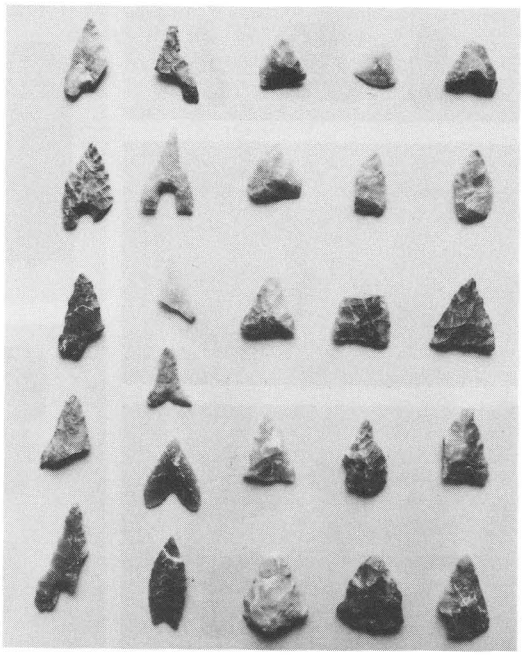
Ⅳ区集石遺構内出土遺物

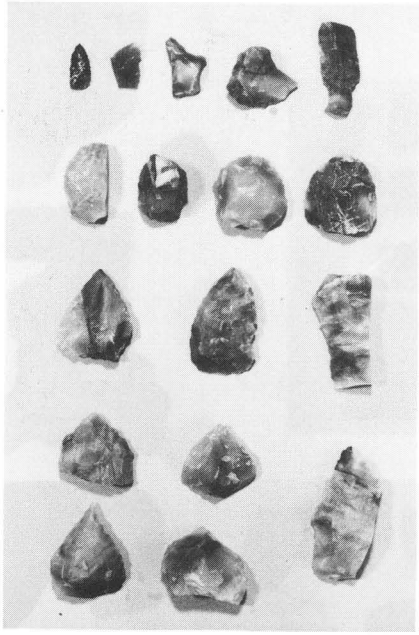


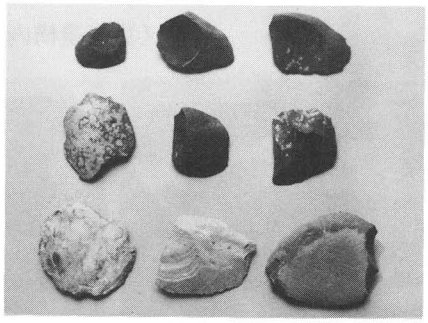
Ⅳ区出土縄文土器

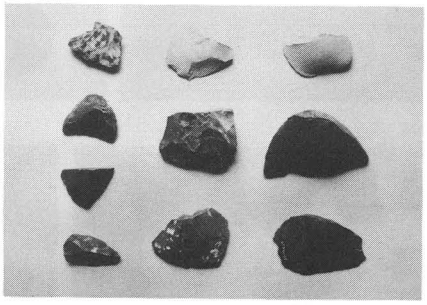
PL30

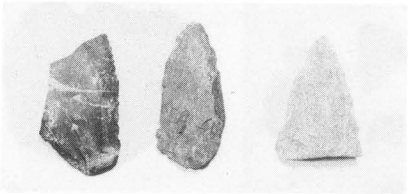


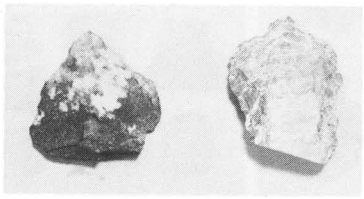






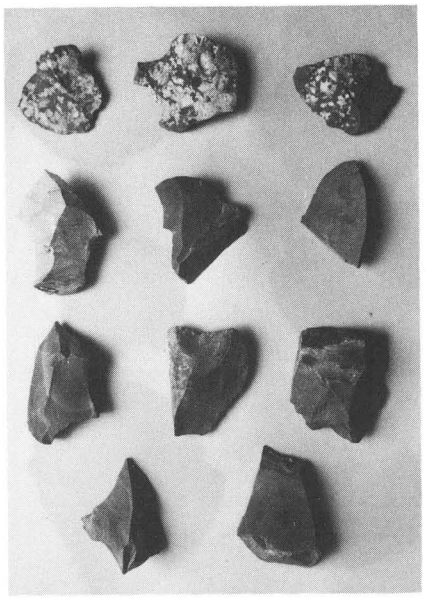


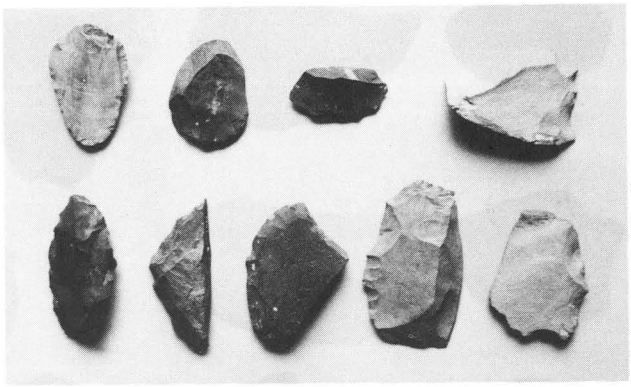


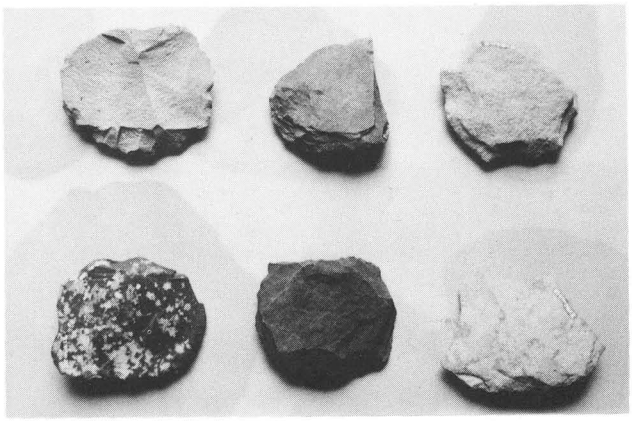


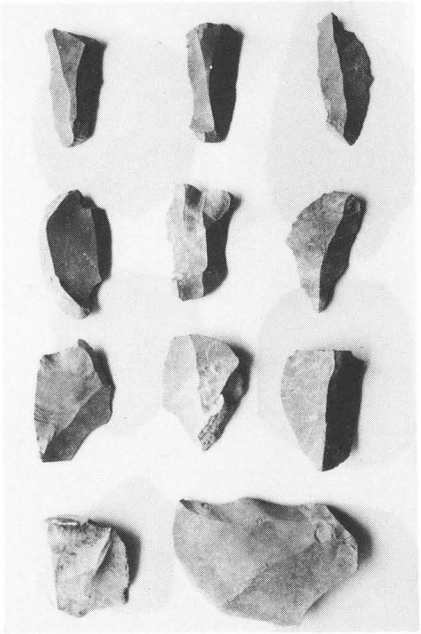
Ⅳ区出土石器（石鏃・尖頭状石器・石槍等）

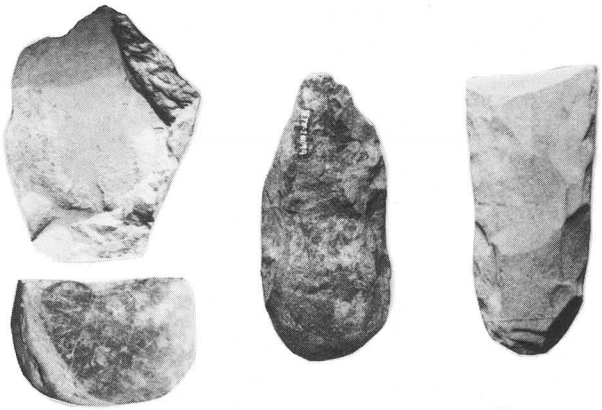
PL31

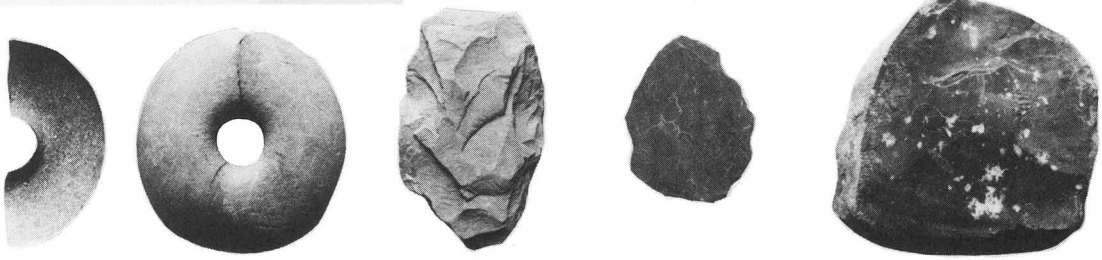






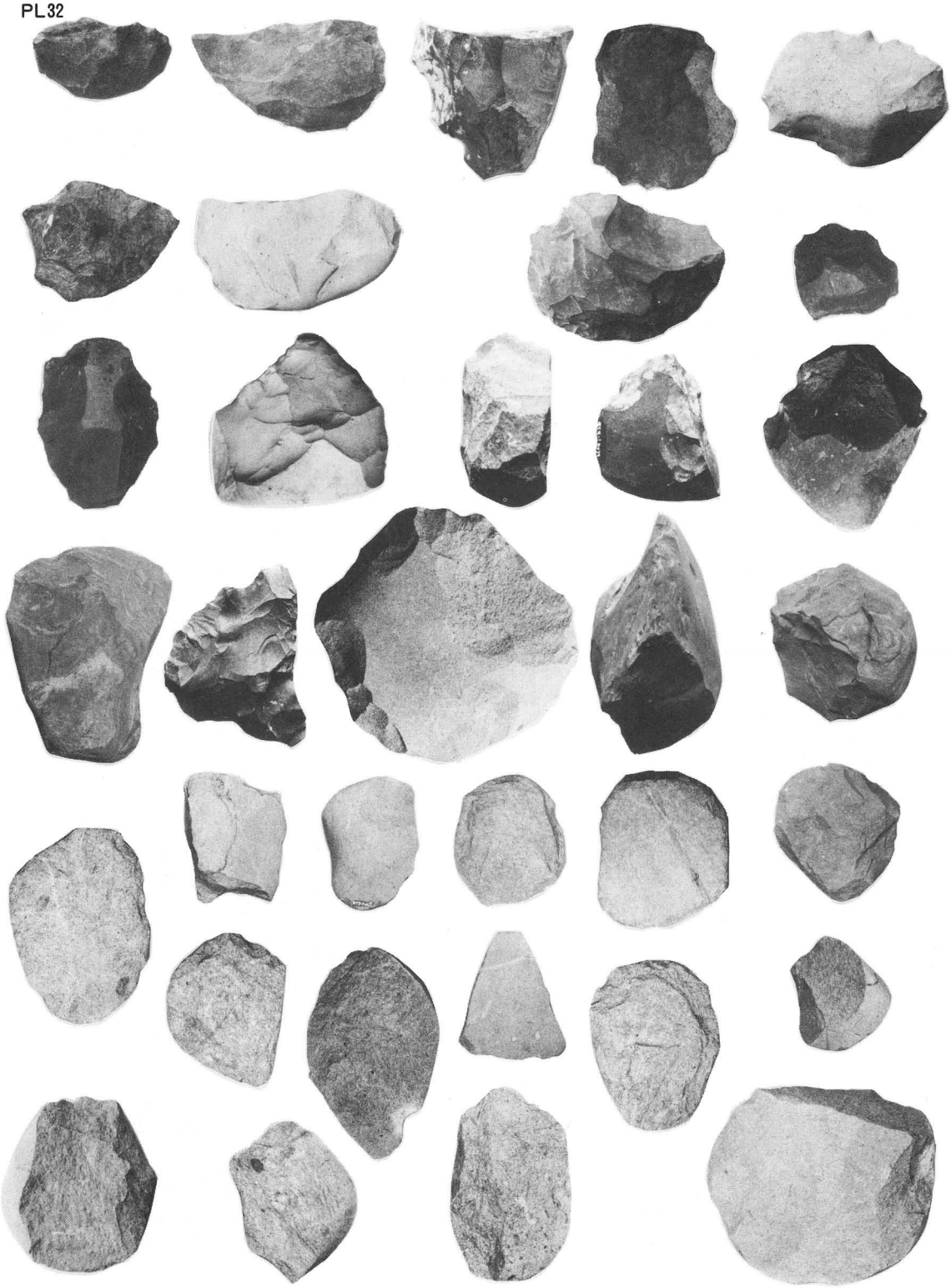






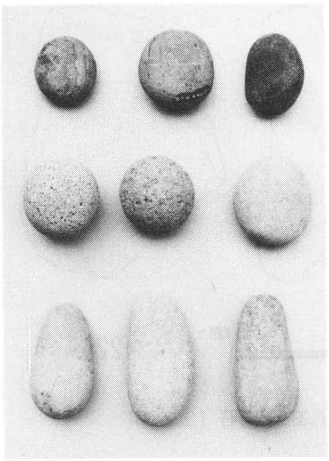
Ⅳ区出土石器（スクレイパー・石斧等）

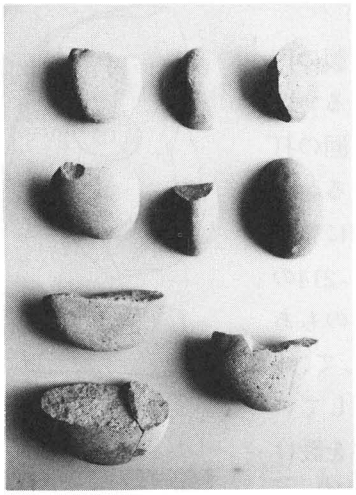
PL32

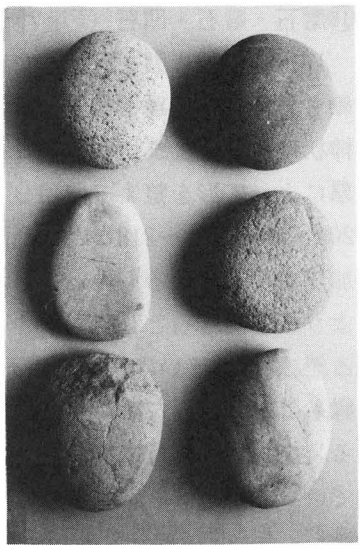


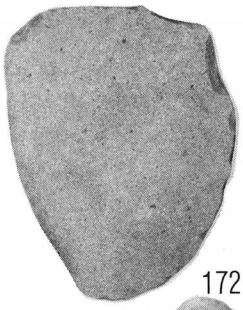
Ⅳ区出土石器（石核・礫器等）

PL33

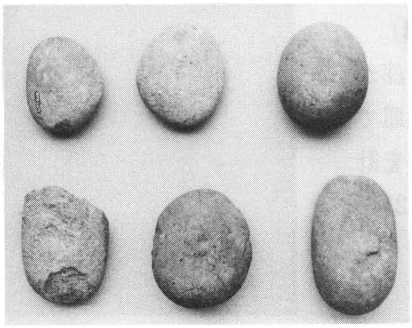


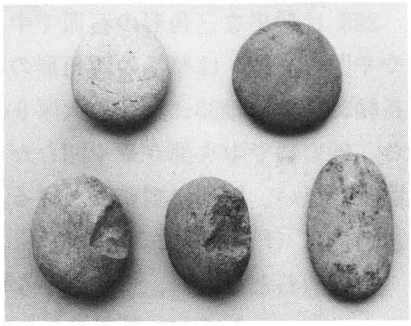


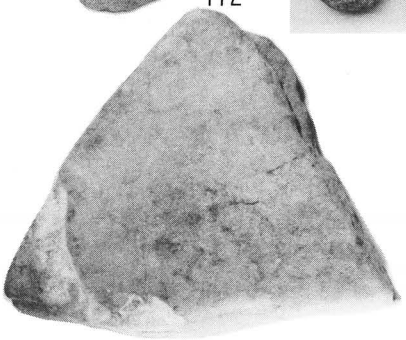




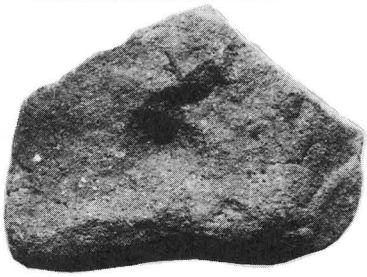
172



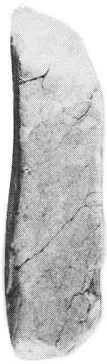




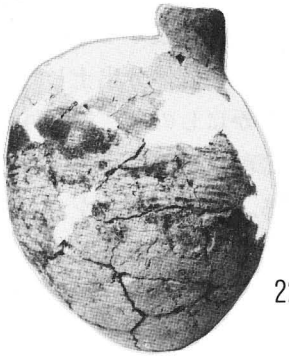
223



225



224



226

Ⅳ区出土石器（磨石・敲石・凹石・石皿）

Ⅳ区５号土坑出土甕（226）

⑱磨石・敲石・凹石（Fig79～81）

191 の流紋岩製を除き全て砂岩製の円礫もしくはやや扁平な円・惰円あるいは棒状礫をそのまま使用するか、数回の打撃によって形を整えて使用している。206・207、212～213などは意識的に整形加工を行っているものと思われる。214のように全面磨石として利用するものもあるが、両面あるいは片面を磨石として、外縁もしくは端部を敲石として併用している。また中央部付近に敲打で凹部を設けているものもある。（204・220など）

⑲石　皿（Fig81—223、PL32—224）

223 は扁平な三角形の石皿で中央部がやや凹む。224 は厚手の四角形の石皿で長軸39cm、短軸33.5cm、最大厚 9 cmを計る。砂岩製で中央部がやや凹むが 223程顕著でない。周囲に調整痕が残る。

⑳凹　石（Fig82・225）

一応凹石としたが、やや扁平な砂岩礫の中央部に長軸 4 cm、短軸 3 cm、深さ 1 cm程の凹部を持つ石器で、204 とは別の機能（例えば堅果類の殻割など）が考えられる。

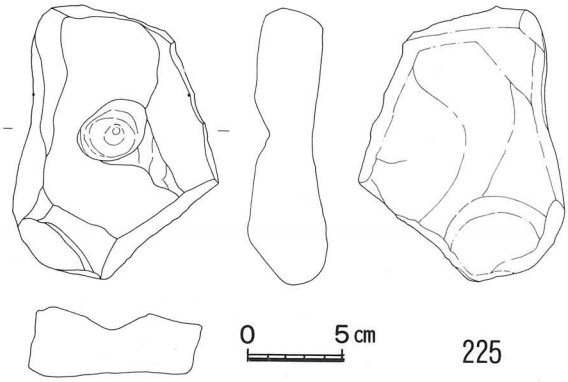


Fig82　Ⅳ区出土石器⑳凹石（1／4）

PL34　Ⅳ区 5 号土坑（南より）

弥生・古墳時代

Ⅳ区では弥生・古墳時代の遺構として土坑 1 基、住居跡 1 基を検出した。

5 号土坑（Fig83—PL34）

Ⅳ区のほぼ中央、3 号溝状遺構と10号溝状遺構が重なる北側で検出された。長軸 1.3m、短軸 1.2m、深さ16 cmを計る。東側に段がつく。中より口縁部の一部を欠く甕（226）が一個体分出土した。226 は口縁部最大径を胴部がわずかにしのぎ、口縁外面に斜方向の刷毛目を、頸部から底部付近まで平行叩目が、内面にナデ調整が施されている。外面にススを含む。胎土に小石 2 mm～5 mmを含む。底部はほぼ丸底となる。古墳時代初頭に比定されよう。

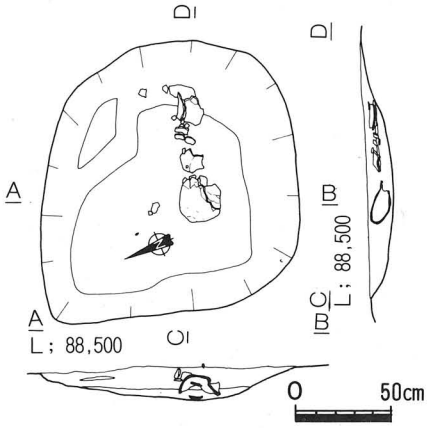
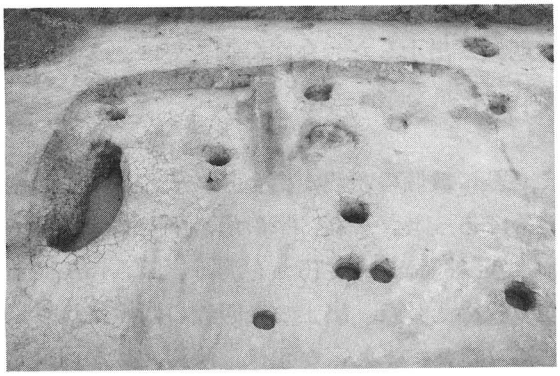


Fig83　Ⅳ区 5 号土坑実測図（1／40）

1 号住居跡（Fig85）

1 号溝状遺構の北隣で検出した。西側半分を欠くが長

軸5.6cm、深さ24cmを計る。主柱穴は4本の隅丸方形状を呈すると思われる。北壁際の深さ80cm程の土坑は何らかの付属施設が考えられるが、遺物等の出土はない。1号住居跡では東コーナー付近でハケ目の残る土器細片が浮いた状態で出土した以外に遺物はなかった。



PL35 Ⅳ区1号住居跡（西より）

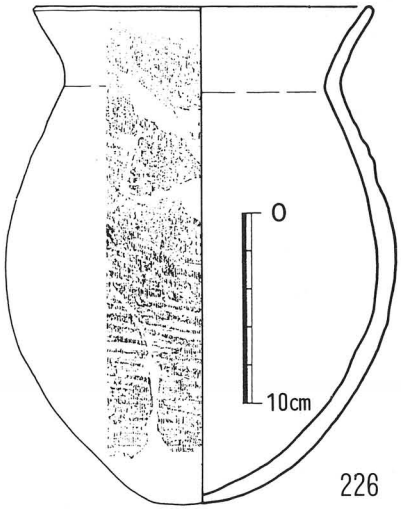


Fig84 Ⅳ区5号土坑内出土甕実測図（1／4）

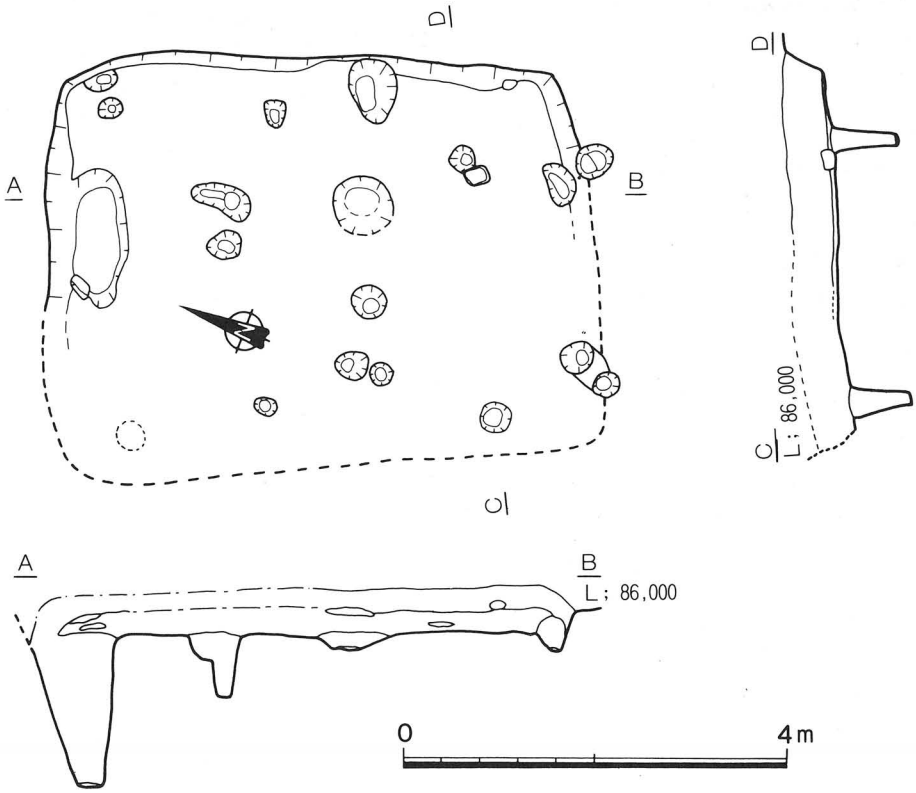


Fig85 Ⅳ区1号住居跡実測図（1／80）

中・近世

Ⅳ区で検出した中・近世の遺構には、祭祀遺構・土坑・溝状遺構、掘立柱建物、柱穴等である。主に台地中央より北側で検出した。

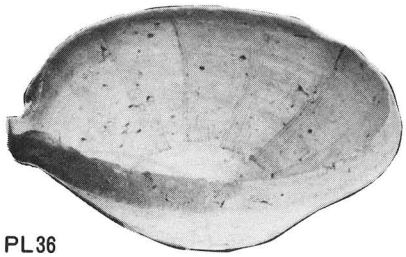
遺物として、陶磁器・明銭・土錐・鉄器・銅器・石臼・砥石などが出土した。その大半が1号溝状遺構内からの出土である。

①祭祀遺構

試掘の際、3号祭祀遺構を検出し、多数の明銭が出土した。今回の調査では、3ヶ所の祭祀遺構を近接して検出した。

1号祭祀遺構（Fig86・87）

1号溝状遺構の東側に位置する。擂鉢のまわりに数個の明銭が出土し、その下に牛の歯一頭分と直径2～3cmの小砂利及び明銭が敷きつめてあった。また、牛の歯の下も同じ状況であった。掘り込みのプランは円形に近く長軸95cm、短軸85cm、深さ13cmを測る。深さ15～30cmの柱穴が2ヶ所あり、内1ヶ所の底より、明銭が3枚出土した。出土した明銭の内訳けは永楽通宝・皇宋通宝が各9枚、元宝通宝8枚、開元通宝6枚、治平元宝が3枚、政和元宝・紹聖元宝・洪武通宝・祥符通宝・天祐通宝が各3枚、福采(?)通宝・天聖元宝・宋元通宝・紹熙元宝・宣和通宝・景元通宝・熙寧元宝・嘉祐元宝・至和元宝・聖宋元宝が各1枚、判読不能20枚となっている。その他、明銭と一緒に円盤状の土製品が数点出土した。(PL37) 色論は灰白色で全長2～3cm、厚さは0.7cm 前後を測る。穿孔、刻目等はない。227 は備前焼擂鉢で、体部にロクロ痕を残し、口縁部外面に凹線は貝られない。断面形は三角形を呈し、口径27.4cm、底径15.3cm、器高10.8cmを計る。



PL36
Ⅳ区1号祭祀遺構出土備前焼擂鉢（227）

2号祭祀遺構（Fig88）

2号祭祀遺構は18号土坑の西側に位置する。小砂利と明銭を敷きつめており、その下に長軸85cm、短軸73cm、深さ15cm程の惰円形の土坑を検出した。出土した明銭の内訳けは、永薬通宝4枚、元豊通宝3枚、皇宋通宝・洪武通宝各2枚、嘉開通宝・政和通宝・太平通宝・紹聖通宝各1枚・判読不能17枚である。

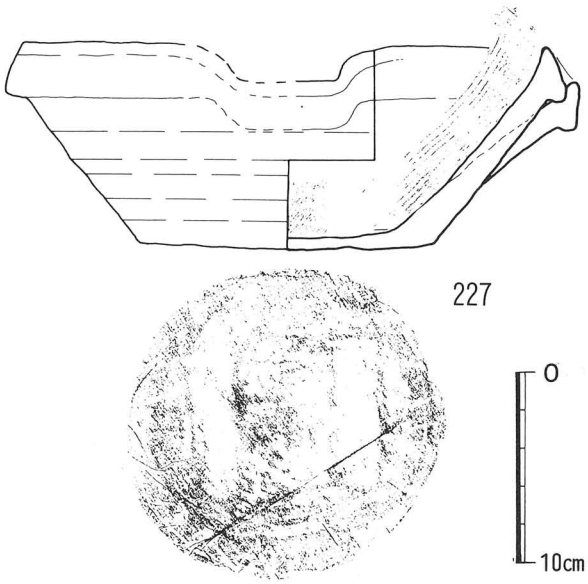


Fig86 Ⅳ区1号祭祀遺構出土備前焼擂鉢（1／4）

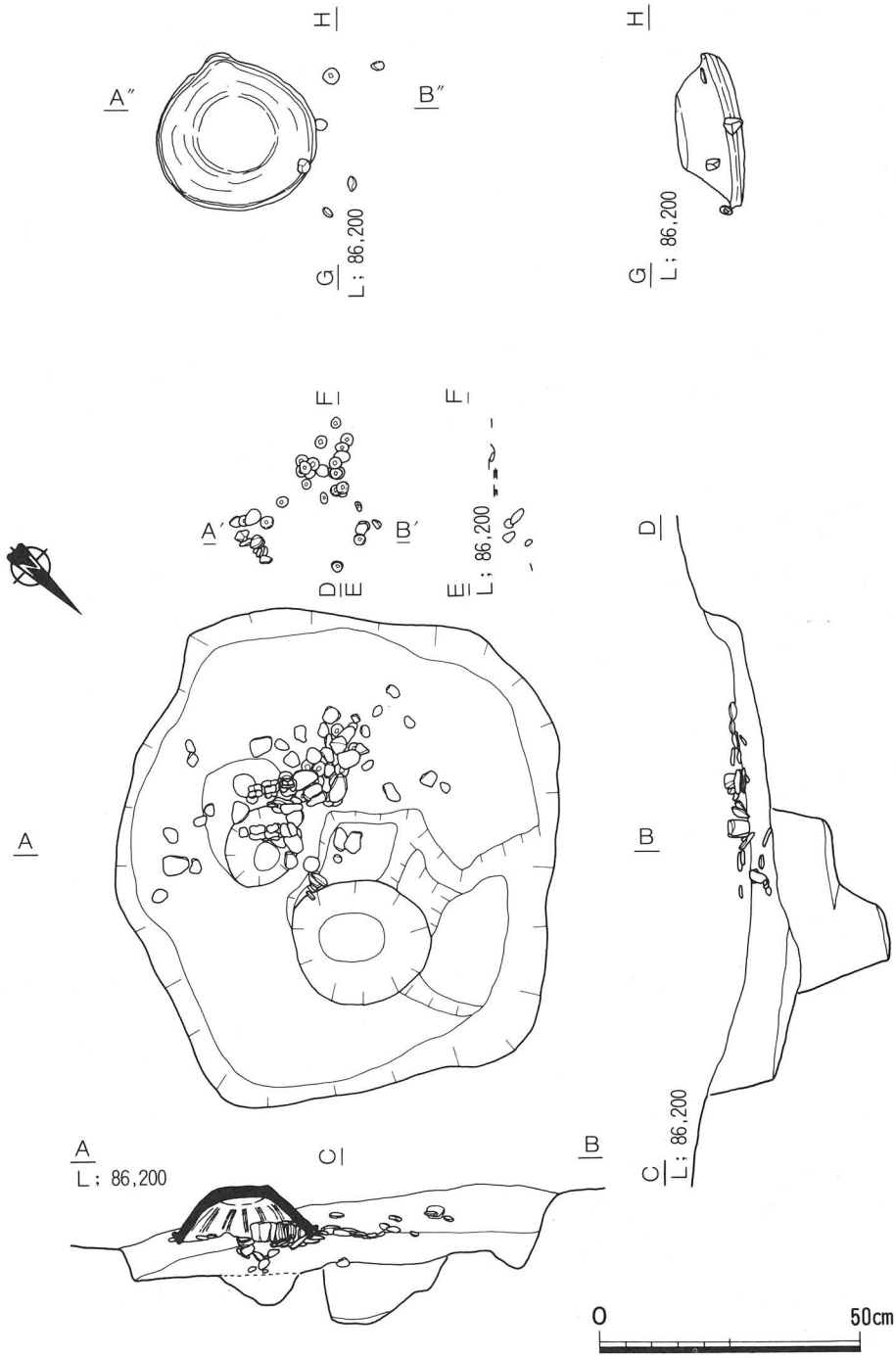
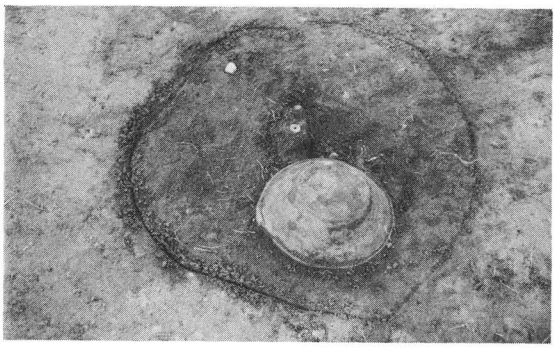


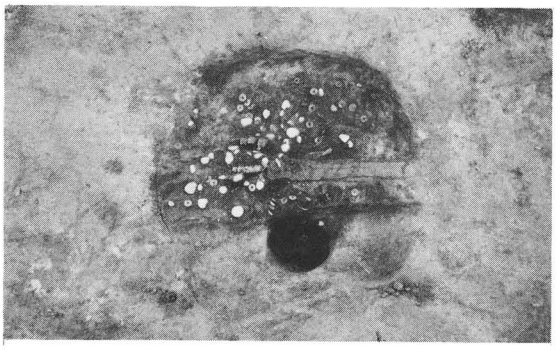
Fig87　Ⅳ区１号祭祀遺構（１／15）

PL37

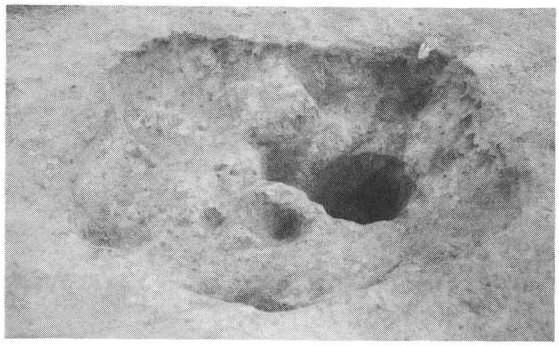


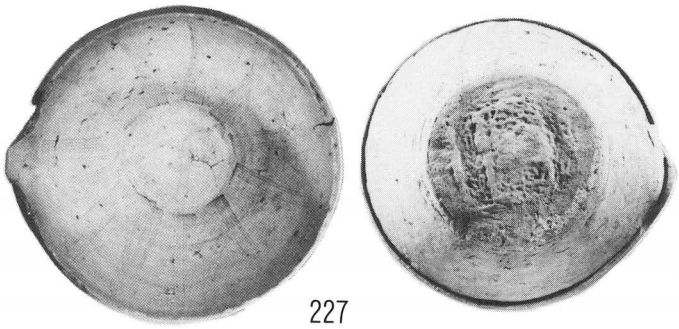
(1) 1号祭祀遺構（検出）

(3) 1号祭祀遺構（獣骨）

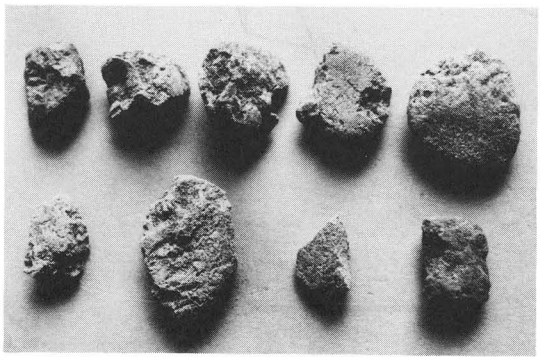


(2) 1号祭祀遺構（獣骨）

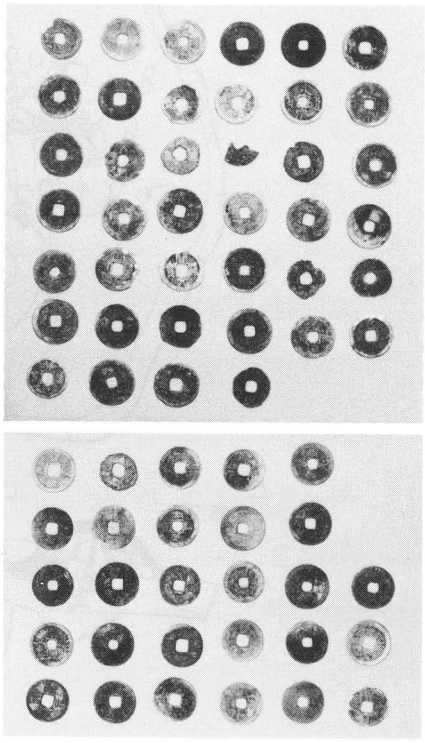




227



土製品



明銭

3号祭祀遺構（Fig89）

試掘調査時に確認された。扁平な河原礫を2つ重ね、周囲に小砂利と明銭を敷きつめている。掘り込みは半分不明であるが、直径ほぼ50cm、深さ15cm程の円状を呈するものと思われる。出土した明銭は総数52枚で、2～5枚くっついている。銹化によるものもあると思われるが、紐痕があり束にして埋納したものと考えられる。文字は判読不明なものがほとんどであるが、熙寧元宝1枚、政和通宝1枚、皇宋通宝1枚、元豊通宝1枚は確認できた。

また、残存径が2cm以内のものが8枚あり、2～4枚くっつく。

②土　坑

1号土坑（Fig90）

Ⅳ－2区、13号溝状遺構の東に隣接して検出された。平面形は長方形を呈し、長軸1.64cm、深さ0.65mを計る。基底部はⅧ層中になる。遺物等の出土はない。

2号土坑（Fig90）

Ⅳ－2区、調査の東端で検出された。平面形は径1mを超えない円形で、深さは0.65mを計る。やや上方に段がつく。基底部はⅧ層中で、遺物等はなかった。

3号土坑（Fig91）

Ⅳ－3区の北端で検出された。平面形は擬似台形を呈し、長軸1.8m、短軸1.7m、深さ0.2mを計る。浮いた状態であるが、陶器片が数点出土した。

4号土坑（Fig91）

Ⅳ－5区、10号溝状遺構の東側で検出した。平面形は長方形を呈し、長軸1.75m、短軸0.5m、深さ0.8mを計る。やや下方が膨らむ。基底部はⅧ層で、遺物等はない。

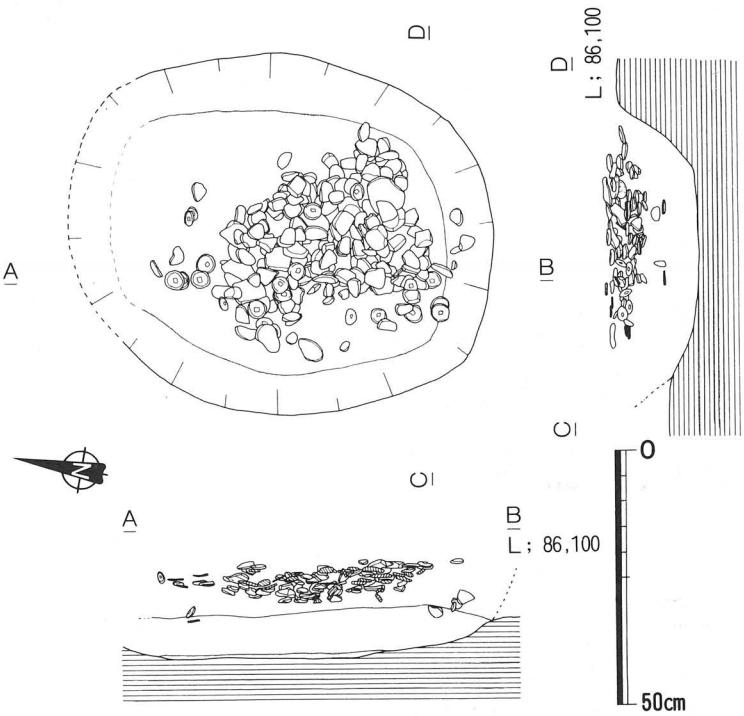


Fig88　Ⅳ区2号祭祀遺構実測図（1／15）

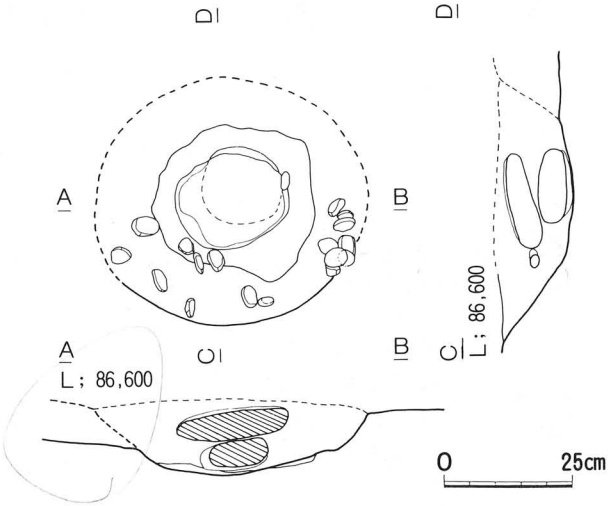
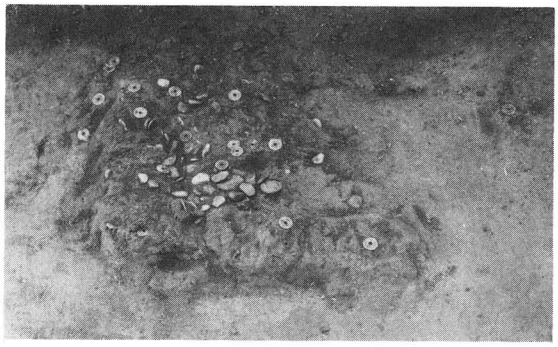
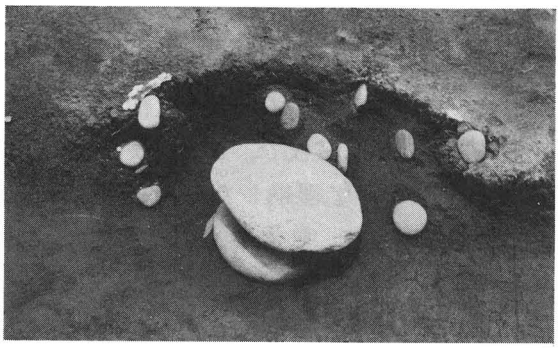


Fig89　Ⅳ区3号祀遺構実測図（1／15）

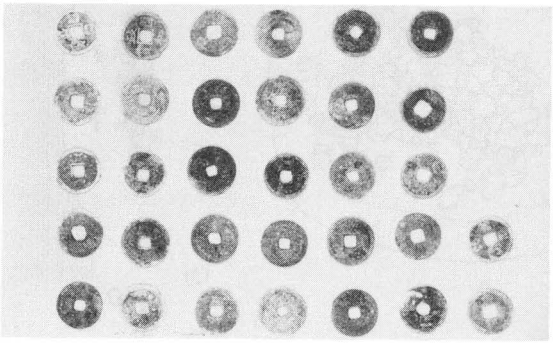
PL38



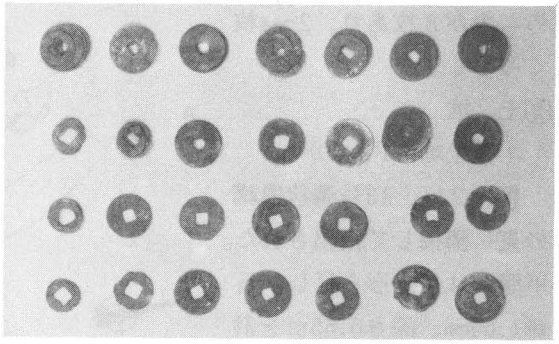
(1) 2号祭祀遺構（東より）



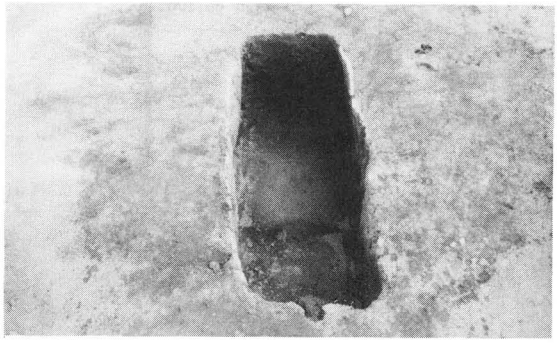
(5) 3号祭祀遺構（北より）



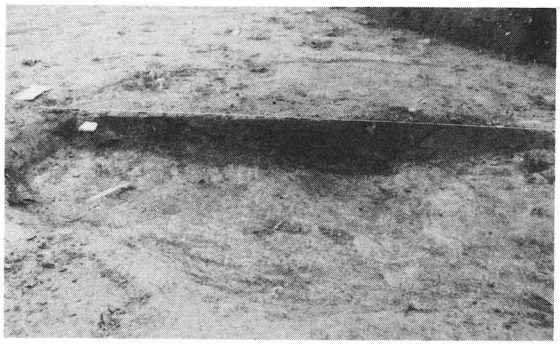
(2) 2号祭祀遺構出土明銭



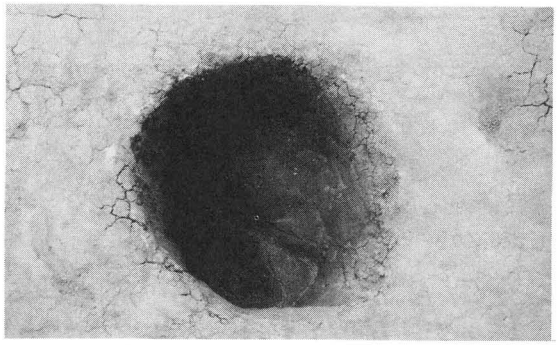
(6) 3号祭祀遺構出土明銭



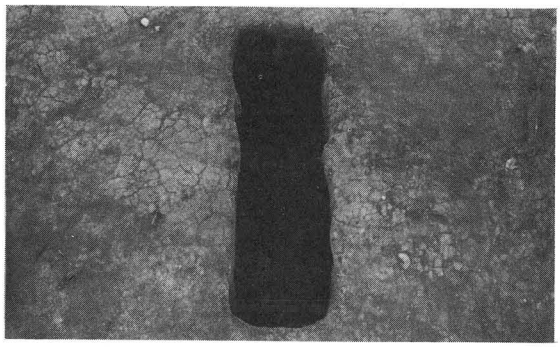
(3) 1号土坑（北より）



(7) 3号土坑（東より）



(4) 2号土坑（西より）



(8) 4号土坑（北より）

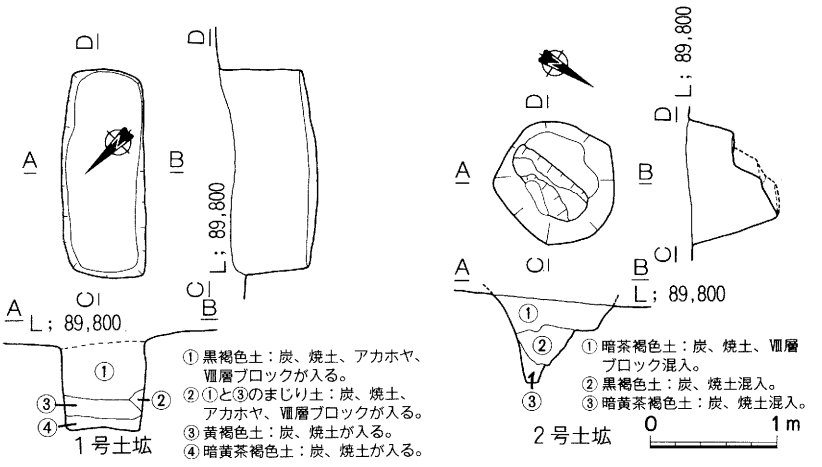


Fig90　Ⅳ区1号・2号土坑実測図（1／60）

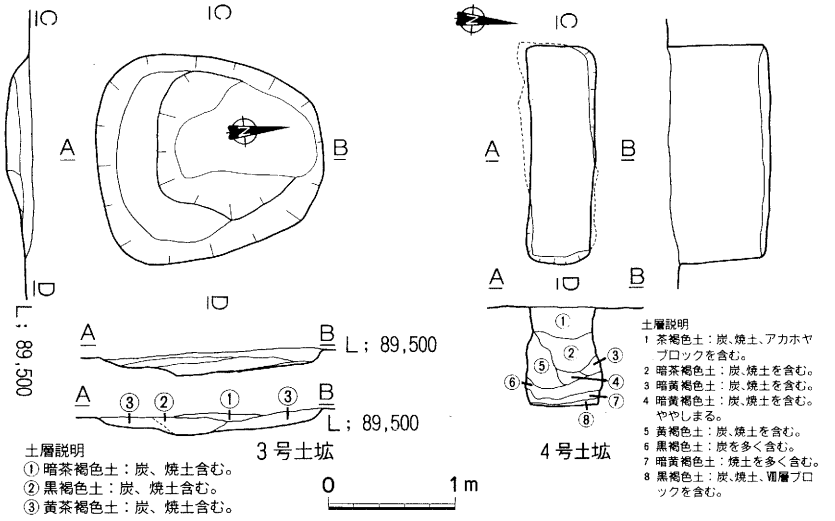


Fig91　Ⅳ区3・4号土坑実測図（1／60）

6号土坑（Fig92）

Ⅳ－7区、3号溝状遺構の南側で検出した。東端に柱穴等の攪乱を受ける。平面形はやや幅の広い長方形で、長軸 2.6m、短軸 2.1m、深さ0.18mを計る。遺物等はない。

7号土坑(Fig93)

Ⅳ－7区の東端、3号溝状遺構を切る形で検出した。平面形は惰円形であるが、西側の半分よりやや上位に段がつく。基底部には焼土、炭が透き間なくつまっていた。出土遺物はない。

8号土坑(Fig94)

Ⅳ－7区の北端で検出した。平面形はやや不定形な長方形を呈し、長軸 3.1m、短軸 2.1m、深さ 0.3mを計る。四隅に柱穴を持ち、それぞれが一方を除き深さ0.15～0.25m、幅0.15～0.50mの溝でつながる。北側は掘り込みが浅く、粘土（熱変により砂質化？）と思われる灰褐色土の広がりを確認した。出土遺物には、頁岩ノジュールと呼ばれる自然石がある。※　（Fig95・228）　※延岡市舞野町松田正利氏の御教示による。

9号土坑

Ⅳ－9区、9号溝状遺構の南側に近接して検出した。長軸4m、短軸2m、深さ0.2m程の不整形を呈する。出土遺物はない。　10号土坑との何らかの関係を窺わせる。

10号土坑（Fig96）

Ⅳ－9区、9号溝状遺構の北側に近接して検出された。長軸 3.8m、短軸 2.1m、深さ0.15～0.25mの不整形を呈する。出土遺物として鉄滓（231）、砥石片（232）、土錘（233～241）、剣先連弁の青磁椀（242）等がある。

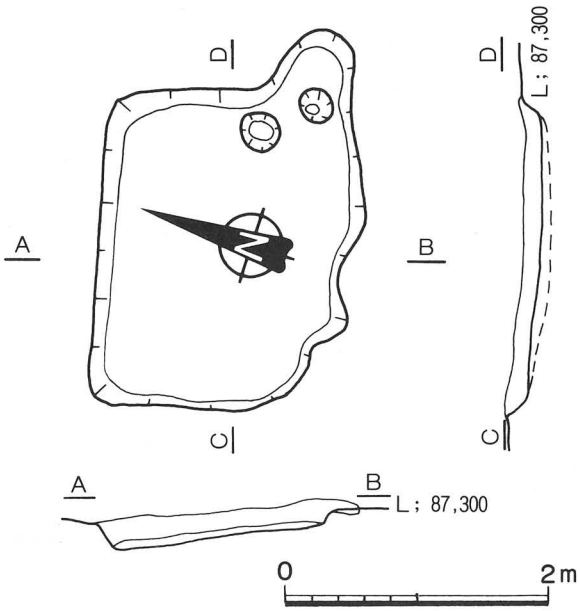


Fig 92　Ⅳ区６号土坑実測図（１／60）

11号土坑

Ⅳ－15区、１号建物の東側で検出した。平面形はやや内湾する方形を呈し、長軸 2.2m、短軸 0.8m、深さ 0.2m を測る。出土遺物は中国製白磁皿（243）１点のみである。

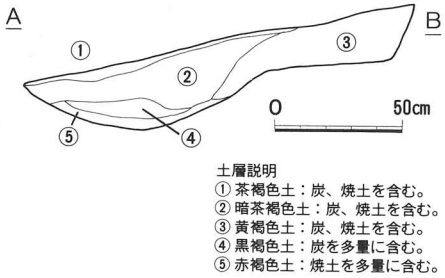


Fig93　Ⅳ区７号土坑断面図（１／40）

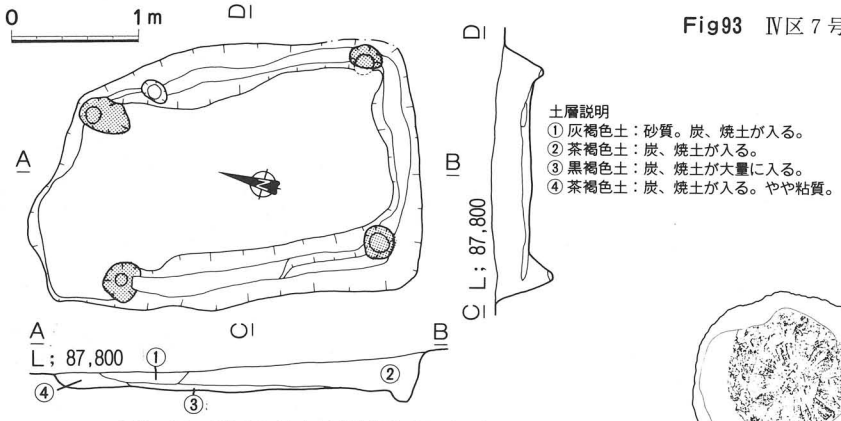


Fig 94　Ⅳ区８号土坑実測図（１／60）

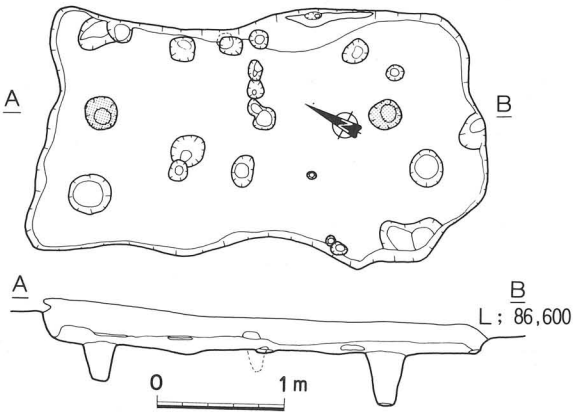


Fig96　Ⅳ区10号土坑実測図（１／60）

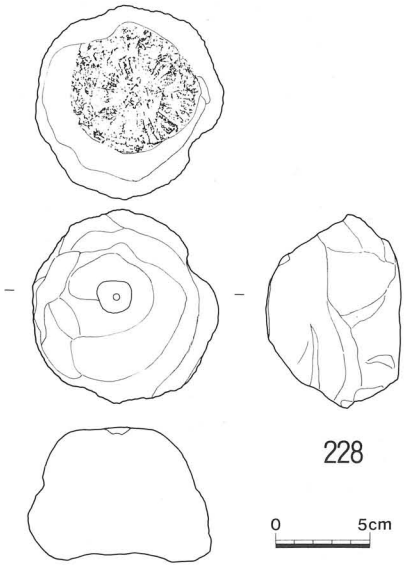
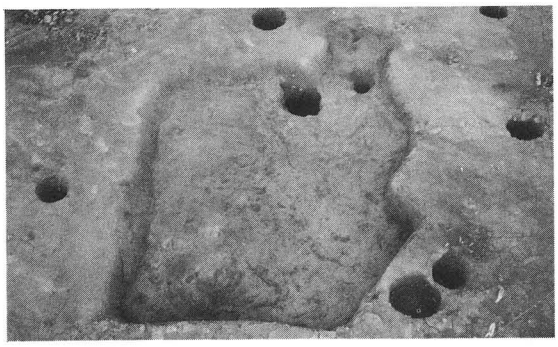


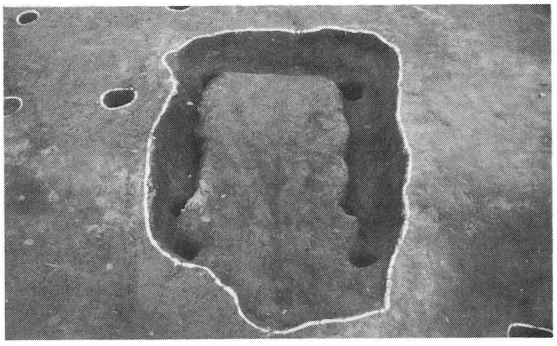
Fig 95　Ⅳ区８号土坑出土遺物実測図（１／４）

PL39



(1) 6号土坑（西より）

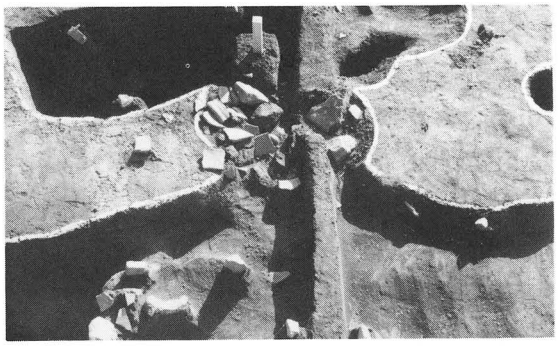
(2) 7号土坑（北より）



(3) 8号土坑（北西より）

(4) 10号土坑（南東より）

(5) 12・13土坑（北西より）



(6) 13号土坑（東より）

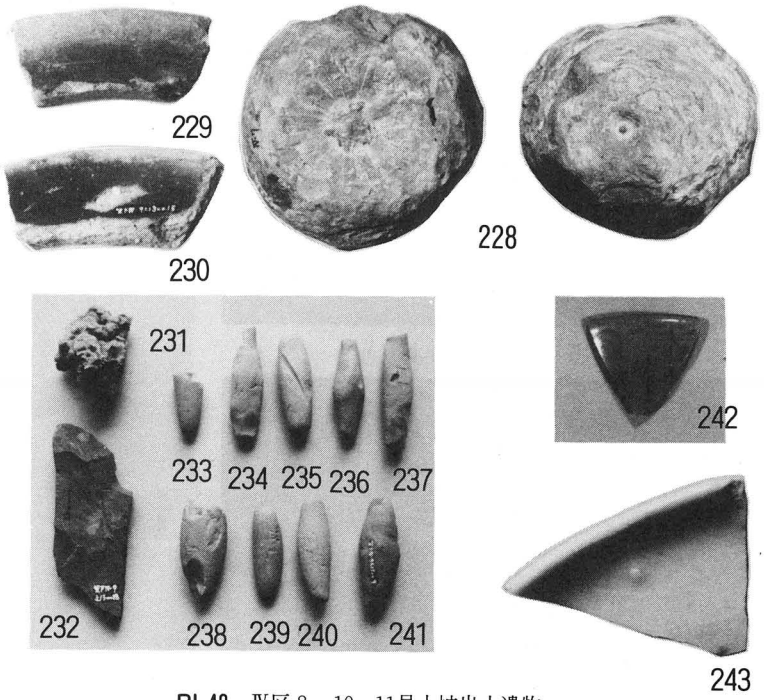
(7) 14号土坑（北西より）

12号土坑（Fig97）

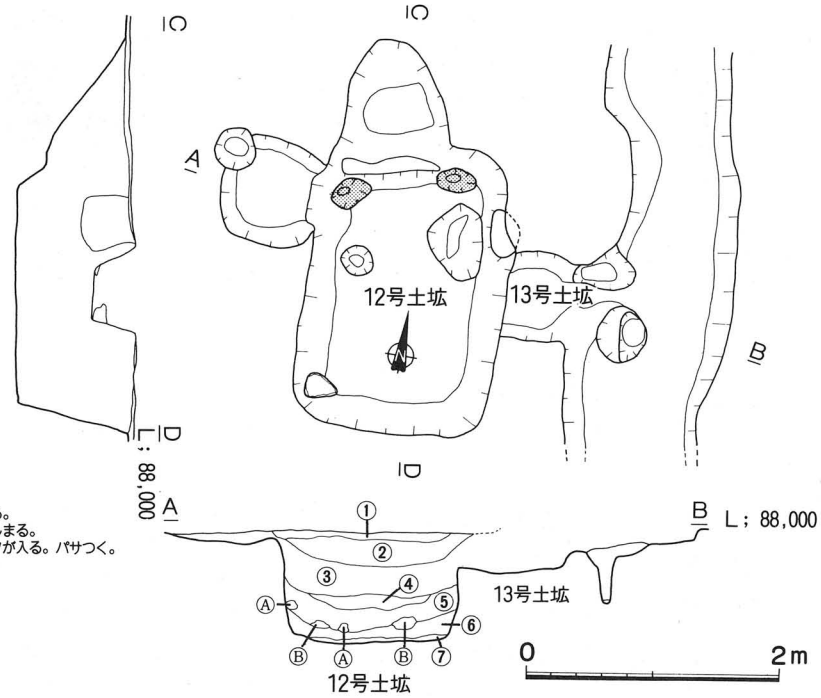
Ⅳ－８区、４号溝状遺構の西側に13号土坑と一緒に検出した。長方形様を呈し、北側はゆるやかに降り、途中で狭い段が中位より下につく。北側には両端にそれぞれ柱穴が掘り込まれている。また、東側壁面にも段がつく。長軸3.2m、短軸1.55m、深さ0.88mを計る。出土遺物には備前焼片、釘かくしと思われる鉄器（244）等が出土した。

13号土坑（Fig97）

Ⅳ－８区、４号溝に隣接し、12号土坑に切られる状況で検出した。0.56m程の円形状を呈する。出土遺物には備前焼大甕（245）と龍泉窯の蛇の目剝ぎ青磁椀の底部がある。（246・247）



PL40　Ⅳ区８・10・11号土坑出土遺物



土層説明
① 黒褐色土：かたくしまる。炭、焼土が入る。
② 暗茶褐色土：粘土、炭、焼土が入る。ややしまる。
③ 明茶褐色土：粘土、アカホヤ、Ⅶ層ブロックが入る。パサつく。
④ 茶褐色土：炭、焼土が入る。やや粘質。
⑤ 茶褐色土：炭、焼土が入る。やや粘質。
⑥ 茶褐色土：炭、焼土が入る。やや粘質。
⑦ 黒色土：炭、焼土が大量につまっている。
Ⓐ アカホヤブロック。
Ⓑ Ⅶ層ブロック。

Fig 97　Ⅳ区12・13号土坑実測図（１／60）

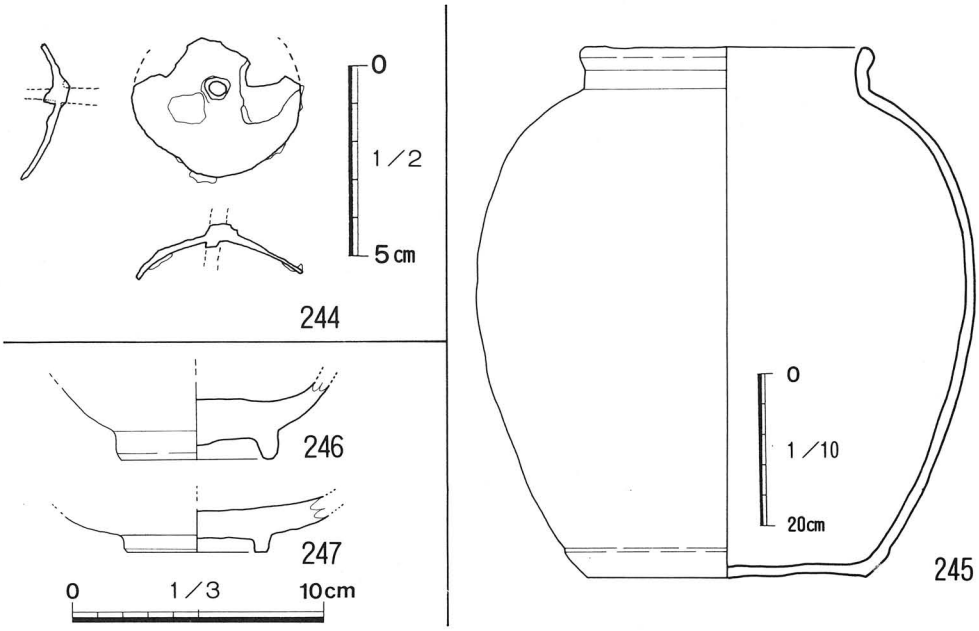


Fig 98　Ⅳ区12・13号土坑出土遺物（1/2・1/3・1/10）

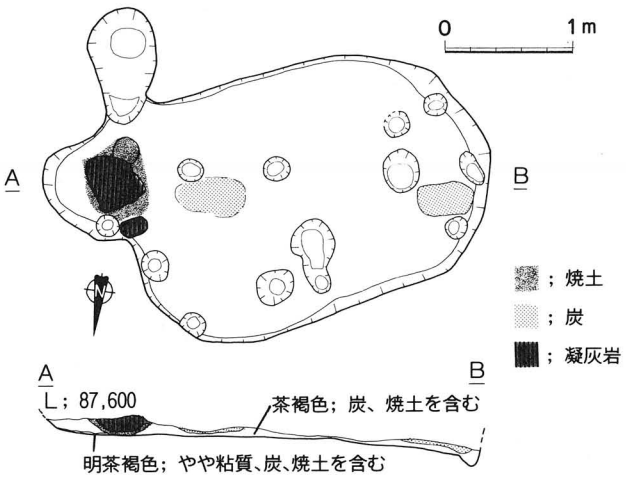
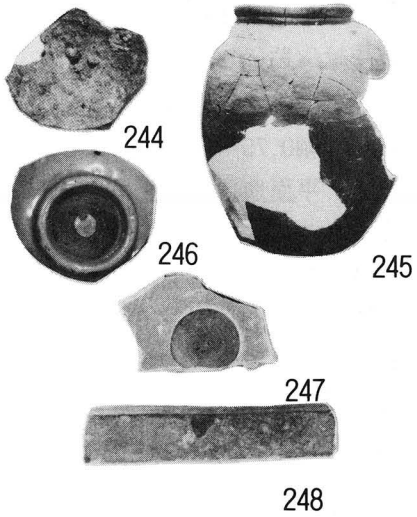


Fig 99　Ⅳ区14号土坑実測図（1／60）



PL41　Ⅳ区12～14号土坑出土遺物

14号土坑（Fig 99）

Ⅳ－11区、3号溝状遺構の北側で検出した。長軸 2.9m、短軸2m、深さ 0.9mを計る。東隅に柱穴が掘り込まれる。平面形はほぼ惰円形を呈するが、東側が長軸 0.9m、短軸 0.5m程の円形の造りつけがつき、0.4×0.5×0.2mの方形状で扁平の凝灰岩礫を据えつけている。両側に浅いピットがつき、周囲には焼土がつまっている。また西側および西端に厚さ2cmで60×30m程の炭の広がりがある。出土遺物には頁岩製砥石1点（248）と、青磁皿底部（247）1点がある。

15号土坑

Ⅳ－11区、15号土坑の西側で検出した。長軸 1.3m、短軸 0.3m、深さ 0.2mを計り、惰円形を呈する。西端にピットが掘り込まれる。出土遺物として、軽石製の異形石器（249）がある。249は最大厚3.4cm、長さ7cm程の円柱状の軽石の周囲に溝を螺施状に入れている。熱変等は見うけられない。

16号土坑

Ⅳ－11区、短軸 0.5m、深さ 0.8mを計る。不整形を呈す。判読不能の明銭が一枚出土している。

17号土坑

Ⅳ－11区、6号土坑の西側で検出した。長軸 0.5m、短軸0.35m、深さ0.2～0.4mを計る。南側が浅く、北側に向かって深くなっている。出土遺物は、いずれも上面で南側より寛永通宝（250）1枚、北側で凝灰岩製の石製品1点（252）が出土している。

18号土坑（Fig100）

Ⅳ－11区と13区の間で検出した。長軸 2.4m、短軸0.75～1.05m、深さ1.10～1.20mを計る。平面形は方形を呈するが、南側がやや丸くなる。基底部はⅧ層で、両端に人頭大の角礫を配する。出土遺物はない。

19号土坑（Fig101）

Ⅳ－13区の西端、18号土坑と20号土坑の間で検出された。平面形は長方形で北西隅に細長い段がつく。長軸 2.5m、短軸 1.8m、深さ 0.2mを計る。炭、焼土が大量につまっていた。四隅に柱穴を持ち、南側の一部を除いて、柱穴間を溝が結ぶ。出土遺物として、備前焼片が2点出土した。

20号土坑（Fig102）

Ⅳ－13区とⅣ－14区にまたがって検出された。平面形は、8号土坑に似る。四隅にピットが掘られ、東側を除いて溝によってつながる。西側は真中に段がつき、二重溝状を呈す

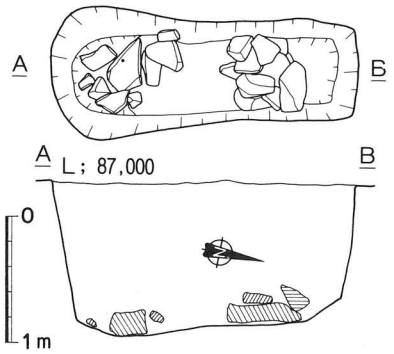


Fig 100　Ⅳ区18号土坑実測図（1／60）

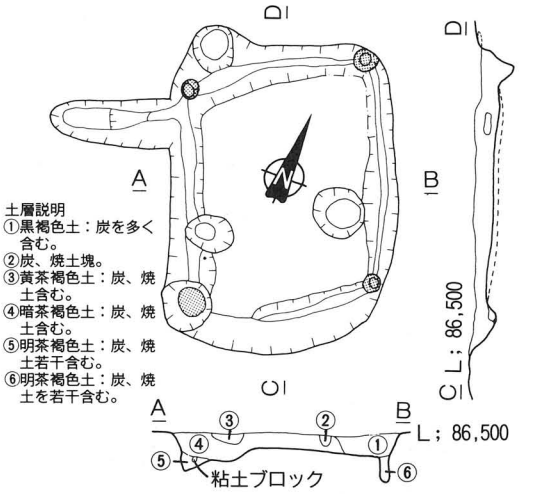


Fig 101　Ⅳ区19号土坑実測図（1／60）

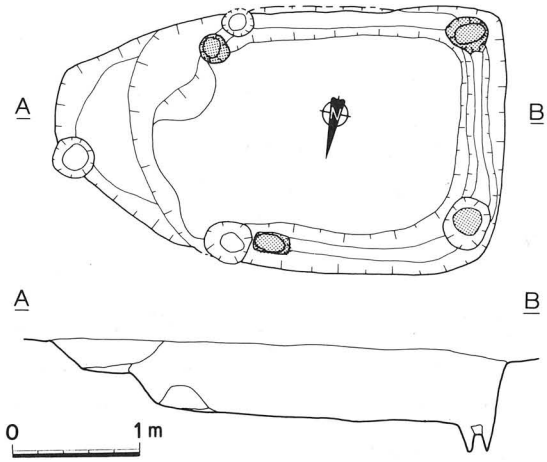


Fig 102　Ⅳ区20号土坑実測図（1／60）

る。長軸 3.5m、短軸 2.2m、深さ 0.6 mを計る。東側は段がほぼ中位につく。出土遺物には備前焼片、砂岩製の砥石（253）が1点ある。253は二面が丁寧に研磨されている。うち上部は特に緻密である。筋痕が数条残る。

21号土坑(Fig 103)

Ⅳ－14区、1号溝状遺構の東側で検出した。正方形を呈し、南に浅い土坑がつく。長軸 4.7m、短軸 2 m、深さ 1.2mを計る。三隅にピットが掘り込まれる。基底部はⅧ層となり、大量の炭と焼土がつまっていた。また上部に厚さ10cm程の粘土が敷きつめてあった。出土遺物には、凝灰岩片、備前焼片（254）等がある。

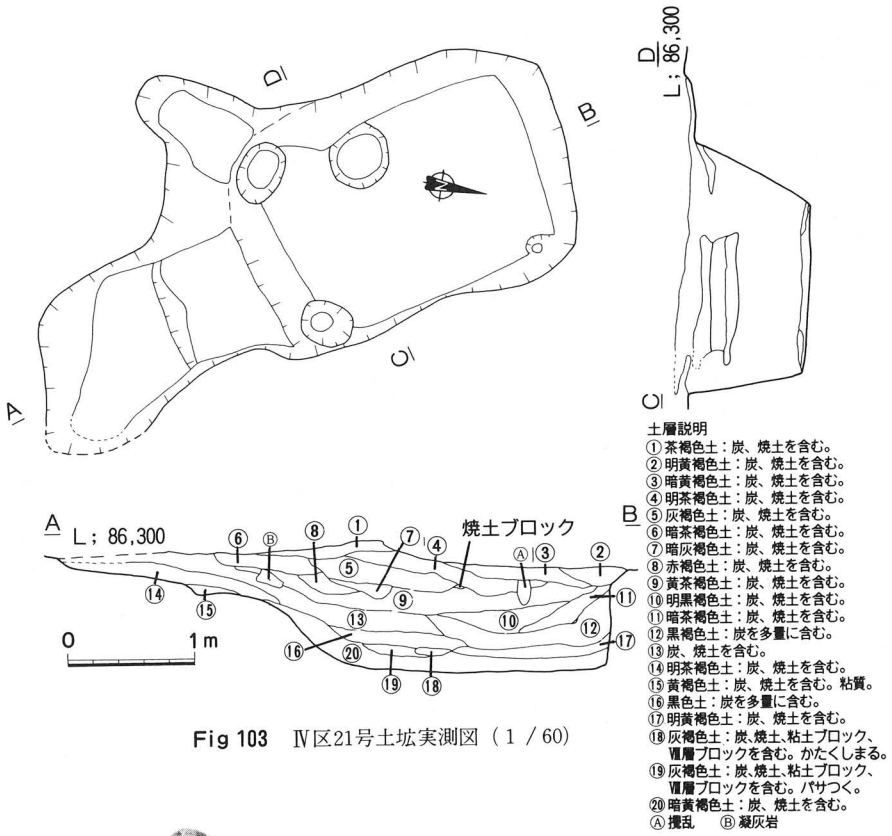
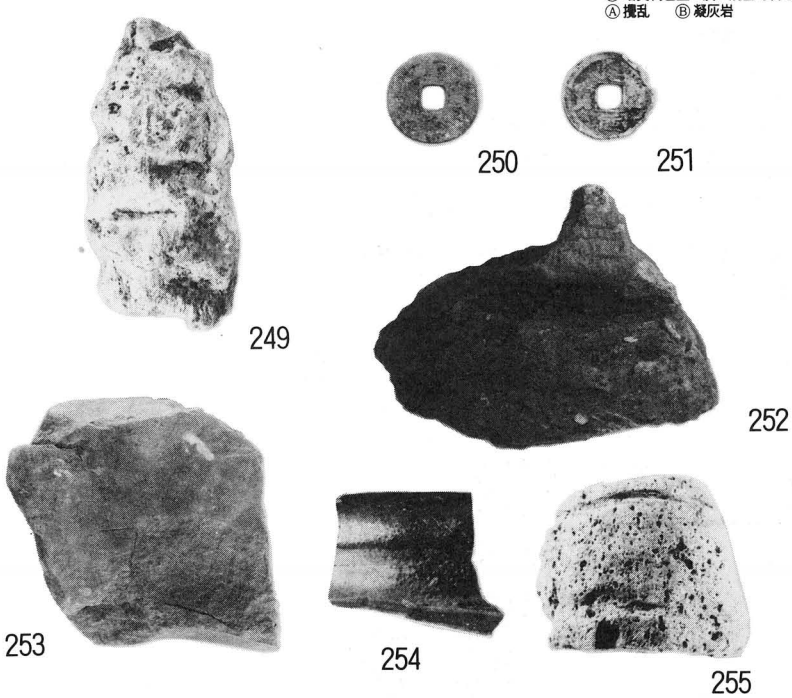


Fig 103　Ⅳ区21号土坑実測図（1／60）



PL 42　Ⅳ区15～24号土坑出土遺物

22号土坑（Fig104）

Ⅳ－12区、８号建物の中央部で検出した。平面形は円形で、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ 0.5mを計る。東側中位に段がつく。出土遺物には備前焼片がある。

23号土坑

Ⅳ－10区西端で検出された。平面形は惰円形を呈し、長軸 1.3m、短軸 1.2m、深さ 0.4mを計る。西側にピットが掘り込まれる。出土遺物には軽石製の石製品（255）がある。両端に溝が彫られている。形態は碍石を半截した感じである。中位から下方が抉られている。熱変等は見うけられない。

溝状遺構

Ⅳ区では、溝状遺構を13基検出した。内訳は、台地を東西に走るもの４基（３・９・12・13号溝）、台地の縁辺を走るもの４基（１・２・５・６号溝）、南北方向に走るもの３基（４・７・10号溝）、枝分れして併行するもの２基（８・11号溝）である。

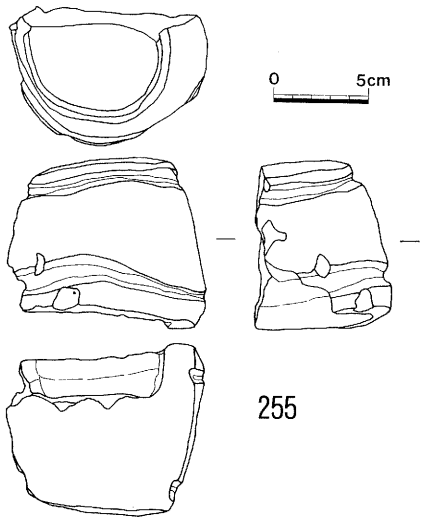


Fig 105　Ⅳ区23号土坑出土遺物実測図（１／４）

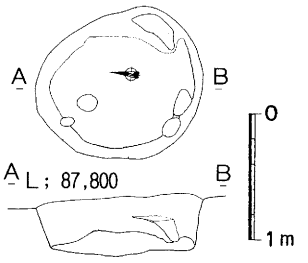
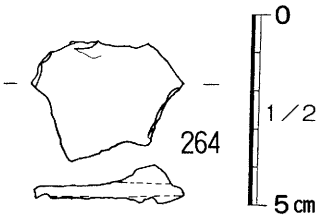


Fig 104　22号土坑実測図（１／60）



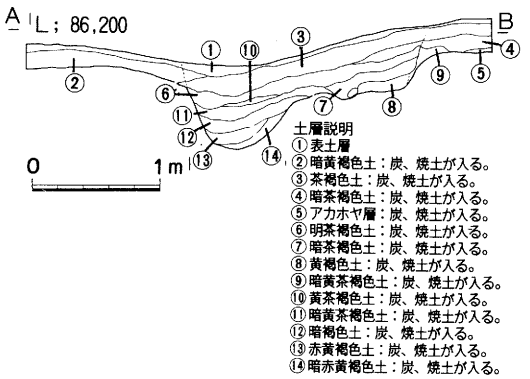


Fig 106　１号溝状遺構土層図（１／60）

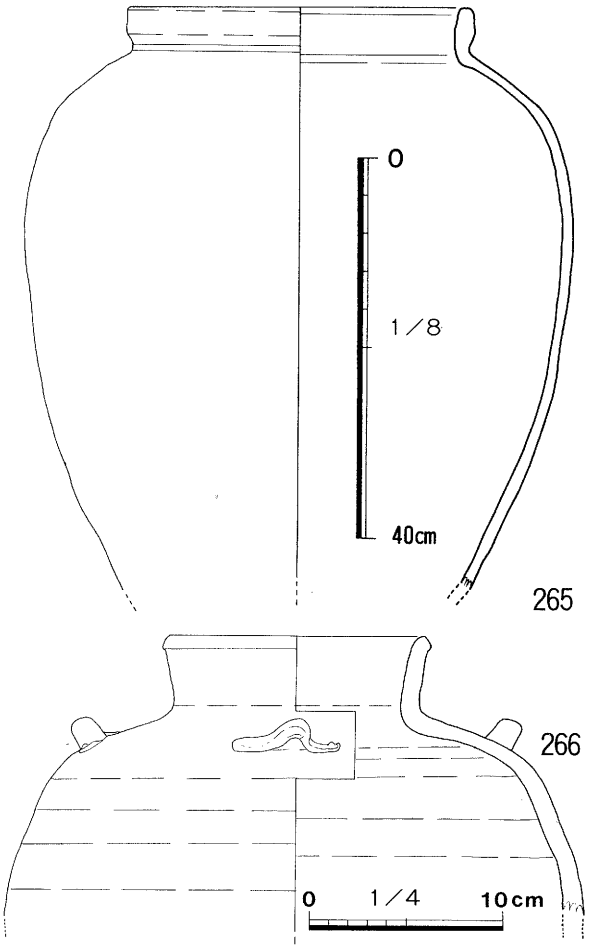
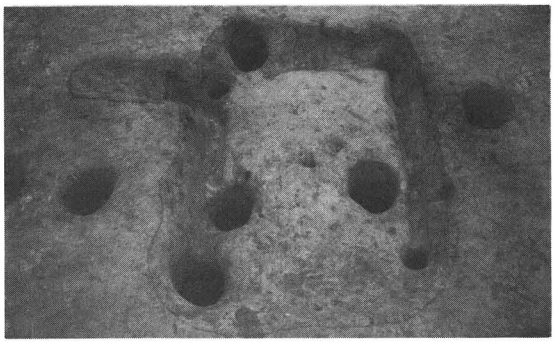


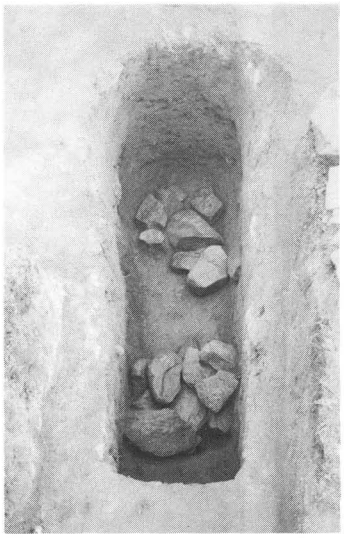
Fig 107　Ⅳ区１号溝状遺構出土遺物（1/2・1/4・1/8）

PL43

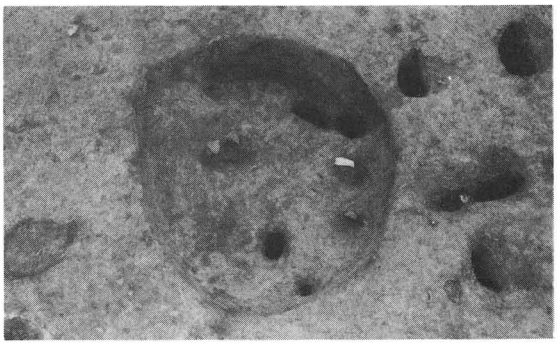


(1) 19号土坑（南より）

(4) 20号土坑（東より）

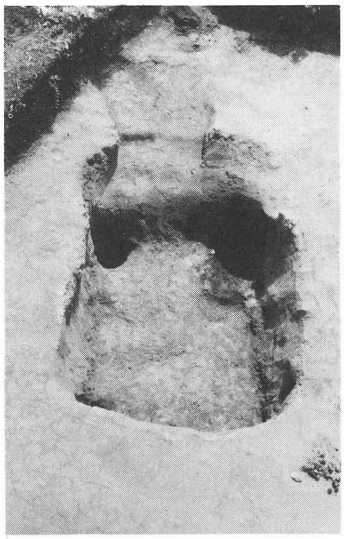


(2) 18号土坑（北より）



(5) 22号土坑（西より）

(6) 1号溝状遺構（北より）

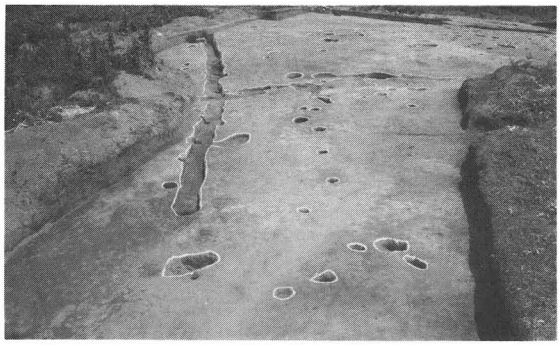


(3) 21号土坑（北より）

(7) 1号溝状遺構（北より）

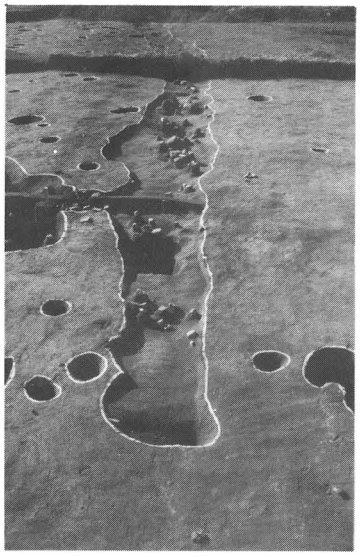
PL44

(1) 1号溝状遺構断面（南より）

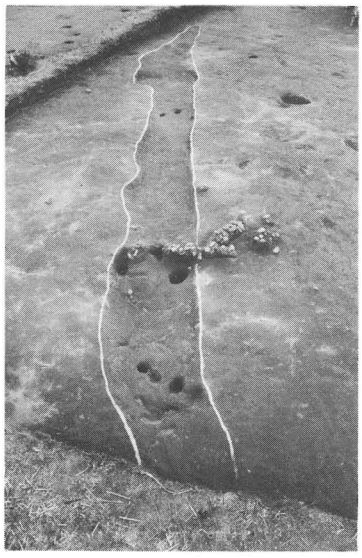


(2) 2号溝状遺構（南より）

(3) 3号溝状遺構（西より）

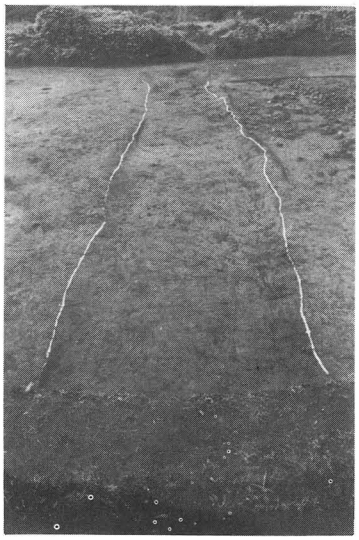


(4) 4号溝状遺構（南より）



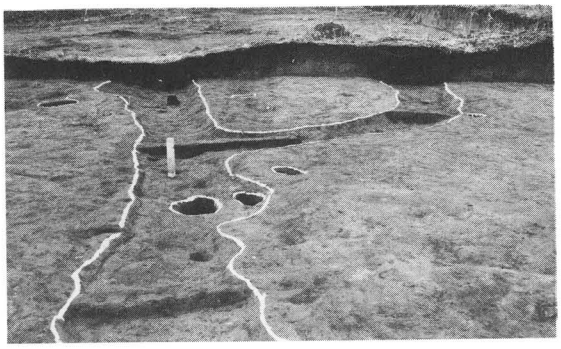
(5) 6号溝状遺構（北より）

(6) 7号溝状遺構（東より）

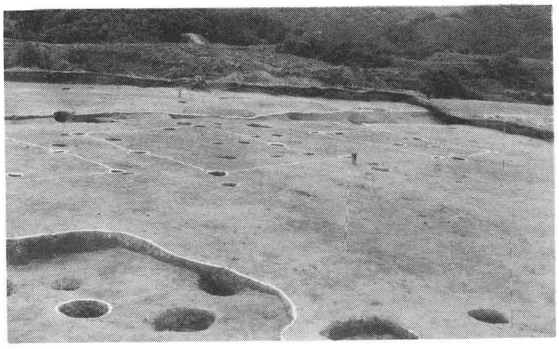


(7) 12号溝状遺構（東より）

PL45

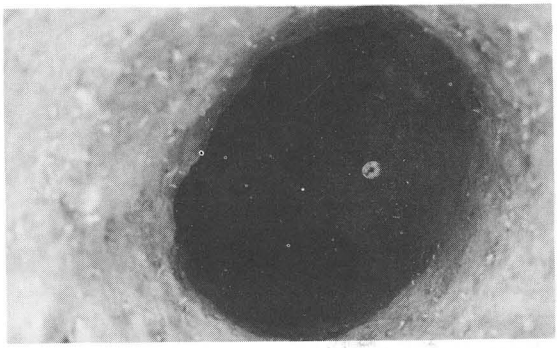


(1) 10号・11号溝状遺構（北より）



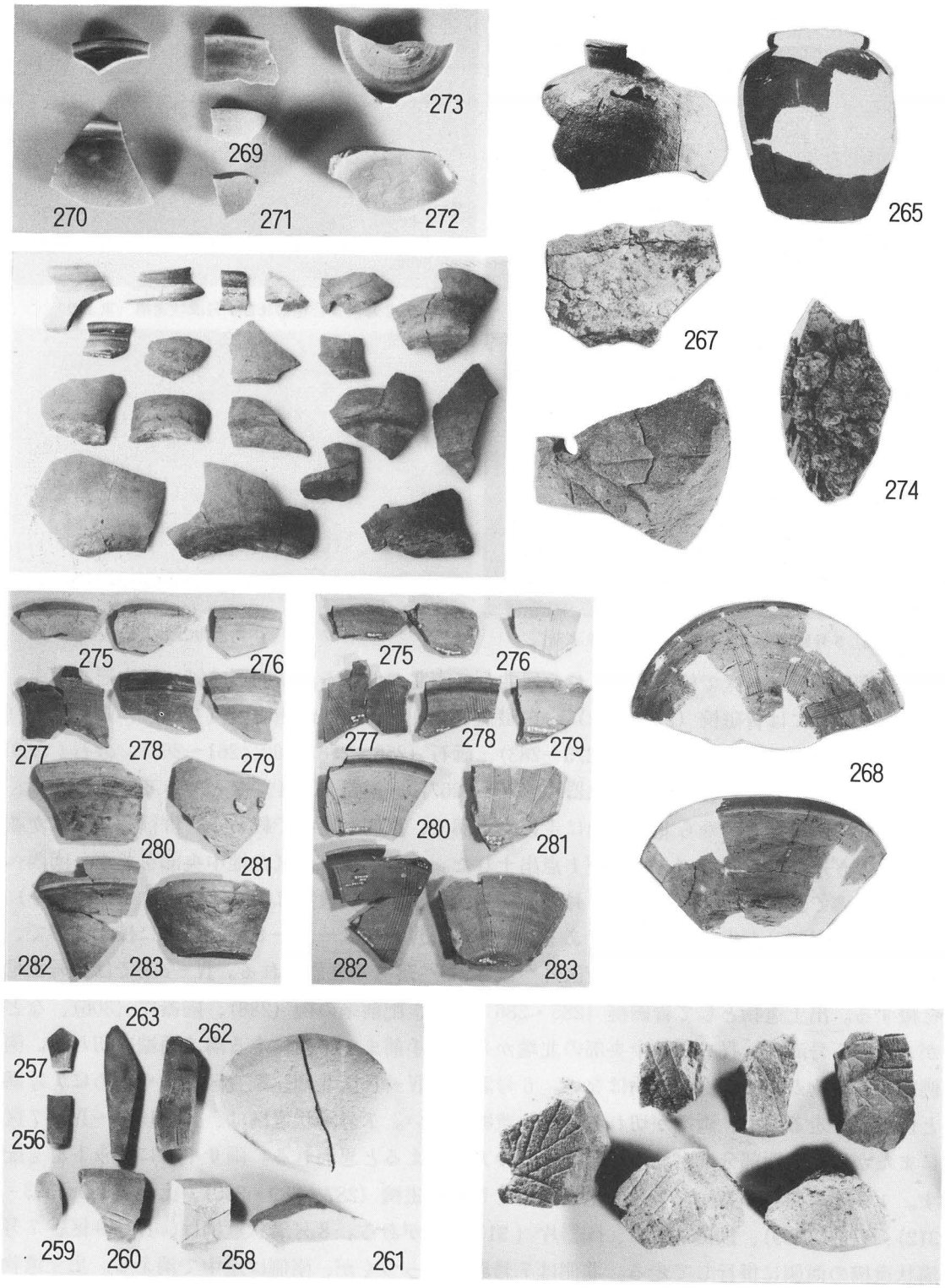
(3) 2号・3号建物及び7号溝状遺構（東より）

(2) 5号建物及び5号溝状遺構（北東より）

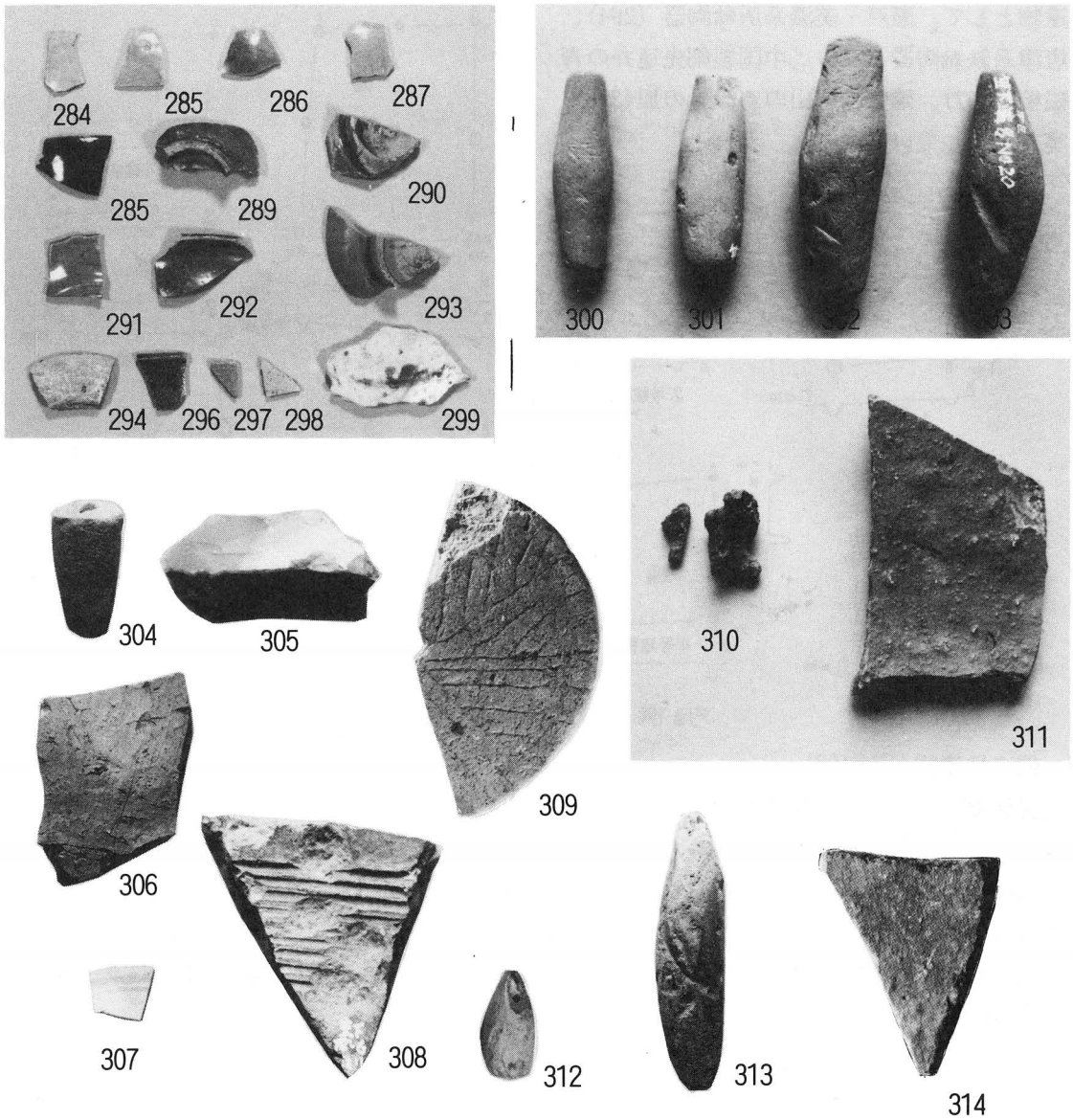


(4) 7号ピット内遺物出土状況

1号溝は、Ⅳ－14区で検出した。やや屈曲して南北へ伸びる。断面形は鈍いV字形を呈す。出土した遺物には青磁椀（270～272）、白磁皿（269）、備前焼四耳壺（269）、備前大甕（265）及び甕片、すり鉢片（268・275～283)、砥石（256～258、260、261～263)、敲石（259)石皿（261）、凝灰岩製石臼片、鉄器片（264・267）、銅器（274）などである。2号溝は、Ⅳ－11区の西端を北西から北東方向に走行する溝で、東側が途中で終わる。併行して柱穴が並ぶ。しのぎ連弁の青磁椀（284）が1点出土した。3号溝は、Ⅳ区台地中央部を北東～南西へ横断する溝で、2号溝、4号溝、7号溝、10号溝と接する。遺物は少なく土錐片1点（304）と青磁片1点(305)が出土したのみである。4号溝は、Ⅳ－10区～Ⅳ－8区、3号溝に接する形で、南東～北西方向に走る。Ⅳ－10調査区外へ続き、谷へ落ちると思われる。Ⅳ－8区では12号土坑と接する。出土遺物として青磁椀（285・286・293)、肥前系の椀（288)、陶器片（306)、などがある。5号溝は、Ⅳ－10区中央部の北端から9区手前まで東西に走る溝で両端は切れる。南側に5号建物が建つ。出土遺物はない。6号溝は、Ⅳ－10区北端、調査区をやや斜めに7号溝と併行して走る溝で、両端が切れる。出土遺物はない。7号溝状遺構は、Ⅳ－15区～Ⅳ－7区にまたがる。北西部分は台地の縁辺から谷の方へ消えると思われる。両サイドにピット群を配す。1～4号建物が東側に並ぶ。出土遺物として青磁椀（287・289・290)、土錘（300～303・312)、石臼（309)、鉄器（310)、陶器片（311）等がある。8号溝状遺構は、Ⅳ－9区、7号溝状遺構の西側に併行して走る。北側は7号溝にくっつくが、南側は途中で消える。出土遺物はない。9号溝状遺構は、片方が7号溝とくっつき、垂直方向に（東西方向）走る。東側は台



PL46 Ⅳ区１号溝状遺構出土遺物



PL47　Ⅳ区溝状遺構出土遺物（1号溝以外）

地の縁辺へ向かい、谷の方へ消えるものと思われる。肥前焼1点（307）と土錘1点（313）が出土している。10号溝状遺構は、Ⅳ－5区と7区の西側を北西～南東方向に走り、両端はそれぞれ3号溝と11号溝にくっつく。出土遺物に青磁稜花皿（291）と鉢（292）がある。11号溝状遺構は片方が10号溝とくっつき、10号溝と併行して走り、Ⅳ－5区で消える。出土遺物として、肥前染付の皿（299）と備前焼擂鉢がある。12号溝状遺構は、Ⅳ－5と6区のほぼ中央を走る。両端ともに台地の縁辺へ向かい谷の方へ消えるものと思われる。出土遺物はない。13号溝状遺構は、Ⅳ－3と4区の東西側を12号溝と併行して走る。東側端が攪乱をうける。出土

遺物として、瀬戸・美濃系灰釉陶器（294）、唐津系鉄釉陶器（296）、中国製剣先連弁の青磁椀（297）、嬉野内野山の青緑釉の皿(298)等が出土している。

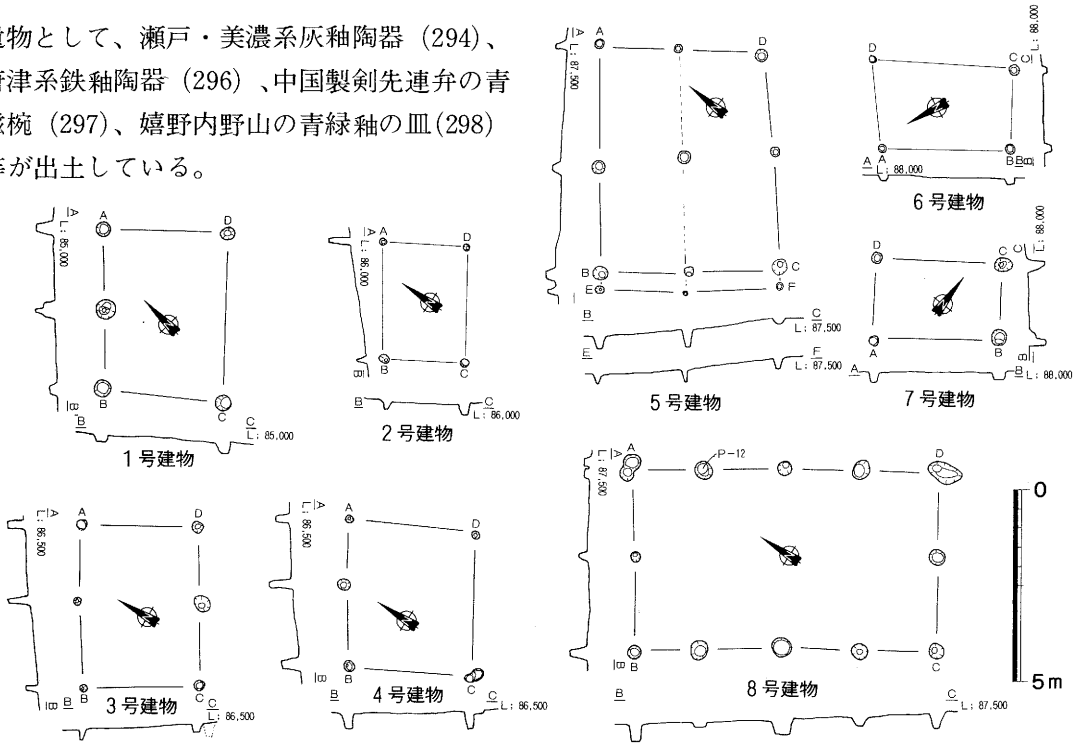


Fig 108　Ⅳ区掘立柱建物実測図（1／200）

掘立柱建物(Fig 108)

Ⅳ区では台地北東より北西側にかけて多量のピット群を検出した。頻繁に建て替えが行なわれたようで、数穴つながるものもある。掘立柱建物として復元できたものは8軒のみである。内分は1間×1間のもの3軒(2・6・7号建物)、2間×3間のもの1軒(3号建物)、2間×5間のもの(8号建物)、廂をもつもの(5号建物)、片方に柱のない変形のもの2軒（1・4号建物）である。柱穴は円形または惰円形をなし、8号建物の柱穴（Pit 12）より明銭が1枚出土した。柱間は一定でなく直線に並ばないものが多い。従って柱間も規則性がない。（Tab 6）

また建物は溝に併行してつくられているものが多い。それから、ピット内より僅かではあるが明銭等が出土している。祭祀にかかわるものと思われる。

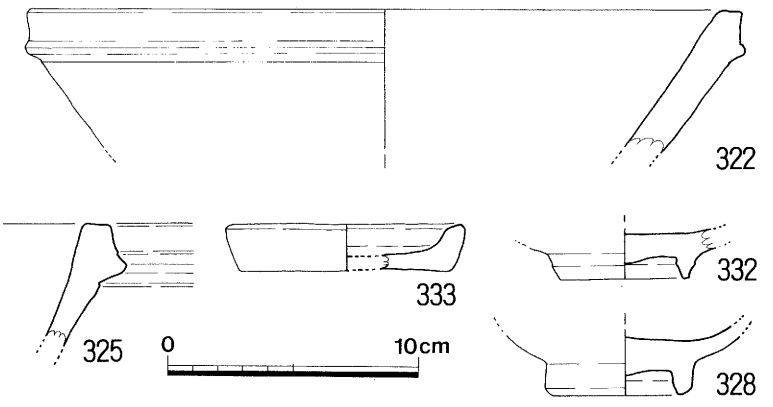
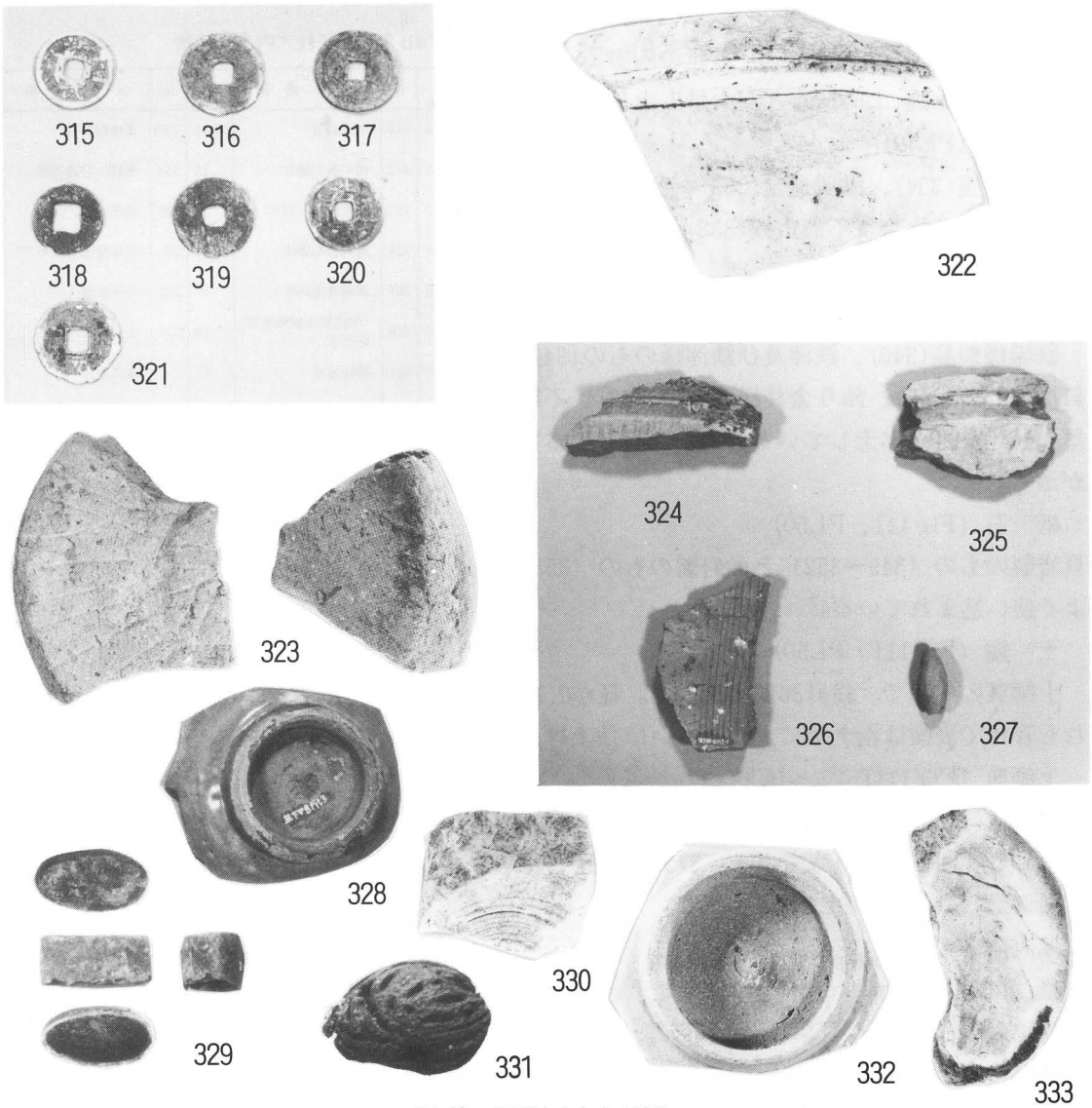


Fig 109　Ⅳ区柱穴内出土遺物（1／3）



PL48　Ⅳ区柱穴内出土遺物

Tab 6　Ⅳ区掘立柱建物柱間計測表

柱間	A－B	B－C	C－D	D－A	B－E	E－F	F－C
1号建物	2.2—2.1	3.2	4.5	3.3			
2号建物	3.1	2.1	3.1	2.2			
3号建物	2.0—2.4	3.0	2.0—2.2	3.0			
4号建物	1.8—2.1	3.1	3.7	3.3			
5号建物	3.3—2.8	2.3—2.4	3.1—2.5	2.2—2.0	0.35	2.3—2.4	0.5
6号建物	3.4	2.1	3.7	2.4			
7号建物	3.3	2.0	3.3	2.2			
8号建物	2.2—2.5	1.7—2.2—2.0—2.0	2.3—2.5	2.0—1.9—2.2—2.0			

Ⅳ区中・近世出土遺物

Ⅳ区では遺構検出時に、中・近世の陶磁器、鉄器、砥石、古銭、土錘、土師皿などが大量出土している。

古　銭（PL49）

天保通宝(334)、洪武通宝(335)、照寧元豊（336）元宝通宝(377)、判読不能古銭(338・339)等が出土している。

鉄　器（Fig 110、PL49）

鉄環様製品(340)、鉄滓及び鉄滓様のもの(341)、釘様のもの(345)、飾り金具様のもの(342)、不明鉄器(343) などが出土している。341と345には木質片がつく。

Tab 7　Ⅳ区柱穴内出土遺物

PitNo	No	出土遺物		No	出土遺物
Pit 1	315	洪武通宝	Pit11	332	青磁椀底部
2	322	滑石製石鍋片	12	318	明銭・判読不明
3	323	凝灰岩製石臼片	13	320	洪武通宝
4	324	滑石製石鍋片	14	331	炭化種子（モモ？）
5	326	備前焼擂鉢片	15	321	治平元豊
6	328	(中国製青磁椀底部)印花文	16	327	土錐
7	317	朝鮮通宝	17		嘉祐通宝
8	329	銅器・飾り物(？)	18	325	滑石製石鍋片
9	330	土師皿(糸切り底)	19	316	元豊通宝
10	319	明銭・判読不明	20	333	土師皿(手づくね)

砥　石（Fig 111、PL50）

頁岩製のもの（349～352）と砂岩製のもの（353～355）が出土している。特に頁岩製のものはよく使い込まれている。

土　錘（Fig 111・PL50）

土師質の土錘で、総計36個出土した。径が0.1～0.6cm、大きさも3～5cmと幅がある。いずれも管状で表面は指ナデによりきれいに仕上げられている。

土師皿（Fig 111）

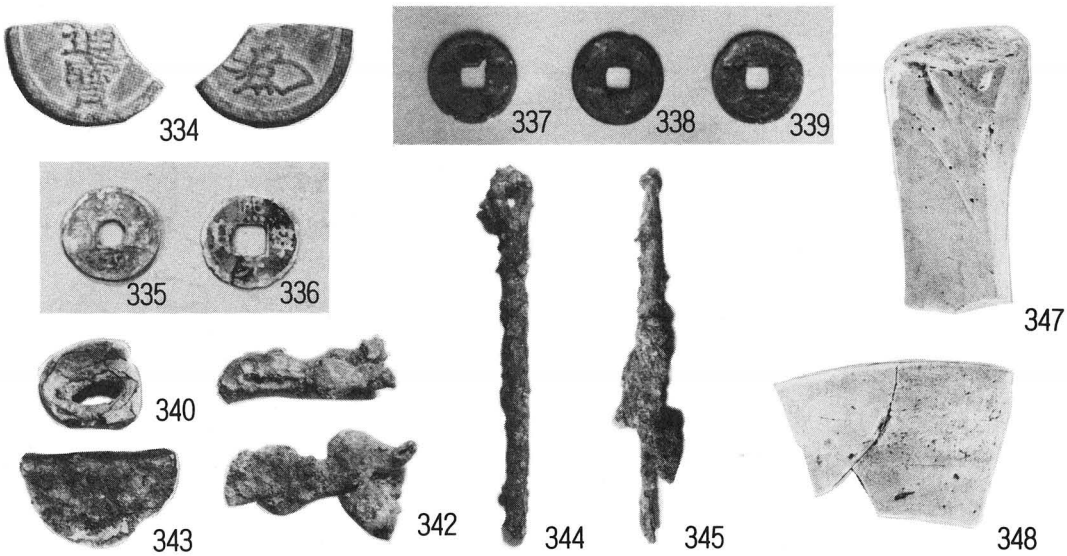
373 は口径 9.8cm、器高 1.6cmを計る。口唇部にススが付着する。374 は 7.4cm、器高 1.5cmを計る。回転糸切り底である。375 は底径 3.8cmを計る。回転糸切り底である。

陶磁器（Tab 8・PL50）

輸入品（青磁、白磁、染付褐釉陶器等）と国産品（瀬戸、美濃、肥前、伊万里、唐津、須恵質・土師質土器等）が多数出土している。

Tab 8　Ⅳ区出土陶磁器類

輸入品								国産品				
産地	種類		特徴		文様	時期	出土遺物	産地	種類	特徴	時期	出土遺物
青磁	椀	A	口縁が直行するもの	①	画花文	12～13C	414、428	瀬戸	椀	灰釉	14C後～15C前	395、398、434、
				②	しのぎ連弁	13～14C前半	412	美濃	皿	陶製芙蓉平皿	16C後半	392
				③	ヘラがき文	14C後～15C初	430、442	肥前	皿	鉄釉	18C	419
				④	剣先連弁	14C後～15C前	384、391、404、413、425			芙蓉平皿	1650～1660年代	418（焼成不良）
		B	端反りのもの	①		14C後～15C中	385、393、394、402、441	伊万里	椀			
				②		14C末～15C中	386、387				18C中～末	417
		ふたもの（龍泉窯）			しのぎ連弁	13C後～14C	427(縁を無釉、ふせ焼き)	唐津	椀	鉄釉	？	423
		盤（〃）			内側にしのぎ連弁	14C	397	唐津系	皿		1600—1630	396
	皿	A			くしがき文	12～13C	388				17C前半	444
		B	稜花皿	①	〃	14C中～16C中	436、438、439	産地不明	椀	透明釉	江戸中期	416
				②	〃	15C中～16C中	379、380、381、410、432		皿			421、426、429
				③	〃	15C後～16C中	403、405				17C後半	389
白磁	椀		端反り			明代	443、445	須恵質	大甕		中世	346
	皿					15C～16C	411、378		擂皿		中世	401
						明代	383、406、415(蛇の目状の釉)		壺		中世	400
			表面化粧がけの後全体施釉			16C	382	土師質	擂鉢		中世	424
	小杯					14C後～15C	422		鍔釜	東海系	中世	399、433
染付	椀					16C後～17C初	409					
	皿					15C末～16C中	431					
						16C代	407、408（景徳鎮）					
	小皿					16C代(明代後半)	390					
褐釉陶器－耳付壺						明代	437					



PL49　Ⅳ区出土鉄器・古銭等

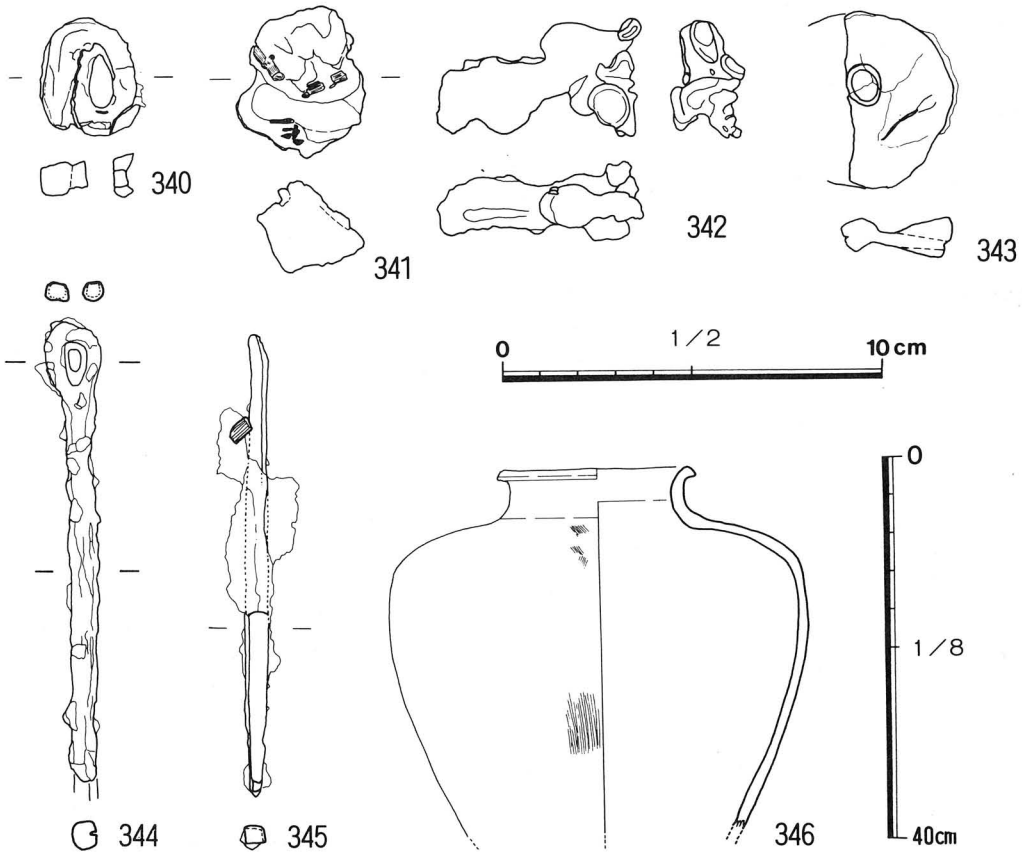


Fig 110　Ⅳ区出土鉄器・陶器（1/2・1/8→346）

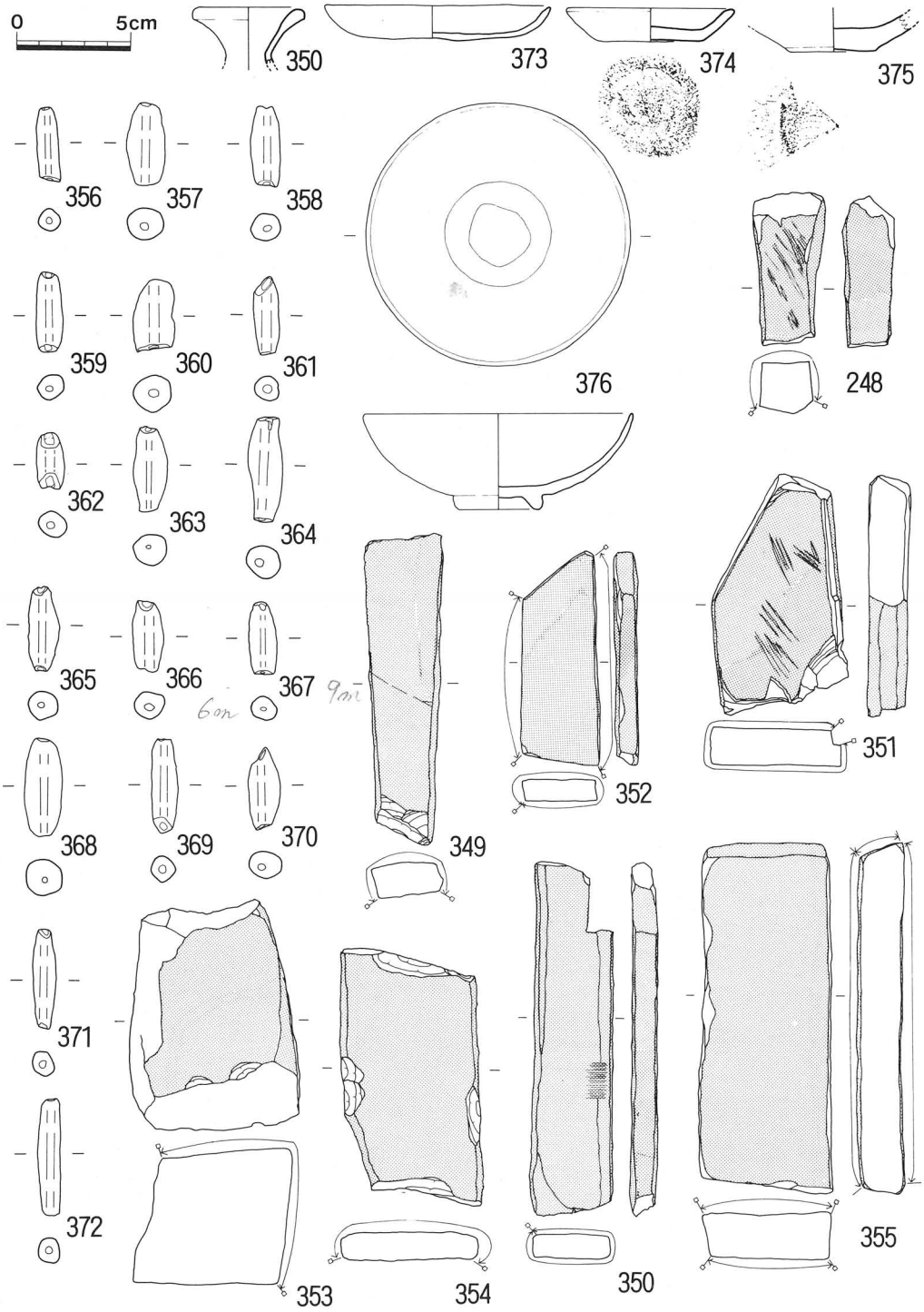
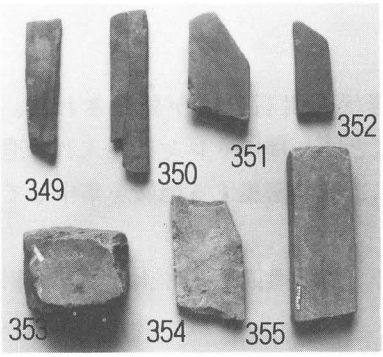
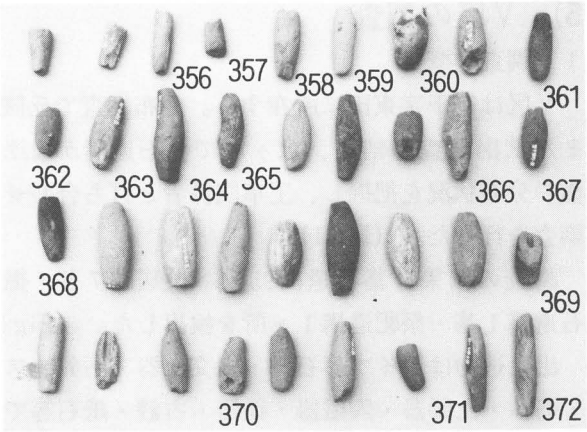
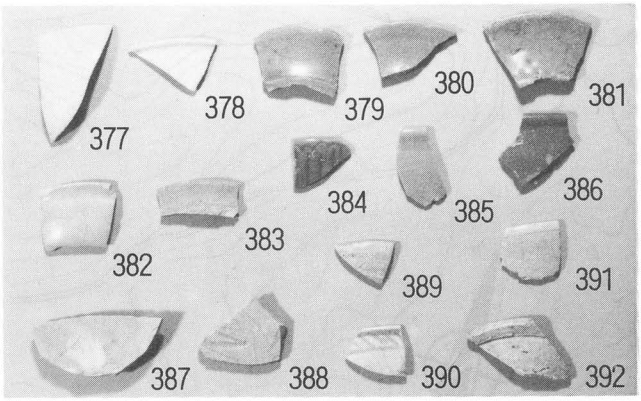


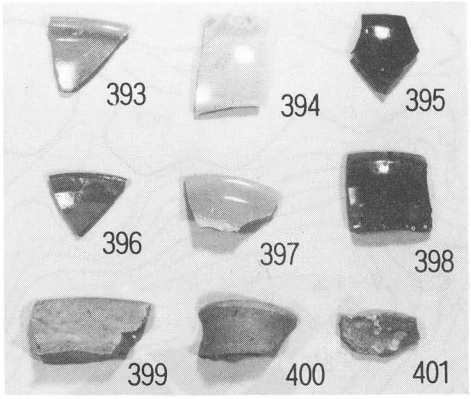
Fig 111 Ⅳ区出土土錐・砥石等（1/3）

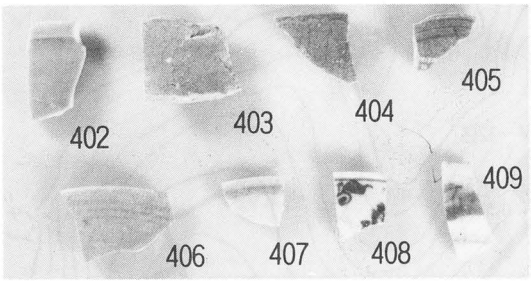
PL50

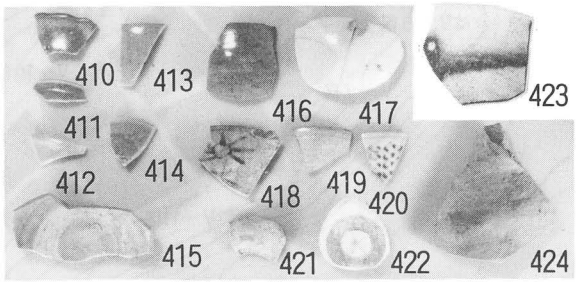


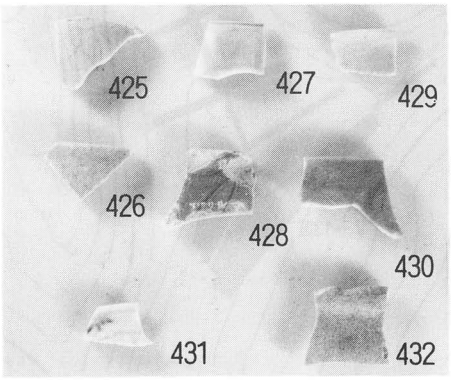


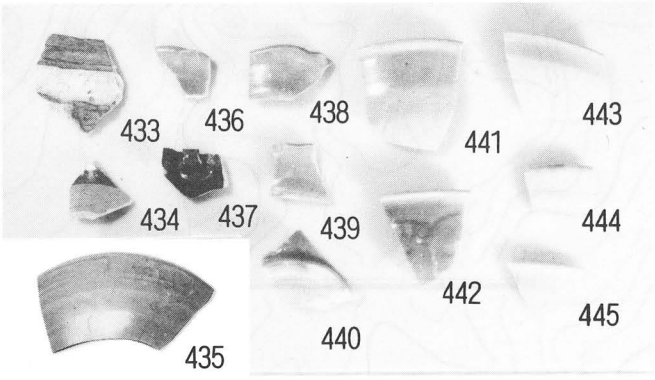












PL50　Ⅳ区出土砥石・土錘・陶磁器

(5) Ⅴ区の調査

1．調査の概要

Ⅴ区は笹下字東田に所在する。分布調査で丘陵の北端に円形状の組石遺構が発見された。また試掘調査の結果、数ヶ所で集石遺構が確認された。Ⅳ区と同じ様にトレンチを入れて遺構の分布状況を把握し、工事関係者と打ち合わせを行い、特に遺構の密集する地域を集中して調査を行った。（Fig 112）

調査の結果、集石遺構95 基・住居跡７基・掘立柱建物９軒・溝状遺構１基・土坑８基・組石遺構１基・祭祀遺構１ヶ所を検出した。（Fig 113）

出土遺物はナイフ形石器・縄文土器・石鏃・スクレイパー・石斧・敲石・磨石・石皿・礫器・石核・土師器・陶磁器・鉄器・古銭・砥石等である。

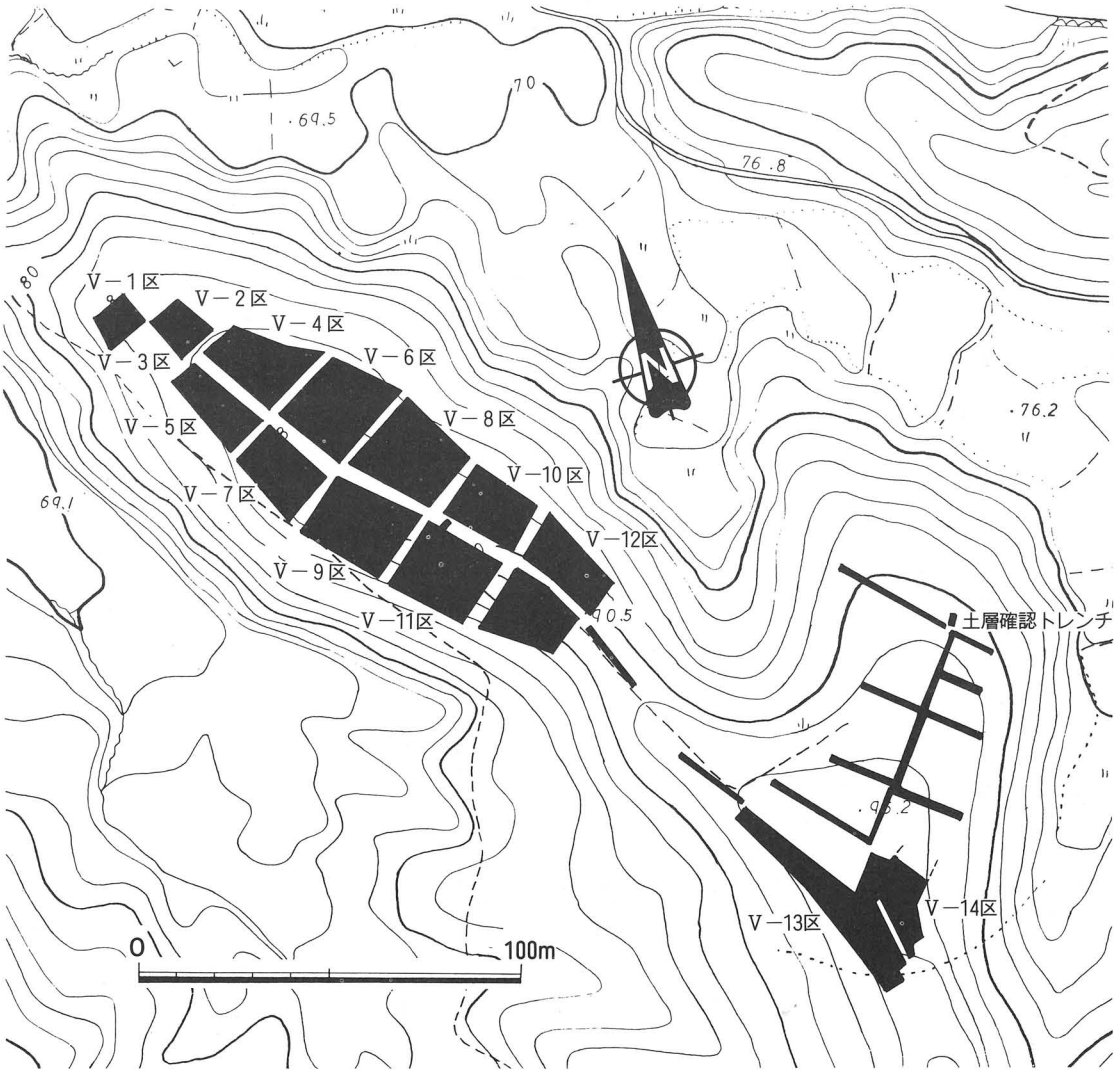


Fig112　Ⅴ区トレンチ設定図（1／2,000）

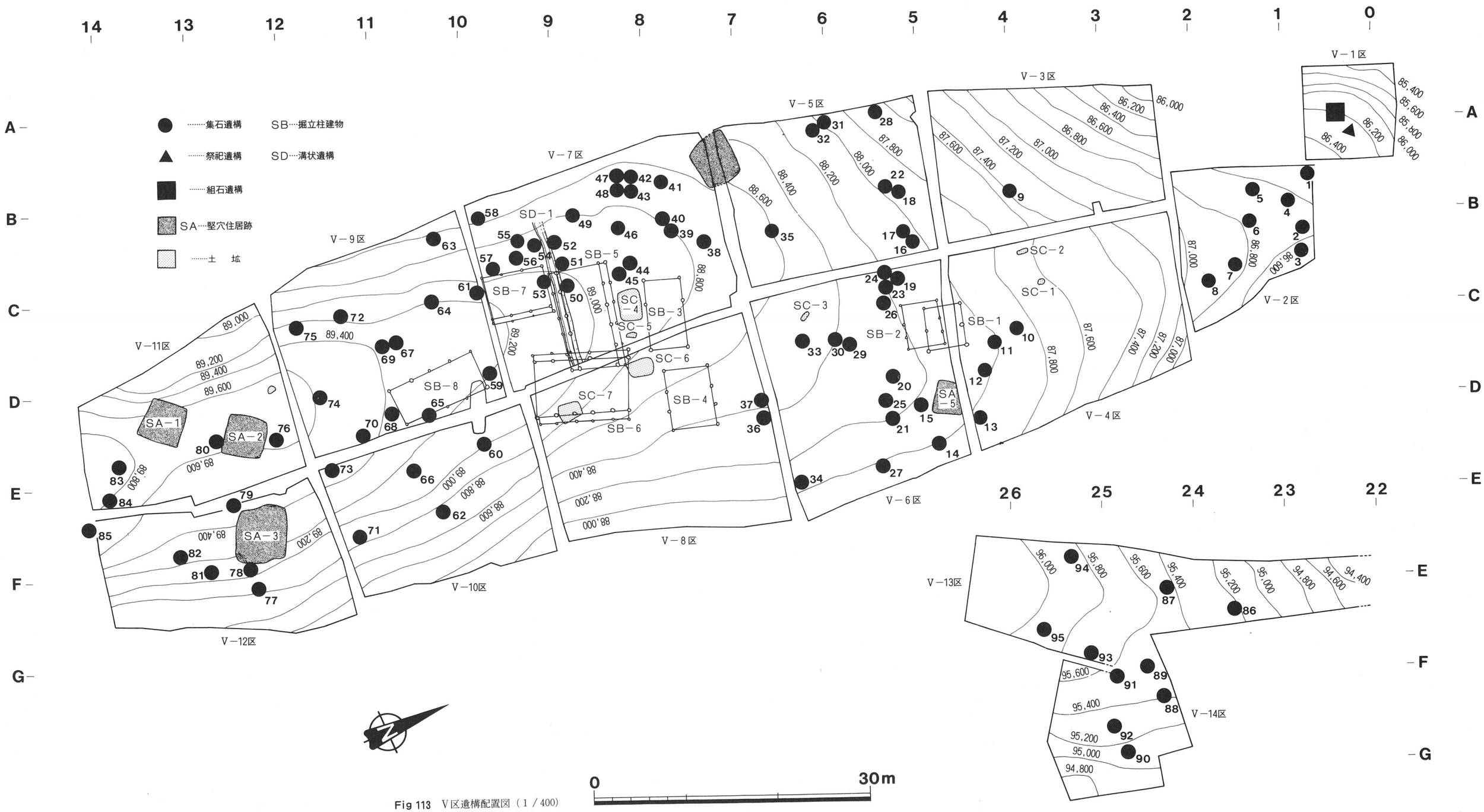
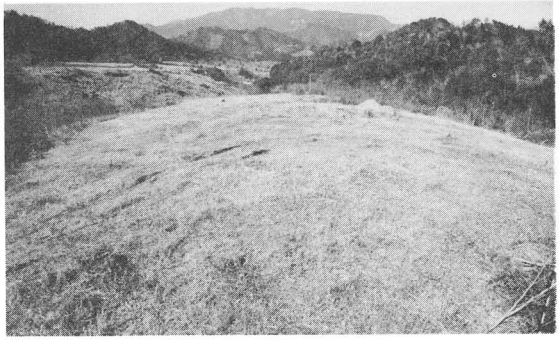


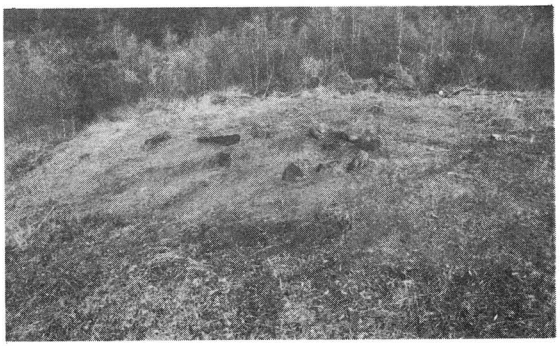
Fig 113　V区遺構配置図（1／400）

(1) Ⅴ区遠景（北より）

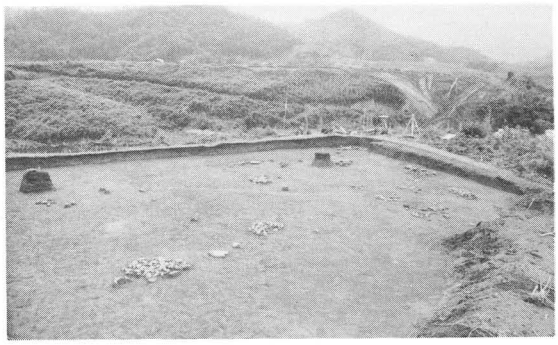
(2) 調査前近景（東より）



(3) 調査前近景（南より）

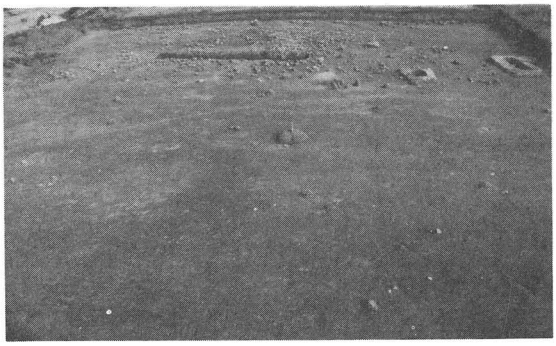


(4) Ⅴ－１区調査前



(5) Ⅴ－２区検出状況（東より）

(6) Ⅴ－３区検出状況（西より）



(7) Ⅴ－４区検出状況（西より）

(8) Ⅴ－５区検出状況（南より）

PL 52

(9) Ⅴ－６区検出状況（南より）

(13) Ⅴ－10検出状況（南より）

(10) Ⅴ－７区検出状況（南より）

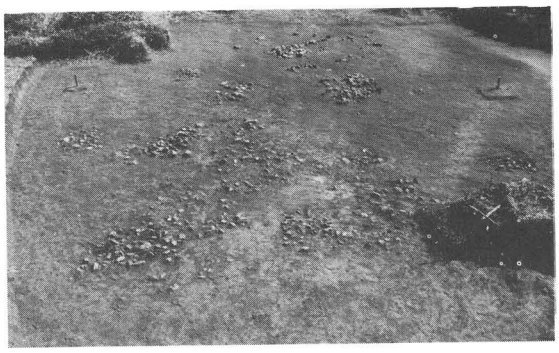
(14) Ⅴ－11検出状況（南より）

(11) Ⅴ－８区検出状況（南より）

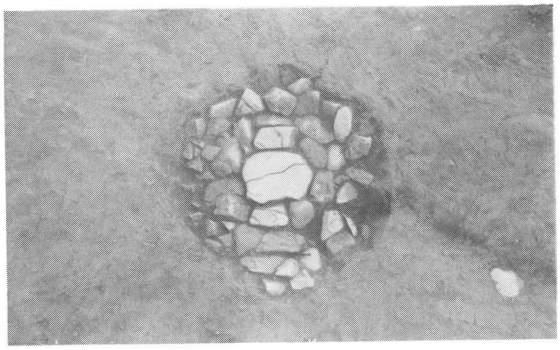
(15) Ⅴ－12検出状況（　より）

(12) Ⅴ－９区検出状況（南より）

(16) Ⅴ－13検出状況（南より）



(17) V－15検出状況（東より）

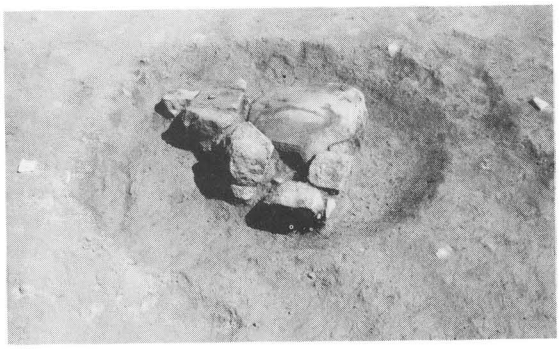


(21) 9号集石（敷石）

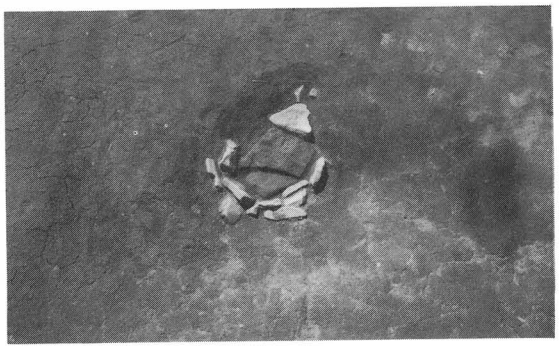
(18) 10号集石（検出）

(22) 26号集石（敷石）

(19) 36号集石（検出）



(23) 63号集石（敷石）



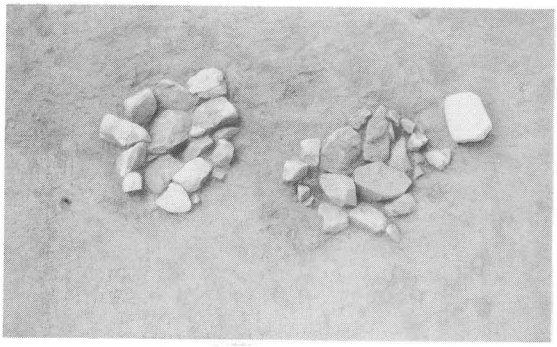
(20) 5号集石（敷石）

(24) 24・25号集石（検出）

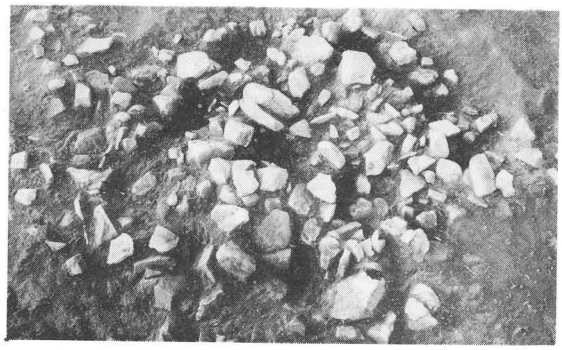
PL 54

(25) 16・17号集石（完掘・敷石）

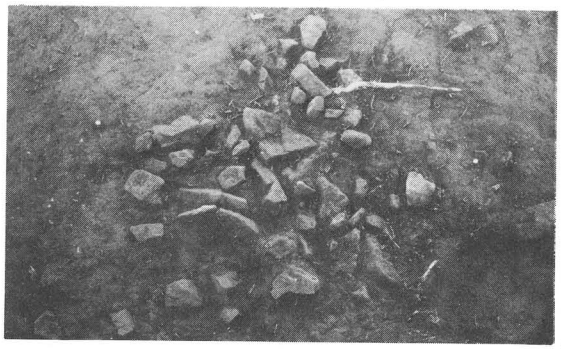
(29) 93号集石（完掘）



(26) 69・67号集石（敷石）



(30) 91号集石（検出）

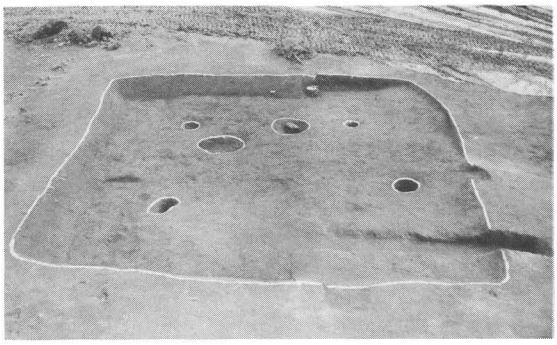


(27) 93号集石（検出）

(31) 91号集石（完掘）

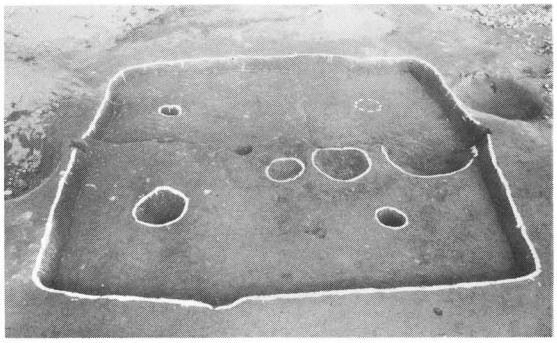
(28) 93号集石（敷石）

(32) 5号集石（検出）



(33) 1号住居跡（北より）

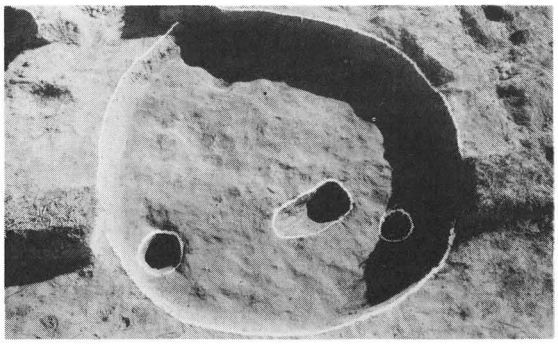
(37) 5号住居跡（南より）



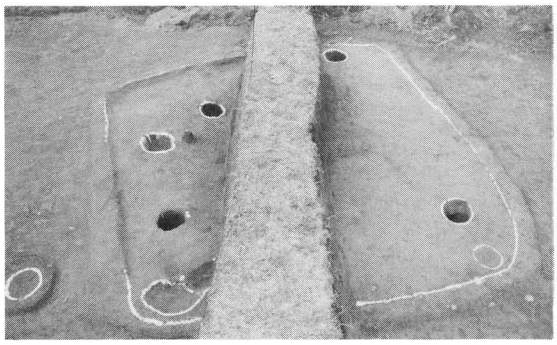
(34) 2号住居跡（西より）

(38) 組石遺構・検出（西より）

(35) 3号住居跡（北より）



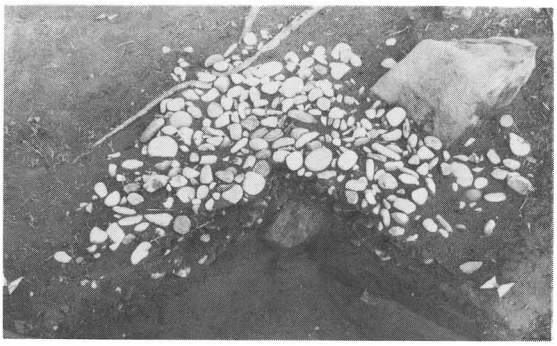
(39) 組石遺構・完掘（西より）



(36) 4号住居跡（東より）

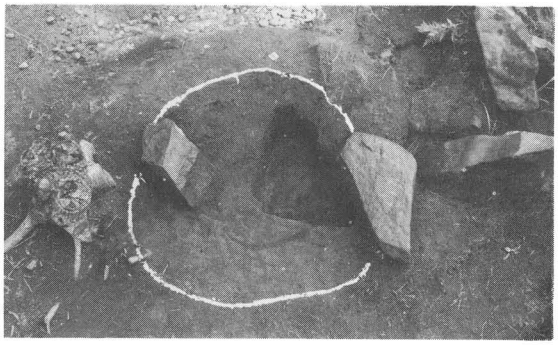
(40) 祭祀遺構（西より）

PL 56



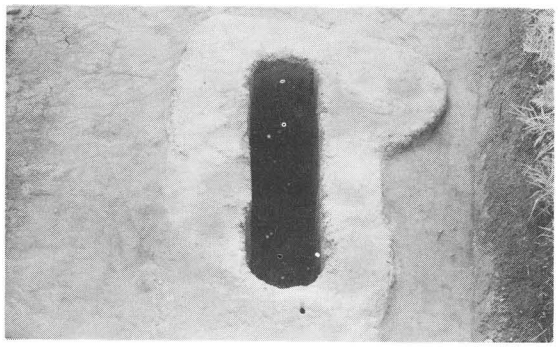
(41) 祭祀遺構（半截状況）

(42) 祭祀遺構（断面）

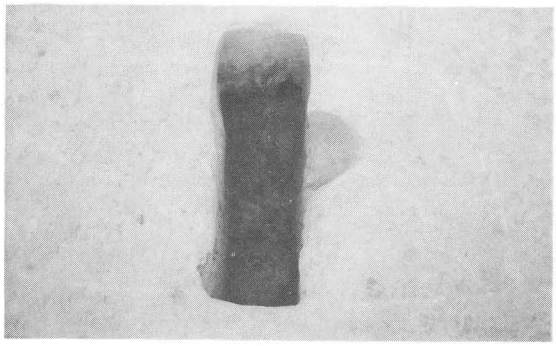


(43) 祭祀遺構完掘状況

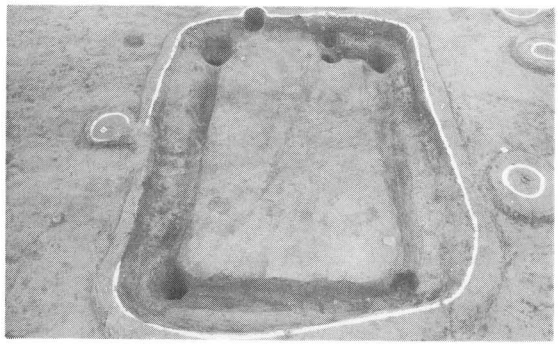
(44) 1号土坑（北より）



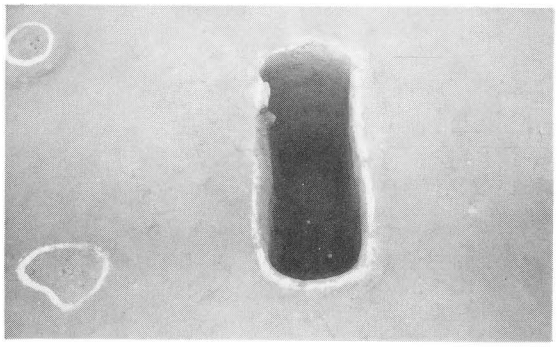
(45) 2号土坑（北より）



(46) 3号土坑（北より）



(47) 4号土坑（西より）



(48) 5号土坑（北より）